

に人に頼まれる日傭取などが住んで居た。山形あたりに生れて其處此處と流れ渡つて來ても故郷の言葉が失せないといふ元氣なお婆さんもあつた。八歳から十七歳まで——小學校から中學の二年まで、かれは六疊、八疊、三疊のその小さい家に住んで居た。小學校は町の裏通りにあつた。明神の華表から右に入つて、溝板を踏鳴らす細い巷路を通つて駄菓子屋の角を左に、それから少し行くと、向うに大きな二階造の建物と鞆や木馬のある運動場が見えた。生徒の騒ぐ音がガヤ／＼と聞えた。

校長の肥つた顔、校長次席の難かしい顔、體操の先生の莞爾した顔などが今もあり／＼と眼に見える。卒業式に晴衣を着飾つて來る女生徒の群の中にもかれの好きな少女が三四人あつた。紫の矢絰の衣服に海老茶の袴を穿いて來る子が中でも一番眼に残つて居る。其子は町外れの家から來た。農學校の校長の娘だといふことを聞いたことがある。清三が中學の一年に居る時一家は長野の方に移轉して行つて了つたので、其明かな眸を町の何處にも見出すことが出来なくなつたが、それでも今も時々思ひ出すことがある。一人は藝者屋の娘で、今は小瀧と言つて、一昨年一本になつて、町でも流行妓の中に數へられてゐる。通りで盛装した座敷姿に邂逅することなどがあると、『失禮よ。林さん、』などと鮮かに笑つて挨拶して通つて行く。中學卒業の祝の宴會にも遣つて來て、好い聲で歌をうたつたり、三絃を引いたりした。小畑が傍に坐つて、『小瀧は僕等の藝者だ。ナア小瀧、』などと言つて、酔つた顔を其前に押附けるやうにする。『厭よ、小畑さん、貴郎は昔から私を酷めるのねえ、覺えて居てよ、』と打つ眞似をした。其時、『貴

様は同級生の中で、誰が一番好きだ、』といふ問題がゆくりなく出た。小學校時分の同級生が大分其周圍に集つて居た。と小たきは少しも躊躇の色を示さずに、『それア誰だつてさうですわねえ、……無論林さん！』と言つた。小たきも酔つて居た。喝采の聲が嵐のやうに起つた。それから、小畑や櫻井や小島などに逢ふと、小瀧の話がよく出る。終には、『小瀧君何うした。健在かね。』などと書いた端書を送つて寄越した。『小瀧』といふ渾名をつけられて了つたのである。清三もまた面白半分に小瀧を『しら瀧』に改めて、其れを別號にして、日記の上表紙に書いたり手紙に署したりした。『歌妓しら瀧の歌』といふ五七調四行五節の新體詩を作つて、わざと小畑の處に書いて遣つたりした。

時には清三も眞面目に藝者といふものを考へて見ることもある。其時には屹度自分と小瀧とを引つけて考へて見る。ロマンチックな一幕などを描いて見ることもあつた。時にはまた節操も肉體も自から護ることの出来ない藝者の薄命な生活を想像して同情の涙を流すことなどもあつた。清三には藝者などのことはまだ解らなかつた。

かれはまた熊谷から行田に移轉した時のことを明かに記憶して居る。父親が餘所から歸つて來て、突然今夜引越をするといふ。明日になすつたら好いではありませんかと母親が言つたが、しかし晝間公然と移轉して行かれぬ譯があつた。熊谷に於ける八年の生活は、尠なからざる借金をかれの家に残したばかりであつた。父親は財布の錢——わづかに荷車二三臺を頼む錢をちやら／＼と音させながら出て行

くと、其跡で母親と清三とは、近所に知れぬやうに二人限りで荷造をした。長い行田街道には冬の月が照つた。二臺の車の影と親子四人の影とが淋しく黒く地上に印した。これが一家の零落した縮圖かと思ふと、清三は堪らなく悲しかつた。其夜行田の新居に辿り着いたのは、もう彼是十二時に近かつた。燈光も無い暗い大和障子の前に立つた時には、涙がホロ／＼とかれの頬に傳つて流れた。

けれど如何やうにしても暮して行かるゝ世の中である。それからもう四年は経過した。其狭い行田の家も、住馴れてはさしていぶせくも思はなかつた。かれはをり／＼行田の今の家と熊谷の家と足利の家を思つて見ることもある。

熊谷の家は今もある。老いた夫婦者が住つて居る。よく行つた松の湯は新しく普請をして見違へるやうに立派になつた。通りの荒物屋には矢張愛嬌者のかみさんが坐つて客に接して居る。種物屋の娘は庇髪などに結つてツンと澄まして歩いて行く。藥種屋の隠居は相變らず禿頭を振り立て、倅や小僧を叱つて居る。郵便局の爲替受口には、黒繻子とメリンスの腹合せの帯をしめた女が爲替の下渡を待かねてたゞきを下駄でコツ／＼言はせてゐる。其傍にお馴染の白犬が頭を地につけて眼を閉ぢて眠つてゐる。郵便集配人がジツクの行囊をかついで入つて来る。

小畑は郡役所に勤めて居る官吏の息子、小島は町で有名な木きな呉服店の息子、櫻井は行田の藩士で明治の初年に此地に地所を買つて移つて來た金持の息子、其他造酒屋、米屋、紙屋、裁判所の判事など

の息子達に同窓の友がいくらもあつた。そしてそれが大抵は小學校からの馴染なので、行田の友達の群よりも一層したしい處がある。小畑の家は停車場の敷地に隣つて居て、其處からは有名な熊谷堤の花が見える。櫻井の家は蓮正寺の近所で、お詣の鰐口の音が終日聞える。清三は熊谷に行くと、屹度この二人を訪問した。どちらの家の人々とも懇意になつて、我儘も言へば氣の置けない言葉も遣ふ。食事時分には黙つてゐても膳を出して呉れるし、夜遅くなれば友達と一緒に一つ蒲團にくるまつて寝た。

『何うした、いやに悄氣てるぢやないか。』

『何うかしたか。』

『まだ老い込むには早いぜ！』

『少しは何か調べたか。』

『何だか顔色が悪いぜ！』

熊谷に來ると、かうした活氣ある言葉を彼方此方から浴せかけられる。生々した友達の色には中學時代の面影がまだ残つてゐて、硝子窓の下や運動場や湯呑場などで話し合つた符牒や言葉が絶えず出る。又次のやうな話もした。

『Iは何うした。』

『まだ居る？ さうかまだ居るか。』

『仙骨は先生に熱中してゐるが、實に可笑しくつて話にならん。』

『先生、此頃、鬚など生して、ステッキなどついて歩いてゐるナ。』

『杉はすっかり色男になつたねえ、君。』

傍で聞いては鳥渡解らぬやうな話の仕方、それでぐんぐん話は解つて行く。

熊谷の町が行田、羽生に比べて賑かでもあり、商業も盛んであると同じやうに、此處には同窓の友で小學校の教師などになるものは稀であつた。角帯を緊めて、老舗の若旦那になつて了ふもの、他は、多くは他の高等學校の入學試験の準備に忙しかつた。活氣は若い人々の上に充ちて居た。これに引くらべて、清三は自分の意氣地のないのを常と感じた。熊谷から行田、行田から羽生、羽生から彌勒と段々活氣がなくなつて行くやうな氣がして、歸りはいつもさびしい思に包まれながらその長い街道を歩いた。

それに人の種類も顔色も語り合ふ話も皆違つた。同じ金儲の話にしても、彌勒あたりでは田舎者の吝嗇臭いことを言つて居る。小學校の校長さんと言へば、餘程立身したやうに思つて居る。また校長自らも鼻を高くしてその地位に満足して居る。清三は熊谷で逢ふ友達と行田で語る人々と彌勒で顔を合せると同僚とを比べて見ぬ譯には行かなかつた。かれは今の境遇を考へて、理想が現實に觸れて次第に崩れて行く一種のさびしさと怛しさとを痛切に感じた。

ある日曜日の午前に、かれは小畑と櫻井と伴れ立つて、中學校に行つて見た。中學校は町の外れにあ

つた。二階造の大きな建物で、木馬と金棒と鞆とがあつた。運動場には小倉の詰襟の洋服を着た寄宿舎にゐる生徒が處々にちらほら歩いて居るばかり、どの教室もしんとして居た。湯呑所には例の難かしい顔をした、かれ等が『般若』といふ綽名を奉つた小使が居た。舎監のネイ將軍も居た。宿直番に當つた數學の教師も居た。一階の階段、長い廊下、教室の黒板、硝子窓から梢だけ見える梧桐、一つとして追懐の伴はないものはなかつた。かれ等は其時分のことを語りながら彼方此方と歩いた。

宿直室で一時間ほど話した。同級生のことを聞かれるまゝ其知れる限りを三人は話した。東京に出たものが十人、國に残つて居るものが十五人、小學校教師になつたものが八人、他の五人は不明であつた。三人は講堂に行つてオルガンを鳴らしたり、運動場に出てボールを投げて見たりした。

別れる前に、三人は町の蕎麥屋に入った。いつもよく行く青柳庵といふ家である。奥の間は瀟洒した小庭に向つて、楓の若葉は人の顔を青く見せた。ざるに生玉子、銚子を一本つけさせて、三人はさも楽しさうに飲食した。

『此間、小瀧に逢つたぜ！』小畑は清三の顔を見て、『先生、此頃中々流行るんださうだ。土地の者では一番賣れるんだらうよ。湯屋の路地を通ると、今、座敷に出る處か何かで、にこ／＼して遣つて來たつて。』

『林さんは！ つて聞かなかつたか？』

傍から櫻井が笑ひながら言つた。

清三も笑つた。

『Yは何うしたねえ。』

清三は續いて聞いた。

『相變らず御熱心さ。』

『もうエンゲイジが出来たのか。』

『當人同士は出来てるんだらうけれど、家では兩方共難かしいといふ話だ。』

『面白いことになつたものだねえ。』と清三は考へて、『Yは一體Vのラヴァだつたらう。それがさういふ風になるとは實際運命といふものは解らんねえ。』

『Vは何うしたえ。』と櫻井が小畑に訊く。

『先生、足利へ行つた。』

『會社にでも出たのか。』

『何でも機業會社とか何とかいふ處に出るやうになつたんださうだ。』

三人はお替りの天ぷら蕎麥を命じた。

『Artの君は何うした?』

小畑が訊いた。

『浦和に居るよ。』

『それは知つてるさ。何うしたつて言ふのはさういふ意味ぢやないんだ。』

『うむ、さうか——』と清三は點頭いて『まだ、もとの通りさ。』

『加藤も臆病者だからなア。』

と小畑も笑つた。

一本の酒で、三人の顔は赤くなつた。勘定は臺口から銀貨と銅貨をぢやらつかせながら小畑がした。可愛い娘の子が釣錢と蕎麥湯と楊子とを持つて來た。

其日の午後四時過には、清三は行田と羽生の間の田舎道を彌勒へと歩いて居た。野は日に輝いて、向うの村の若葉は美しく鮮かに光つた。けれど心は寂しく暗かつた。かれは希望に充されて通つた熊谷街道と、さびしい心を抱いて歸つて行く彌勒街道とを比べて見た。若い元氣の好い友達が羨しかつた。

十四

六月一日、今日成願寺に移る。かう日記にかれは書いた。荻生君が主僧といろく打合をして呉れたので、話は容易に纏つた。無人で食事の世話まではして上げることが出来ないが、家にあるもので入用

なものは何でも御遣ひなさい。かう言つて、主僧は机、火鉢、座蒲團、茶器などを貸して呉れた。

本堂の右と左に六疊の間があつた。右の室は日が當つて冬は好いが、夏は暑くつて仕方がない。で、左の間を借りることにする。和尚さんは障子の合ふのを彼方此方から外して来てはめて呉れる。上さんはバケツを廊下に持出して疊を拭いて呉れる。机を真中に据ゑて、持つて来た本箱を傍に置いて、角火鉢に茶器を揃へると、それで立派な心地の好い書齋が出来た。荻生君は丁度郵便局が閑なので、同僚に跡を頼んで遣つて来て、庭に生えた草などを撈つた。清三が學校から退けて歸つて来た時には、もうあたりは綺麗になつて、主僧と荻生君とは茶器を中央に、さも室の明るくなつたのを楽しむといふ風に笑つて話をして居た。

『これは綺麗になりましたな、宛で別の室のやうになりましたな。』

かう言つて、清三は莞爾した。

『荻生さんが草を取つて呉れたんですよ。』

主僧が笑ひながら言ふと、

『荻生君が？ それは氣の毒でしたねえ。』

『いや、草を取つて、庭を綺麗にするといふことは趣味があるものですよ、』と荻生君は言つた。

其處に餅菓子や竹の皮に入つたまゝ出してあつた。これも荻生君のお土産である。清三は、『これは御

馳走ですな、』と言ひながら、一箇、二箇、三箇まで揃んで、むしゃく〜と食つた。辨當腹で、長い路を歩いて来たので、少なからず飢を覚えてゐたのである。

其日の晚餐は寺で調理して呉れた。里芋と筍の煮付、汁には、長けたウドが入られてあつた。主僧は自分の分も此處に持つて來させて、ビールを二本奢つて、三人して團欒して食つた。文學の話、人生問題の話、近所の話、小學校の話、主僧のお得意の禪の話も出た。庭に近く柱に凭つた主僧の顔が白く夕暮の空氣に見えた。

長い廊下に小僧が急ぎ足で此方に遣つて來るのが見えたが、やがて入つて来て、一通の電報を主僧に渡した。

急いで封を切つて讀み終つた主僧の顔色は變つた。

『大島孤月が死んだ！』

『孤月さんが——』

二人も驚愕の目を睜つた。

大島孤月と謂へば、文學好の人は大抵は知つて居た。某書肆の女婚で、作家としてよりも書肆の支配人としての勢力の大きな人であつた。昨年の秋泰西漫遊に出かけて、一月ほど前に歸朝した。送別會と歓迎會、其記事はいつも新聞紙上を賑はした。雑誌にもいろいろ〜なことが書いてあつた。此處の主僧が

まだ東京に居る頃は、殊にこの人の世話になつて、原稿を買つて貰つたり其家に置いて貰つたりした。
『もう今日は行かれませんか。』

『さう、馬車はありませんしな、俵ちや大變ですし……それに汽車に乗つても、彼方へ着いてから困るでせう。』

主僧は考へて、

『明日にしませうかな。』

『明日で好いなら——明日朝の馬車で久喜まで行つて、奥羽線の二番に乗る方が好いですな。』

『行田から吹上の方が便利ぢやないでせうか。』

『いや、久喜の方が便利です。』

と萩生君は言つた。

主僧はそれと心を定めたらしく、やがて、『人間といふものはいつ死ぬか解りませんが、』と慨嘆して、『鳥渡病氣で病院にはひつてるといふことは聞きましたけれど、死ぬほどとは夢にも思はなかつたですよ。先生など幸福ではあるし、得意でもあるし、これから益々自分の懷抱を實行して行かれる身なんですから。』かう言つて、自分の田舎寺に隠れた心の動機を考へて、主僧は黯然とした。

『世の中は蝸牛角上の争鬪——私は東京に居る頃には、つくづくそれが厭になつたですよ。人の弱點

を利用したり、朋黨を作つて人を陥れたり、一步でも人の先に出よう出ようとのみ躍躍して居る。實に淺ましく感じたですよ。世の中は好いが好いぢやない、悪いが悪いぢやない、幸福が幸福ぢやない。何んな人でも矢張人間は人間で、それ相應の安慰と幸福とはある。それに價値もある。何も名譽を逐つて一生を齷齪暮すにも當らない。それよりも、人間としての理想のライフを送る方が何れほど人間として豪いか知れない、何んなに零落して死んでもその方が意味がありますからなア。』

『本當にさうですとも。』

清三は主僧の言葉に引込まれるやうな氣がした。

『不仕合せな人だつた!』

と主僧は思はず感激して獨言のやうに言つた。得意なる地位を知つてただけそれだけ、その背景が悲しかつた。平生戯談ばかり言ふ男で、軽い皮肉を常に人に浴せ懸けた。まだ三十四五であつたが、世の中の辛酸を嘗めつくして、其圭角がなくなつて、心持は四十近い人のやうであつた。養子としての淋しい心の煩悶をも思ひ遣つた。『何の彼のと言つて、誰も皆な死んで了ふんですな……それを考へると、本當に詰らない。』主僧は深く動かされたやうな調子で言つた。

こんなことで其夜は一室の空氣が何となく低い悲哀で包まれた。やがて主僧は庫裡へ引上げたが、清三と萩生君との話も理に落ちて了つて、いつものやうに快活に語ることが出来なかつた。二人は暗い洋

燈に對して久しく黙した。

翌日主僧は早く出懸けた。

清三は大島孤月の病死と葬儀とに就いての記事をそれから毎日々々新聞紙上で見た。かれは其度毎にいろ／＼な思ひに撲たれた。其人の作には感心しては居らぬが、出版者としての勢力が文壇に及ぼす關係などを想像して見たり、自分の崇拜してゐる明星一派の不遇などをそれに比べて考へて見たりした。時には、『兎に角不仕合せと言つても死んでかうして新聞に書かれ、ば光榮である、』などと考へて、音も香もなく生れて生きて死んで行く普通の多數の人々の上をも思ひ遣つた。其の間に雨が降つたり風が吹いたりした。雨の降る日には本堂の四面の新緑が殊に鮮かに見えて、庫裡の高い屋根にかけたトタンの樋からビシヨ／＼雨滴の落ちるのを見た。風の吹く日には、裏の林がざは／＼鳴つて、何だか海近くにも住んで居るやうに思はれた。辨當は朝に晩に、馬車繼立所の傍の米すしといふ小さな飲食店から赤いメリンスの帯を締めた十三四の娘が運んで來た。行田の家からもやがて夜具や机や本箱などをとゞけてよこした。

かれは寺から町の大通りへ眞直ぐに出て、うどんひもかわと障子に書いた汚い飲食店の角を裏通りに入つて、細い煙筒に白い薄い煙のあがる碓氷社分工場の養蠶所や、怪しげな軒燈の出で居る料理屋の前などを通つて、それから用水の橋の袂へといつも出る。時には大越に通ふ馬車が折よく其處に居て、廉

くまけて乗せて貰つて行くことなどもあつた。

五六日して主僧は東京から歸つて來た。葬儀の様子は新聞で見えて知つてゐたが、詳しく聞いて、更に鮮かに其さまを前に見るやうな氣がした。文壇の大家小家は悉く雨を衝いて其葬式に跟いて行つたといふ。雨がザア／＼降つて、新緑の中に造花生花のさまざまの色彩がさながら繪のやうに對照を爲したといふ。殊に、寺の本堂が狭かつたので、中に入れなかつた人々は、蛇の目傘や絹張の蝙蝠傘を雨滴のビシヨ／＼落ちる庇にさしかけて立つて居た。讀經は長かつた。それがすむと形のごとき焼香があつて、やがて棺は裏の墓地へと運ばれる。墓地への路には新しい薙が敷きつめられて、其處を白無垢や羽織袴が雨にぬれて往つたり來たりする。小説の某大家は柱に凭つて、悲しさうな顔をして居る。生前最も親しかつた某畫家は羽織を雨に滅茶々々にして、彼方此方と周旋して歩いて居る。『君、實際、感に打たれましたよ。苦勞を仕抜いて、漸く得意の境遇になつて、これから多少志も遂げようといふ時に當つて何が來たかと思ふと、死！』かう若い和尚さんは話した。

『名譽を遂つて、都會の塵に塗れたつて、仕方がありませんな……何んなに得意になつたつて、死が一度來れば、人々から一滴の涙をそゝがれるばかりぢやありませんか。死んでからいくら涙をそゝがれたつて仕方がない！』

主僧の眉は昂つて居た。

其夜は遅くまで、清三はいろいろなことを考へた。『名譽』得意の境遇』それをかれは眼の前に仰いで居る。若い心は唯それのみあこがれて居る。けれど今宵は何だかその希望と野心の上に一つの新しい解決を得たやうに思はれる。かれは綴の切れた藤村の『若菜集』を出して讀み耽つた。

本堂には如來様が寂然として居た。

十五

裏の林の中に葦の生えた濕地があつて、元池であつた水の名残が黒く錆びて光つて居る。六月の末には、剖葦が何處からともなく其處へ來て鳴いた。

寺では慰みに蠶を飼つた。庫裡の八疊の一と間は棚や庭で一杯になつて、溫度を計る爲めの寒暖計が柱に懸けられてあつた。上さんが白い手拭を被つて、朝に夕に裏の畑に桑を摘みに行く。雨の降る日には、其時間を待つて和尚さんも一緒になつて桑摘の手傳ひをして遣る。ぬれた緑の葉は勝手の廣い板の間に山のやうに積まれる。それを小僧が一枚々々拭いて居ると、和尚さんは傍で桑切庖丁で丹念に細く刻む。

蠶の上がりかける頃になると、町は俄に活氣を帯びて來る。平生は火の消えた様に靜かな裏通りにも、繭買入所などといふヒラ／＼した紙が張られて、近在から賣りに來る人々が多く集つた。頬鬚の生えた角

帶の仲買の四十男が秤ではかつて、それから庭へと、その白い美しい繭をあけた。相場は日毎に變つた。銅貨や銀貨をぢやら／＼と音させて、景氣よく金を拂つて遣つた。料理店では三味線の音が晝から聞えた。

ある日曜日であつた。郁治が土曜日の晩から來て泊つてゐた。『行田文學』の初號が出來て持つて來たので、昨夜から文學の話が盛んに出た。處が、丁度十時過、山門の鋪石通にガラ／＼と俣の音がした。つひぞ今まで俣の入つて來たことなどは無いので、不思議に思つて、清三が本堂の障子を明けて見ると、白い羅紗の脊廣にイタリヤンストロウの夏帽子を被つた肥つた男と白がかつた夏外套を被つた脊の高い男とが庫裡の入口に俣をつけて、今しも下りようとする處であつた。やがて小僧が取次ぐと、和尚さんの姿が其處に出て來た。久濶の友に訪はれた喜悅が、聲やら言葉やら態度やらに顯はれて見えた。

やがて其容は東京から來た知名の文學者で、一人は原杏花、一人は相原健二といふ有名な『太陽』の記者だといふことが解つた。いづれも主僧が東京に居た頃の友達である。

清三の室は中庭の庭樹を隔て、庫裡の座敷に對して居たので、客と主僧との談話して居るさまが明かに見えた。緑の葉の間に白い羅紗の夏服がちら／＼したり、をり／＼聲高く快活に笑ふ聲がしたりする。其洋服や笑聲は若い青年に取つては此上もない美望の種であつた。

『原つて言ふ人はあんな肥つた人かねえ。あれであんなやさしいことを書くとは思はなかつた。』

郁治はかう言つて笑つた。

勝手へ行つて見ると、上さんと小僧とは御馳走の支度に忙しさうにして居た。和尚さんも時々出て来ていろく指揮をする。米ずしの若い衆は岡持に鯉のあらひを持つて来る。通りの酒屋は貧乏徳利を下けて来る。小僧は竈の下と据風呂の釜とに火を燃し付ける。活気はめづらしくがらんとした臺所に充ち渡つた。

酒はやがて始まつた。段々話し聲が高くなつて来た、和尚さんもいつもに似ぬ元氣な聲を出して愉快さうに笑つた。

正午近くになると大分酔つたらしく、笑ふ聲が絶えず聞えた。縁側から廁へ行く客の顔は火のやうに赤かつた。やがて和尚さんの拙い詩吟が出たかと思ふと、今度は琵琶歌かとも思はれるやうな一種の朗らかな吟聲が聞えた。

若い友達は伴立つて町に出懸けた。懐に金はないが、月末勘定の米ずしに行けば、酒の一二本はいつも飲むことは出来た。其の場末の飲食店の奥の六疊には、衣服やら小兒の襦袢やらが一杯に散らかされてあつたが、それをかみさんが急いで片付けて呉れた。古箆笛や行李などのある傍で狭い猫の額のやうな庭に對して、なまりぶしの堅い煮付でかれ等は酒を飲んだり飯を食つたりした。

歸りに、菰生君を郵便局に訪ねて見るといふことになつたが、こんなに赤い顔で、町の大通りは歩けな

いと言ふので、桑の茂つた麥の半ば刈られた裏通りの田圃を行つた。菰生君は熊谷に行つて居なかつた。二人は引かへして野を歩いた。小川には青い藻が浮いて、小さな雑魚がスイ〜泳いで居た。

寺に歸ると、座敷ではまだ酒を飲んで居た、騒ぐ聲が嵐のやうに聞える。丈の高い方が和尚さんの手を引張つて、何處へか連れて行かうとする。洋服の原が跡から押す。和尚さんはいつか僧衣を着せられて居る。『まア、好いよ、好いよ、君等がそんなに望むなら、お經位讀むさ、その代り君等が木魚を叩かなくつてはいかんぜ!』

和尚さんも少なからず酔つて居た。

『よし、よし、木魚は己が叩く。』

と雑誌記者は言つた。

三人は凭りつ凭られつして、足元危く、長い廊下を本堂へと遣つて来る。庫裡からは上さんと小僧とが顔を出して笑つて其の醉態を見て居る。三人は廊下から本堂に入らうとしたが、階段の處で躓いて、將棊倒しにころ〜と折重つて倒れた。笑ふ聲が盛んにした。

雑誌記者は槌を取つて木魚を叩いた。ボク〜ボク〜、中々其調子が好い。和尚さんも原といふ文學者もそれを見て、『これは旨い、叩いたことがあると見えるな、』と笑つた。雑誌記者は木魚を叩きながら、『それはさうとも、これで寺の小僧を三年したんだから。』かう言つて、トラヤアヤア〜とお經

を讀む眞似をした。

『和尚——お經を讀まなくつちやいかんぢやないか。』

こんなことを言つて尙頻りに木魚を叩いた。

主僧と原とは如來様の前に立つたり、古い位牌の前に佇んだりして、いろ／＼な話をした。歴代の寺僧の大きな位牌の中央に、難かしい顔をした本寺中興の僧の木像が据ゑてあつた。それは恐ろしくむき出すやうな眼をしてゐた。和尚さんは其僧のことに就いて語つた。本堂を再建したことや、その本堂が先代の時に焼けて了つたことや、此人の弟子に越前の永平寺へ行つた人があつたことなどを話した。メリンスの敷物の上に鐘が載せられてあつて、其傍に、頭の禿けた賓頭願尊者があつた。原は鐘をカンカンと鳴らして見た。

雜誌記者から讀經を強ひられるので、和尚さんは隙を見て庫裡の方へ遁けて行つて了つた。酔つた二人は木魚と鐘とを自暴に叩いて笑つた。

ドタ／＼とけた／＼ましい音をさせて、やがて二人は廊下から庫裡へ行つて了つた。後で、六疊に居る若い友達に笑つた。

『文學者なんて言ふものは存外暢氣な無邪氣なものだねえ。』

清三はかう言ふと、

『想像して居たのとは丸で違ふね。』

若い人々には、兼々其名を聞いて想像して居た文學者や雜誌記者がかうした子供らしい眞似をしようとは思ひも懸けなかつた。しかしかうしたことをする心持や生活は、かれ等には充分には解らぬながらも羨しかつた。

東京の客は一夜泊つて、翌日の正午、降り頻る雨を衝いて乗合馬車で久喜に向つて立つた。袴を濡して清三が學校から歸つて來て、火種を貰はうと庫裡に入つて見ると、主僧はさびしさうにほつねんとひとり机に坐つて書を見て居た。

剖葦は頻りに鳴いた。梅雨の中にも、時々晴れた日があつて、鮮かな碧の空が鼠色の雪の中から見えることもある。美しい光線が漲るやうに裏の林に射し渡ると、緑葉が蘇つたやうに新しい色彩をあたりに見せる。芭蕉の廣葉は風に顛へて、山門の壁の處には蜥蜴が日に光つてちよろ／＼して居る。前の棟割長屋では、垣から垣へ物干竿をつらねて、汚い襦袢をならべて干した。栗の花は多く地に落ちて、泥に塗れて、汚く人に踏まれて居る。蚊はもう夕暮には軒に音を立てるほど集つて來て、夜は蚊遣火の烟が家々から靡いた。清三は一圓五十錢で、一人寝の綿蚊帳を買つて來て、机を其中に入れて、ランプを臺の上に載せて外に出して、その中で毎夜遅くまで書を讀んだ。自分の周圍には——日毎に寄せられる友達の手紙には、一つとして將來の學問の準備に就いて言つて來ないものはない。高等師範に志して

るるものは親友の郁治を始めとして、三四人はあるし、小島は高等學校の入學試験を受けるので此頃は忙しく暮して居ると言つて來るし、北川は士官學校に入る準備の爲めに九月には東京に出ると言つてゐるし、誰とて遊んで居るものはなかつた。清三はこれに勵まされて、いろ／＼な書を読んだ。主僧に頼んで、英語を教へて貰つたり、其書庫の中から論理學や哲學史などを借りたりした。机の周圍には、文藝俱樂部や明星や太陽があるかと思ふと、學校教授法や通俗心理學や新地理學や、代數幾何の書などが置かれてある。主僧が早稻田に通ふ頃讀んだといふシエークスピヤのロメオやテニソンのエノツクアアデンなども其中に交つて居た。

若いあこがれ心は果てしなかつた。瞬間毎によく變つた。明星をよむと澁谷の詩人の境遇を思ひ、文藝俱樂部をよむと、長い小説を巻頭に載せる大家を思ひ、友人の手紙を見ると、然るべき官立學校に入學の計畫がして見なくなる。時には、主僧にプラトンの『アイデア』を質問してプラトニククラヴなどといふことを考へて見ることもあつた。『行田文學』にやる新體詩も、その狭い暑苦しい蚊帳の中で、外のランプの光が蒼い影を透してラチ／＼する机の上で書いた。

學校の校長は、檢定試験を受けることを常に勧めた。『資格さへあれば、月給もまだ上げることが出来る。何うです、林さん、譯がないから、遣つて置きなさい！』と言つた。

此頃では二週間位行田に歸らずにゐることがある。母が待つて居るだらうとは思ふが、懐が冷かであ

つたり、二里半を歩いて行くのが大儀であつたり、それよりも少しでも勉強しようと思つたりして、常に寺の本堂の一間に土曜日曜を過した。しかしこれと謂つて、勉強らしい勉強をもしなかつた。土曜日には小畑が熊谷から來て泊つて行つた。郁治が三日位續けて泊つて行くこともあつた。それに、荻生君は毎日のやうに遣つて來た。學校から歸つて見ると、彼方此方を明放して、顔の上に團扇を載せて、好い心持をして晝寢をしてゐることもある。かれは郵便局の閑な時をねらつて同僚に跡を頼んで、何ぞと云つては、よく寺に遊びに來た。

若い二人はよく菓子を買つて來て、茶を煎れて飲んだ。くす餅、あんころ、すあまなどが好物で、月給の下りた時には、清三は屹度郵便局に寄つて、荻生君を誘つて、角の菓子屋で餅菓子を買つて來る。三度に一度は、『和尚さん、菓子はいかゞ、』と庫裡に主僧を呼びに來る。清三の財布に金のない時には荻生君が出す。荻生君にもない時には、『和尚さん甚だ濟みませんが、一三日の中におかへししますから、五千錢ほど貸して下さい。』などと言つて清三が借りる。不在に主僧が其室に行つて見ると、竹の皮に食ひ餘しの餅菓子が二つ三つ残つて、それに一杯に蟻がたかつて居ることなどもあつた。

梅雨の間は二里の泥濘の路が辛かつた。風のある日には吹晒らしの平野のならひ、糸のやうな雨が下から上に降つて、新調の夏羽織も袴もしどろにぬれた。後には大抵時間を計つて行つて、十錢に負けて貰つて乗合馬車に乗つた。ある日、其女も同じ馬車に乗つて發戸河岸の角まで行つた。其女と謂ふのは、

一月ほど前から、町の出外れの四辻でよく出逢つた女で、矢張小學校に勤める女教員らしかつた。庇髪に葦色の袴を穿いて海老茶のメリンスの風呂敷包をかゝへて居た。其四辻には庚申塚が立つて居た。此間郁治と一緒に彌勒に行く時にも例の如く其女に逢つた。『何うしてあゝいふ素振をするのか僕には分らんねえ、』と清三が笑ひながら言ふと、『しつかりしなくつちやいかんよ。君、』と郁治は聲を擧げて笑つた。其時、何處に勤めるのだらうといふ評判をしたが、馬車と一緒に乗合せて、發戸にある井泉村の小學校に勤める人だといふことが解つた。色の白い鼻の隆い十九位の女であつた。

雨の盛んに降る時には、學校の宿直室に泊ることもあつた。學校に出てから、もう三月にもなるので、大分教師馴れがして、郡視學に參觀されても赤い顔をするやうな初心なところも除れ、年長の生徒に馬鹿にされるやうなこともなくなつた。行田や熊谷の小學校には、校長と教員との間に随分烈しい暗闘があるとかねて聞いて居たが、彌勒のやうな田舎の學校には、さうした難かしいこともなかつた。師範出の杉田といふのが厭に威張るのが癢に觸るが、自分は彼奴等のやうに校長になるのを唯一の目的に一生小學校に勤めてゐる人間とは種類が違ふのだと思ふと、別にヤキモキする必要もなかつた。校長も何方かといへば、氣が小さく神經過敏に過ぎるのが厭だが、しかし概して温良な君子でわる氣といふやうな處は少しもなかつた。關さんは例の通りの好人物、大島さんは話し好きの合ひ口——清三に取つてこの小學校は餘り居心の悪い方ではなかつた。

清三は一人でよくオルガンを弾いた。型の小さい廉いオルガンで、音もさう大して好くはなかつたが、自から物好きに歌などを作つて、覺束ない音樂の智識で、譜を合せて見たり何かする。藤村詩集にある『海邊の曲』といふ譜のついた歌はよく調子に乗つた。それから若菜集の中の好きな句を選んで譜をつけて弾いても見た。梅雨の降り頻る夕暮の田舎道、小さなしんとした學校の窓から、さうしたさまざまの歌が絶えず聞えたが、しかし耳を傾けて行く旅客もなかつた。

清三の教へる室の窓からは、羽生から大越に通ふ街道が見えた。雨に濡れた汚い布を四面に垂れた乗合馬車がをり／＼喇叭を鳴らしてガラ／＼と通る。田舎娘が赤い蹴出を出して、メリンスの帶の後姿を見せて番傘をさして通つて行く。晴れた日には、番臺を頭の上に載せて太鼓を叩いて行くあめ屋、夫婦づれで編笠を被つて脚絆をつけて歩いて行くホウカイ節、七色の護謨風船を飛ばして賣つて歩く爺、時には美しく着飾つた近所の豪家の娘なども通つた。縣廳の役人が俵を五六臺並べて通つて行つた時には先生も生徒も皆な授業を餘所にして、其威勢の好いのに見惚れて居た。

清三の父親は、何うかすると、商賣の都合で、此近所まで來ることがある。縞の單衣に古びた透綾の夏羽織を着て、半ば禿けだ頭には帽子も被らず、小使部屋からこつそり入つて來て、『清三は居ましたか』と訊いた。初めは流石にかうした父親を同僚に見られるのを恥かしく思つたが、後には馴れて、それほど厭とも思はなくなつた。近所に用事が残つて居ると言ふので、清三は寺に歸るのを止めて、親子一緒

に煎餅蒲團にくるまつて宿直室に寝ることなどもあつた。

其時は屹度二人して手拭を下けて前の錢湯に行く。小川屋から例の娘が辨當を拵へて持つて来る。食事がすむと、親子は友達のやうに睦まじく話した。家の困る話なども出た。ありもせぬ財布から五十錢借りられて行くことなどもある。

七月に入つても雨は續いて降つた。晴間には日が赫と照つて、鼠色の雲の絶間から碧の空が見える。畑には里芋の葉が大きくなり、玉蜀黍の廣葉がガサ／＼と風に靡いた。熊谷の小島は一高の入學試験を受けに東京に出懸けたが、時々繪葉書で状況を報じた。英語が難かしかつたことなどを知らせて來た。郵便脚夫は毎日雨にぬれて山門から本堂に遣つて來る。若い心にはどのやうなとても面白い種になるので、彼方此方から端書や手紙が三四通は必ず届いた。喝！——と一字書いた端書があるかと思ふと、蕎麥屋で酒を飲んだ席上で書いた熊谷の友達の手紙などもある。石川からは、相變らずの明星攻撃、文壇照魔鏡といふ澁谷の詩人夫妻の私行を許した冊子をわざと送り届けて寄越した。中にも郁治から來たのが一番多かつた。戀の悩みは片時もかれをして心を靜かならしめることが出來なかつた。郁治は或時は希望に輝き、或時は絶望に悶え、或時は自己の心の影を追つて、かうも思ひあゝも思つた。清三の心もそれにつれて動搖せざるを得なかつた。自己の失戀の苦痛を包む爲めには、友の戀に對する同情の文句がおのづから誇大的にならざるを得なかつた。——獨り悶ゆるの悲哀は美しきかな、君が思ひに泣かぬこと

はあらじ——態と和文調に書いて、末に『この子もと罪のきづなのわなは知らず迷うて來しを捕はれの鳩』といふ歌を書きなどした。浦和の學校にゐる美穂子の寫眞が机の抽出の奥に藏つてあつた。雪子と今一人きよ子といふ學校友達と三人して撮した手札形で、美穂子は腰かけて花を持つて居た。それを雪子のアルバムから貰はうとした時、雪子は、『それはいけませんよ。變な風に寫つて居るんですもの、』と言つて容易にそれを呉れると言はなかつた。雪子は被布を着て、物に驚いたやうな頓狂な顔をして居た。それに引かへて、美穂子は明るい眼と肩とを分明と見せて、愛嬌のある微笑を口元に湛へて居た。清三は讀書に勞れた時など、折々それを出して見る。雪子と美穂子とを比べて見ることもある。此頃では雪子のことを考へることも多くなつた。其時は屹度『何故あゝしら／＼しい、取澄した風をして居るんだらう。今少し打解けて見せても好きさうなものだ、』と思ふ。郁治の手紙は小さい文箱に藏つて置いた。

前の土曜日には、久し振で行田に歸つた、小畑が熊谷から遣つて來るといふ便があつたが、運わるく日曜が烈しい吹降なので、郁治と二人樋から雨滴が瀧のやうに落ちる暗い窓の下で暮した。

次の土曜日には、羽生の小學校に朝から講習會があつた。校長と大島と關と清三と四人して出懸けることになる。大きな講堂には、近在の小學校の校長やら訓導やらが大勢集つて、浦和の師範から來た肥つた赤いネクタイの教授が、兒童心理學の初歩の講演をしたり、尋常一年生の實地教授をして見せたりした。教員達は數列に並んで鳴りを靜めて謹聽して居る。志多見といふ所の校長は縣の教育界でも有名

な老教員だが、銀のやうな白い髻を撫でながら、切口上で、義務とでも思つてゐるやうな質問をした。肥つた教授は顔に微笑を湛へて、一々丁寧に其質問に答へる。十一時近く、それが済むと、今度は郁治の父親や水谷といふ難かしいので評判な郡視學が、教授法に就いての意見やら、教員の心得に就いての演説やらをした。梅雨は二三日前から上つて、暑い日影はキラ／＼と校庭に照りつけた。扇の音がバタ／＼と其處にも此處にも聞える。女教員の白地に董色の袴が眼に立つて、額には汗が見えた。成願寺の森の中の蘆荻はもう人の肩を没するほどに高くなつて、割葦が時を得顔に喧しく鳴く。

講習會の終つたのはもう十二時に近かつた。詰襟の服を着けた、白綿の袴に透綾の羽織を着たさま／＼の教員連が、校庭から門の方へぞろ／＼出て行く。校庭には有志の寄附した標本用の樹木や草花が其名と寄附者の名とを記した札をつけられて疎らに植ゑられてある。石榴の花が火の燃るやうに赤く咲いて居るのが誰の眼にも着いた。樹には黄楊、椎、檜、花には石竹、朝顔、遊蝶花、萩、女郎花などがあつた。寺の林には蟬が鳴いた。

『湯屋で、一日遊ぶやうな處が出来たつて言ふぢやありませんか、林さん、行つて見ましたか。』
校門を出る時、校長はかう言つた。

『さうですねえ、廣告が彼方此方に張つてありましたねえ、何か浪花節があるつて言ふぢやありませんか。』

大島さんも言つた。

上町の鶴の湯にさういふ催があるのを清三も聞いて知つて居た。夏の間、二階を開放して、一日湯に入つたり晝寝でもしたりして遊んで行かれるやうにしてある。氷も菓子も麥酒も饅頭も賣る。鳥渡した晝飯位は食はせる支度も出来てゐる。浪花節も晝一度夜一度あるといふ。此の二三日梅雨が上つて暑くなつたので非常に客があると聞いた。主僧は昨日出かけて半日遊んで来て、『何うせ、田舎のことだから、碌なことは出来はしないけれど、鳥渡遊びに行くには好い。貞公、うまい金儲を考へたもんだ、』と前の地主に話して居た。

『何うです、林さんに一つ案内して貰はうぢやありませんか。丁度晝時分で、腹も空いてゐる……。』
校長はかう言つて同僚を誘つた。皆な賛成した。

上町の鶴の湯は賑かであつた。赤いメリンスの帯を緊めた田舎娘が出たり入つたりした。彼方此方から贈つたピラが一杯に下けてあつて、貞さんへといふ大きな字が其處にも此處にも見えた。氷見世には客が七八人も居て、此家の上さんが襷をかけて、汗をだら／＼流して、せつせと氷をかいて居る。

先生達は二階に通つた。幸ひにして客はまだ多くなかつた。近在の婆さんづれが一組、温泉にでも来たつもりで、ゆもじ一つになつて、別の室にごろ／＼して居た。八疊の廣間には、中央に浪花節を語る高座が出来て居て、其處にも紙や布のピラがヒラ／＼靡いた。室は風通しが好かつた。奥の四疊半は疊

は汚いが、青田が見通しになつてゐるので、四人は其處に陣取つた。

一風呂入つて、汗を流して来る頃には、午飯の支度がもう出来て居た。赤い襷をかけた家の娘が茶湯臺を運んで来た。肴はナマリブシの固い煮附と胡瓜もみと鶏卵にさゝけ汁とであつた。しかし人々に取つては、これで結構な御馳走であつた。校長は洋服の上衣もチッキもネクタイもすつかり取つて、汚れ目の見える肌褌袴一つになつて、さも心地の好きさうな様子で跌坐をかいて居たが、

『皆な平らに、跌坐をかき給へ。關君、何うです、服で窮屈にして居ては仕方がない。』かう言つて笑つて、『私が一つビールを奢りませう。たまには愉快に話すのも好うござんすから。』

やがてビールが命ぜられる。

『姐さん、氷をブツカキにして持つて来て下さいな。』

娘はかしこまつて下りて行く。校長が關さんのコップにつがうとすると、かれは手でコップの蓋をした。

『一杯飲み給へ、一杯位飲んだつて何うもなりやしないから。』

『いゝえ。もう本當に澤山です。酒を飲むと、後が苦しくつて……』

とコップを脇にやる。

『關君は本當に駄目ですよ。』

と言つて、大島さんは波々といひだ自分の麥酒を一呼吸に飲む。

『弱卒は困りますな。』

かう言つて校長は自分のに波々と注いだ。泡が山を爲して滴れ懸るので、狼狽て口をつけて吸つた。娘が其處にブツカキを井に入れて持つて来た。皆が一つづつ手でつまんで麥酒の中に入れる。酒を飲まぬ關さんも大きいのを一つ取つて、口の中に頬張る。やがて校長の顔も大島さんの顔も見事に赤くなる。

『講習會なんて駄目なものですな。』

校長の氣焔がそろ／＼出始めた。

大島さんがこれに相槌を打つた。各小學校の評判や年功加俸の話などが出る。郡視學の融通の利かない失策談が一座を笑はせた。けれど清三に取つては、此等の物語は耳にも心にも遠かつた。年齢が違ふからとは言へ、かうした境遇にかうして安んじて居る人々の氣が知れなかつた。かれは將來の希望にのみ生きて居る快活な友達と、これ等の人達との間に横はつて居る大きな溝を考へて見た。

『まじ／＼してゐれば、自分もかうなつて了ふんだ！』

この考へは既に幾度となくかれの頭を悩ました。これを考へると、いつも胸が痛くなる。居ても立つても居られないやうな氣がする。小さい家庭の係累などの爲めにこの若い燃ゆる心を犠牲にするには忍び

ないと思ふ。此間も郁治と論じた。『豪い人は豪くなるが好い。世の中には百姓もあれば、郵便脚夫もある。巡査もあれば下駄の齒入屋もある。豪くならんから生きて居られないといふことはない。人生はわれ／＼の考へて居るやうなせつぱつたものではない。もつと樂に平和に渡つて行かれる者だ。うそと思ふなら、世の中を見給へ。世の中を……』かう言つて清三は友の功名心を駁した。けれど其言葉の陰には丸でこれと正反對の心がかくれて居た。それだけかれは激してゐた。かれは泣きたかつた。

それを今思ひ出した。『自分も世の中の多くの人のやうに、暢氣なことを言つて暮して行くやうになるのか。』と思つて、校長の平凡な赤い顔を見た。

つい麥酒を五六杯呷つた。

青い田の中を蝙蝠傘をさした人が通る。それは町の裏通りで、其處には路に添つて里川が流れ、川楊がこんもりと茂つて居る。森には蟬の鳴聲が喧しく聞えた。

一時間経つと、三人は皆な倒れて了つた。校長は肱枕をして足を縮めて甦をかいて居るし、大島さんは仰向けに胸を露はに足を伸してゐるし、清三は赤い顔をして頭を畳につけてゐた。獨り關さんは退屈さうに、次の廣間へ行つてビラなどを見た。

三時過ぎに、清三が寺に歸つて來ると、萩生君は風通しの好い本堂の板敷に心地よさうに晝寢をして居る。

午後の日影に割葦が頻りに鳴いた。

十六

暑いある日の午後、白緋に袴といふ清三の學校歸りの姿が羽生の庇の長い町に見えた。今日月給が全部下りて、懐の財布は重かつた。今少し前、郵便局に寄つて、萩生君に借りた五十錢を返し、途中で買つて來たくず餅を出して、二人で茶を飲み／＼樂しさうに食つた。『何うも、これも長々難有う。』と言つて、二月ほど前から借りて居た烏打帽を取つて返した。

『まだ好いよ、君。』

『でも、今日夏帽子を買ふから。』

『買ふまでかぶつて居給へ、可笑しいよ。』

『なアに、すぐ其處で買ふから。』

『足元を見られて高く賣附けられるよ。』

『なアに大丈夫だ。』

で、日のカン／＼照り附ける町の通りを清三は帽子も被らずに歩いた。通りに硝子戸を開放した西洋雜貨店があつて、毛絲や麥稈帽子が並べてある。

清三は麥稈帽子をいくつか出させて見せて貰つた。十六といふのが丁度かれの頭に合つた。一圓九十錢といふのを六十錢に負けさせて買った。町の通りに新しい麥稈帽子が際立つて日に輝いた。

十七

美穂子は暑中休暇で歸つて來た。

其家へ行く路には夏草が深く茂つて居た。星川の水は碧く漲つて流れて居る。蘆の綠葉に日影が射した。

家の入口には、肌襦袢や腰卷や浴衣が物干竿に干しつらねてある。郁治は清三と伴れ立つて行つた。美穂子は白紵を着て居た。帯は白茶と鶯茶の腹合せをして居た。顔は少し肥えて、頬のあたりがふつくりと肉附いた。髪は例の庇髪に結つて、白いリボンがよく似合つた。

ビールの空罎に入れられた麥湯が古い井字形の井戸に細い綱で吊して冷されてあつた。井戸側には大きな葉の草がゴチャ／＼生えて居る。流しには菖蒲、萱などが一面にしけつて、釣瓶の水をこぼすたびにしぶきがそれにかゝる。二三日前までは老母が夕毎に其處に出て、米かし桶の白い水を流すのが常であつたが、娘が歸つて來てからは、其の色白の顔がいつも分明と薄暮の空氣に見えるやうになつた。其頃には奥で父親の謠がいつも聞えた。

美穂子は細い綱をスル／＼と手繰つた。ビールの罎がやがて手に來る。結へた綱を解いて、それを勝手へ持つて來て、土瓶に移して、コップ三つと、砂糖を入れた硝子器とを盆にのせて、兄の話してゐる座敷へ持つて行く。

『何にも、御馳走はございませんけど、……これは一日井戸につけて置いたんですから、お砂糖でも入れて召上つて……』

麥湯は氷のやうに冷えて居た。郁治も清三も二三杯お代りをして飲んだ。美穂子は兄の傍に坐つて、遠慮なしにいろ／＼な話をした。

『寄宿生活は随分大變でせう。』

清三はかう訊くと、

『え、／＼、随分賑かですよ。他の女學校などと違つて、監督が難かしいのですけど、それでも矢張……』

『女學校の寄宿舎なんて、それは大變なものさ。話で聞いても随分愛想が盡きるよ、』と北川は笑つて、『矢張、男の寄宿とさう大して違ひは無いだね。』

『まさか兄さん。』

と美穂子は笑つた。

其室には西日が射した。松の影が庭から縁側に移つた。垣の外を荷車の通る音がする。

此春と同じやうに、二人の友達は家への歸途を黙つて歩いた。言ひたいことは郁治の胸にも清三の胸にも山ほどある。しかし二人ともそれに觸れようとしなかつた。城址の錆びた沼に赤い夕日が射して、ヤンマが蘆の梢に一疋、二疋、三疋までとまつてゐる。子供が長いもち竿を持つて田の中に腰まで浸つて、おつるみの蜻蛉をさして居た。

石橋近くに來た時、

『今年は夏休みを何うする……何處かへ行くかね？』

郁治は突然かう訊ねた。

『まだ、考へて居ないけれど、ことに寄ると、日光が妙義に行かうと思ふんだ。君は？』

『僕はそんな餘裕はない。この夏は英語を今少し勉強しなくつちやならんから。』

美穂子が此夏休暇を此處に過すといふことが何の理由もなしに清三の胸に浮んで、妬ましいやうな辛い心地がした。

今夜は父母の家に寢て、翌朝早く歸らうと思つた。現に郁治にもさう言つた。けれど路の角で郁治と別れると、急に此處に居るのがたまらなく厭になつて、足元から鳥の立つやうに母親を驚かして歸途に就いた。明朝郁治が遣つて來て驚くであらうといふ一種復仇の快感と、束縛せられてゐる力から免れ得

たといふ念と、譬へ難いさびしい心細い感とを抱いて、かれは其の長い夕暮の街道を辿つた。

寺に歸つた時は日が暮れてからもう一時間位経つた。和尚さんは庫裡の六疊の長火鉢のある處で酒を飲んで居たが、常に似ず元氣で『まア一盃お遣んなさい、』と盃をさして、冷やつこを別に皿を分けて取つて呉れた。今まで聞かなかつた主僧の幼ない頃の話が出る。九歳の時、此寺の小僧に寄越されて、それから七八年の辛抱、其艱難は一通りでなかつた。玄關の傍の二疊にゐて、この成願寺の住職になることを此上もない希望のやうに思つて居た。今でも成願寺住職實圓と書いた落書がよく見ると残つて居る。主僧は酔つて『衆寮の壁』といふついで此頃作つた新體詩を歌つて聞かせた。

『何うです、君も何か一つ書いて見ませんか。』

かう言つて和尚さんは勧めた。

清三の胸はかうした言葉にも動かされるほど今宵は感激して居た。何か一つ書いて見よう。かれはエルテルを書いて其の實際の苦痛を忘れたゲエテのことなどを思ひ出した。自分には才能といふ才能もない。學問といふ學問もない。友達のやうに順序正しく修業をする境遇にも居ない。人並にして居ては、とても駄目である。かれは感情を披瀝する詩人としてより他に光明を認め得るものはないと思つた。

『一つ運だめしを遣らう。此の暑中休暇に全力を擧げて見よう。自分の才能を試みて見よう。』

かれは和尚さんから、種々の詩集や小説を借りることにした。翌日學校から歸つて來ると、和尚さん

は東京の文壇に顔を出して居る頃集めた本を何彼と持つて来て貸して呉れた。國民小説といふ赤い表紙の四六版の本の中には、『地震』と『うき世の波』と『悪因縁』といふ三篇がある。それが面白いから讀めと和尚さんは言つた。『むさし野』といふ本も其中にあつた。かれは『むさし野』に讀み耽つた。

七月は次第に終に近づいた。暑さは日にく加はつた。久しく逢はなかつた發戸の小學校の女教員に例の庚申塚の角でまた二三度邂逅した。白地の單衣に白のリボン、涼しさうな装をして、微笑を傾けて通つて行つた。其微笑の意味が清三には何うしても解らなかつた。學校では暑中休暇を誰も皆な待ち渡つて居る。暑い夏を葡萄棚の下に寢て暮さうといふ人もある。浦和にある講習會へ出かけて、檢定の資格を得ようとして居るものもある。旅に出ようとしてゐるものもある。東京へ用足しに行かうと企て、居るものもある。月の初めから正午限になつて居たが、前期の日課點を調べるので、教員共は一時間二時間を教室に残つた。それに用のないものも、午から歸ると途中が暑いので、日蔭の出来る頃まで、オルガンを鳴らしたり、雑談に耽つたり、宿直室へ行つて晝寢をしたりした。清三は日課點の調べに厭きて、風呂敷包の中から『むさし野』を出して清新な趣味に渴した人のやうに熱心に讀んだ。『忘れ得ぬ人々』に書いた作者の感慨、武藏野の郊外をザツと降つて通る林の時雨、水車の月に光る橋の畔に下宿した若い教員、それ等はすべて自分の感じによく似て居た。かれはをり／＼本を伏せて、頭腦を流れて來る感興に耽らざるを得なかつた。

卅日の學課は一時間で終つた。生徒を集めた卓の前で、

『皆さんは暑中休暇を有益に使はなければなりません。餘りに遊び過すと、折角これまで教はつたことを皆な忘れて了ひますから、毎日一度づつは、本を出しておさらひをなさい。それから父さん母さんに世話を焼かしてはいけません。桃や梨や西瓜などを澤山に食べてはいけません。暑い處を遊んで來て、さういふものを澤山に食べますと、腹をこはすばかりではありません。恐ろしい病氣にかゝつて、夏休みがすんで、學校に來たくつても來られないやうになります。よく遊び、よく學び、よく勉めよ。本にもさう書いてありませう。九月の始めに、此處で先生と一緒に居る時には、誰が一番先生の言ふことをよく守つたか、それを先生は今から見て居ります。』かう言つて、清三は生徒に別れの禮をさせた。お下けに結つた女生徒と鼻を垂らした男生徒とがぞろ／＼と下駄箱の方へ先を争つて出て行つた。何れの教室にも同じやうな言葉が繰返される。女教員は董色の袴を分明と廊下に見せて、一二、一二を遣りながら、其處まで來て解散した。校庭には九連草の赤いのが日に照されて咲いて居た。紫陽花の花もあつた。

十八

暑中休暇は徒に過ぎた。自己の才能に對する新しい試みも見事に失敗した。思は燃えても筆はこれに伴はなかつた。五日の後にはかれは斷念して筆を捨てた。

寺に居ても面白くない。行田に歸つても、狭い家は暑く不愉快である。それに、美穂子が歸つて居るだけそれだけ、其處に居るのが苦痛であつた。かれは一人で赤城から妙義に遊んだ。

旅から歸つて來たのは八月の末であつた。其時美穂子は、既に浦和の寄宿舎に歸つて居た。行田から羽生、羽生から彌勒といふ平凡な生活はまた始まつた。

十九

學校には新しいオルガンが一臺購つてあつた。初めての日は丁度日曜日で、校長も大島さんも來なかつた。其夜は宿直室にさびしく寝た。盃蘭盆を過ぎた後の夜は美しく晴れて、天の川が明かに空に横つて居る。垣にはスイッチョが鳴いて、村の子供等のそれをさがす提灯が其處にも此處にも見える。日中は暑い、夜は露が草の葉に置いて、人の話聲が何處からともなく聞えた。

初めの十日間は授業は八時から十時、次の十日間は十二時まで、それから間もなく午後二時の退校となる。もう其頃は秋の氣はあたりに充ちて、雨の降る日など單衣一枚では冷かに感じられた。物思ふかれの身に月日は早く經つた。

高等學校の入學試験を受けに行つた小島は第四に合格して、月の初めに金澤へ行つたといふ噂を聞いたが、得意の文句を並べた繪葉書はやがて其處から届いた。其地にある兼六公園の寫眞はかれの好奇心を惹くに充分であつた。友の成功を祝した手紙を書く時、かれは机に打伏して自己の不運に泣かざるを得なかつた。

本堂の机の上には亂れ髪、落梅集、むさし野、和尚さんが早稻田に通ふ頃讀んだといふエノツクアーデンの薄い本が載せられてあつた。かれは『響りんりん』といふ故郷を去るの歌を常に好んで吟誦した。其調子には言ふに言はれぬ悲哀がこもつた。庫裡の立關の前に、春は芍薬の咲く小さい花壇があつたが、其處に其頃秋海棠が繪のやうに微かに紅を見せて居る。中庭の萩は今を盛に咲亂れた。

夜毎の月は次第に明かになつた。墓地と畠とを縁取つた榛の並木が黒く空に見えて、大きな芋の葉にはキラ／＼と露が光つた。

夕飯の後に、清三は墓地を歩いて見ることもあつた。新墓の垣に紅白の木槿が咲いて、あかい小さい蜻蛉が澤山集つて飛んで居る。卒塔婆の新しいのに、和尚さんが例の禿筆を揮つたのが彼方此方に立つてゐる。土饅頭の上に茶碗が水を満して置いてあつて、線香のともつた後の白い灰が歴々と残つて見えた。花立にはみそ萩や女郎花などが供へられてある。古い墓も無縁の墓もかなり多かつた。一隅には行倒れや乞食の死んだのを埋葬した處もあつた。清三は時にはものすきに碑の文などを讀んで見ることもある。仙臺で生れて、維新の時には國事に奔走して、明治になつてから此處に來て、病院を建て、土地の者に慈父のやうに思はれたといふ人の石碑もあつた。製糸工場の最初の經營者の墓は、花崗石の立

派なもので、寄附金をした有志の姓名は、金文字で高い墓石に刻りつけられてあつた。それから日清の役に此近在の村から出征して、旅順で戦死した一等卒の墓もあつた。

この墓地とは全く離れて、裏の林の奥に、丸い墓石が数多く並んで居る。これは歴代の寺の住職の墓である。杉の古樹の蔭に笹やら檜やらが茂つて、土は常にじめくとして居た。晴れた日には夕方の光線が斜に林にさし透つて、向うに広い野の空がそれと覗かれた。雨の日には、梢から雨滴がボタ／＼落ちて、蘚苔の生えた坊主の頭顱のやうな墓石は泣くやうに見られた。此處の和尚さんもやがては此の中に入るのだなどと清三は考へた。肥つた脊の高い上さんと田舎の寺に埋めて置くのは惜しいやうな學問のある和尚さんが、かうした淋しい平凡な生活を送つて居るのも、考へると不思議なやうな氣がする。ふと、二三日前のことを思出して、かれは微笑した。かれは日記に軽い調子で、

『夕方知らずして、主の坊が Wife と共に湯の小やぎに親しみて(?) 入れるを見て、突然のことに氣の毒にも亦面喰はされつ』と書いたのを思出した。湯殿は庫裡の入口から入られるやうになつて居た。和尚さんは二月ばかり前に、葬儀に用ゐる棒や板などの澤山本堂にあつたのを利用して大工を雇つて来て、其處に恰好の湯殿を作つて、丸い風呂を据ゑて湯を立てた。烟が勝手から庫裡まで靡いた。其日は火を貰はうと思つて、茶の間へ行つて見ると、其處には誰も居ないで、笑聲が湯殿の方から聞えた。何氣なしに行つて覗いて見ると、夫妻は小さい据風呂に目白の押合ひのやうにして入つて居る。主僧は平氣で

笑つて、『これはえらい處を見られましたな、』と言つた。清三にはこの滑稽な事實が、單に滑稽な事實ではなくつて、それを透して主僧の生活の狀態と夫妻の間柄とが一層明かに見えたやうな氣がした。かうして無意味に——若い時の希望も何も彼も捨て、了つて、唯目前の運命に服従して、さて年を過して、歴代の住職の墓の中に！ 清三は自分の運命に引きくらべて見た。

時には一葉舟の詩人を學んで、『雲』の研究をして見ようなどと思ひ立つこともあつた。信濃の高原に見るやうな複雑した雲の變化を見ることは出来なかつたが、ひろい關東平野を縁取つた山々から起る雲の色彩にはすぐれたものが多かつた。裏に出ると、淺間の烟が正面に見えて、その左に妙義が鳥渡頭を出して居て、それから荒船の連山、北甘樂の連山、秩父の連山が波濤のやうに連り互つた。兩神山の古城址のやうな形をした肩の處に夕日は落ちて、いつもそこからいろ／＼な雲が湧きあがつた。右には赤城から日光連山が環をなして續いた。秩父の雲の明色の多いのに引かへて、日光の雲は暗色が多かつた。かれは青田を越えて、向うの榛の並木のあたりまで行つた。野良の仕事を終つて歸る百姓は、いつも白地の單衣を着て頭の髪を長くした成願寺の教員さんが手帳を持ちながらぶら／＼歩いて行くのに邂逅して挨拶をした。時には田の畔に佇ずんで何か頻りに手帳に書き附けて居るのを見ることがあつた。清三の手帳には日附と時刻と其時々につつたさま／＼の雲の狀態と色彩と、時につれて變化して行く暮雲のさまとが段々詳しく記された。『平原の雲の研究』といふ文をかれは書き始めた。

彼岸の中日には、其原稿がもう大抵出来懸つて居た。其日は本堂の如來様にはめづらしく蠟燭が點されて、和尚さんが朝の内一時間ほど、紫の衣に錦欄の袈裟をかけて讀經をした。庭の金木犀は風につれてなつかしい匂を古びた室に送る。參詣者は朝から遣つて来て、駒下駄の音がカラコロと長い鋪石道に聞えた。墓に詣づる人々は、先づ本堂に上つて如來様を拜み、庫裡に廻つて、其處に出してある火鉢で線香に火を點け、草の茂つた井戸から水を汲んで、手桶を下けて墓へ行つた。寺では二三日前から日傭取を入れて掃除をして置いたので、墓地は綺麗になつて居て、いつものやうに櫛の枯葉や犬の糞などが散らかつて居なかつた。參詣するものの中には、町の豪家の美しい少女も居れば、島田に結つた白粉の半剥けた田舎娘もあつた。清三は上さんから貰つた萩の餅に腹をふくらし、涼しい風に吹かれながら午睡をした。夢現の中にも鐘の音、駒下駄の音、人の語り合ふ聲などが絶えず聞えた。

結願の日から雨がしとくと降つた。さびしい今年の秋が来た。

かれの此頃の日記には、こんなことが書いてある。

十月一日。

去月二十八日より不着の新聞今日一度に来る。夜、善綱氏(小僧)に算術教ふ。エノックアアデン二十頁の處まで進む。此頃日脚西に入り易く。四時過ぎ學校を出で、五時半に羽生に着けば日全く暮る。夜、九時、湯に行く。秋の夜の御堂に友の涙冷かなり。

二日。晴。

馴れし木犀の香漸く衰へ、裏の栗林に百舌鳥なきしきる。今日より九時始業、米ずしより夜油を買ふ。

三日。

モロコシ畑の夕日に群れて飛ぶあきつ赤し、熊谷の小畑に手紙出す。夕波の繪かきそへて。

四日。晴。

久しく晴れたる空は夜に入りて雨となりぬ。裏の林に、秋雨の木の葉うつ音しづか。故郷の夢見る。

五日。土曜日。

雨を衝きて行田に歸る。

六日。

一日を楽しき家庭に暮す。小畑と小島に手紙出す。夜、細雨静か也。

七日。

朝早く行く。稻、黄く色づき、野の朝の雨斜なり。夜は學校にとまる。

八日。

雨はけしく井戸端の柳の糸亂る。今宵も學校にとまる。

九日。

早く歸る、秋雨漸く晴れて、夕方の雲風に動くこと早く夕日金色の色翳し。木犀の衰へたる香微かに匂ふ。夜、新聞を見、行田への荷物包む。星かくれて、銀杏の實落つること繁し。栗の林に野分たちて、庫裡の奥庭に一葉ちるもさびしく、風の音にコホロギの聲寒し。

十日。

朝、行田に蚊帳を送り、夕方着物を受取る。小畑より久し振りにて同情の手紙を得たり。曰く『この秋の君の心！ 思へばありしこと々も思ひ偲ばる。『去年の冬、今年の春！』といふ君が言葉にも千萬無量の感湧き出でて、心は遠く成願寺のあたり』云々。夜、星清く澄んで南に低く飛ぶもの二つ。小畑に返事を書く。曰く、『愚痴はもうやめた。言ふまい語るまい、一人にて泣き、一人にてもだえん。』

清三は此頃の日記の去年の冬、今年の春に比べて、いかに其調子が變つたかを考へざるを得なかつた。去年の冬はまだ世の中はかうしたものだとは知らなかつた。美しい派手やかな希望も前途に輝いて居た。歌留多を取つても、ボールを投けても面白かつた。親しい友達に利己のさびしい影を認めるほど眼も心も覺めて居らなかつた。卒業の喜悅、初めて世に出づる希望——その花やかな影は忽ち消えた。秋は來た、さびしい秋は來た。裏の林に熟み割れた栗のいが見えて、晴れた夜は野分がそこからさびしく立つた。長い廊下の縁は足の裏に冷やかに、本堂の傍の高い梧桐からは雨滴が泣くやうに落ちた。

二十

男生徒女生徒打混せて三十名ばかり、田の間の細い路をぞろ／＼通る。學校を出る時は、『龜よ龜さんよ』を一聲に唄つて來たが、それにも倦きて、今では各自に勝手な眞似をして歩いた。何かべちやく／＼饒舌つてゐる女生徒もあれば、後を振返つて赤目をして見せて居る男生徒もある。赤いマンマといふ花を摘んで列に後れるものもあれば、蜻蛉を追かけて畑の中に入つて行くものもある。尋常二年級と三年級、九歳から十歳までのいたづら盛り、總じて無邪氣な甘えるやうな舉動を、清三は自己の物思ひの慰藉として常に可愛がつたので、『先生——林先生』と生徒は顔を見てよく其後を追つた。

學校から村を抜けて、發戸に出る。青縞を織る機の音が其處にも此處にも聞える。色の白い若い先生をわざ／＼窓から首を出して見る機織女もある。清三は袴を着けて麥稈帽子を被つて先に立つと、關さんは例の詰襟の汚れた白い夏服を着て生徒に交つて歩いた。女教師も其後からハンケチで汗を拭き／＼跟いて來た。秋は半ば過ぎてもまだ暑かつた。發戸の村はづれの八幡宮に來ると、生徒はばら／＼と驅け出して其裏の土手に馳せ上つた。先に登つたものは、手を舉げて高く叫んだ。ぞろ／＼と跟いて登つて行つて手を舉げて居るさまが、秋の晴れた日の空氣を透して疎らな松の間から見えた。其の松原からは利根川の廣い流が繪を展けたやうに美しく見渡された。

彌勒の先生達はよく生徒を運動に此處へつれて來た。生徒が砂地の上で相撲を取つたり、叢の中で阜斯を追つたり、汀へ行つて淺瀬でほちやくしたりして居る間を、先生達は涼しい松原の蔭で、氣の置けない話をしたり、新刊の雑誌を讀んだり、仰向に草原の中に寝ころんだりした。平凡なる利根川の長い土手、其中で此處十町許りの間は、松原があつて景色が眼覺める許り美しかつた。ひよろ松もあれば小松もある。松の下は海邊にでも見るやうな綺麗な砂で、處々小高い丘と丘との間には、青い草を下草にした繪のやうな松の影があつた。夏は其處に色の濃い撫子が咲いた。白い帆がそのすぐ前を通つて行つた。

清三は此處へ來ると、いつも生徒を相手にして遊んだ。鬼事の群に交つて、女の生徒につかまへられて、前掛で眼かくしをさせられることもある。又生徒を集めて一緒になつて唱歌をうたふことなどもあつた。かうして居る間にはかれには不平も不安もなかつた。自己の不運を嘆くといふ心も起らなかつた。無邪氣な子供と同じ心になつて遊ぶのが常である。しかし今日は何うしてかさうした快活な心になれなかつた。無邪氣に遊び廻る子供を見ても心が沈んだ。かうして幼い生徒にはかなき慰藉を求めて居る自分が情けない。かれは松の蔭に腰をかけて、溶々として流れ去る大河に眺め入つた。

一日、學校の歸りを一人さびしく歩いた。空は晴れて、夕暮の空氣の影濃かに、野には薄の白い穂が風に靡いた。ふと、路の角に來ると、大きい包を背負つて、古びた紺の脚半に、埃で白くなつた草鞋をはいて、さも勞れ果てたといふ風の旅人が、ひよつくり向うの路から出て來て、「羽生の村へはまだ餘程あ

りますか、」と問うた。

『もう、ぢきです、向うに見える森がさうです。』

旅人はかれと並んで歩きながら、猶ほいろ／＼なことを訊いた。これから川越を通つて八王子の方へ行くのだといふ。何でも遠い處から商賣をしながら遣つて來たものらしい。其の言葉には東北地方の訛があつた。

『此の近所に森といふ在郷がありますか。』

『知りませんな。』

『では高木といふ處は。』

『聞いたやうですけど……』

矢張よくは知らなかつた。旅人は今夜は羽生の町の梅澤といふ旅店にとまるといふ。清三は町に入る處で、旅店へ行く路を教へて遣つて、田圃の横路を右に別れた。見てみると、旅人はさながら疲れた鳥が塹を求めるやうに、てく／＼と歩いて町へ入つて行つた。何故ともなく他郷といふ感が烈しく胸を衝いて起つた。かれも旅人、われも同じく他郷の人！ かう思ふと、涙がホロ／＼と頬を傳つて落ちた。

秋は日に日に深くなつた。寺の境にひよろ長い榛の林があつて、其の向うの野の黄く熟した稲には、夕日が一しきり明るく射した。鴻の巢に通ふ縣道には、薄暮に近く、空車の通る音がガラ／＼といつも高く聞える。其頃機動演習に遣つて来た歩兵の群や砲車の列や騎馬の列がぞろ／＼と通つた。林の角に歩兵が散兵線を布いて居ると思ふと、バリ／＼と小銃の音が凄じく聞える。寺でも庫裡と本堂に兵士が七八人も来て泊つた。裏の林には馬が、二三十頭も繋がれて、それに飲ませる水を入れた四斗桶が幾個となく本堂の前の庭に並べられる。サアベルの音、靴の音、馬の嘶く聲、俄かに四邊は騒々しくなつた。夜は町の豪家の門に何中隊本部と書いた寒冷紗の布が白く闇に見えて、士官や曹長が剣を鳴らして出たり入つたりした。

それが一日二日で通過してふと、町はしんとして元の静謐にかへつた。清三は二三日前の土曜日に例のごとく行田に行つたが、歸つて来て、日記に、『母はつとめて言はねど、父君のさては何とか働き給は、わが一家は平和ならましを、此思ひ、いつも歸行の時に思ひ浮ばざることなし。』と書いた。怠け勝ちに日を送つて、母親にのみ苦勞を懸ける父親がかれには齒痒／＼つて仕方がなかつた。かれは病身でをして思ひ遣りの深い母親に同情した。頼頼に即効紙を貼つて、夜更まで賃仕事にいそしむ母親の繰言を聞くと、いかなる犠牲にも堪へなければならぬといつも思ふ。時には、父親に内所で、財布の底をはたいて小遣を置いて來ることなどもある。それを父親は母親から引出して遣つた。

二三日前に歸つた時にも、彼方此方に一圓二圓と細かい不義理が出來て困つて居るといふ話を母親から聞いた。

『行田文學』は四號で廢刊するといふ話があつた。石川は折角始めたことゆゑ、一二年は續けたいが、何うも費用が嵩んで、印刷所に借金が出來るやうでも困るからといふ。郁治は何うせそんな片々たるものを出したつて、要するに道樂に過ぎんのだから止めて了ふ方が結局宜い仕方だと賛成する。清三は折角四號まで出したのだから、今少し熱心に會員を募つたり寄附をして貰つたりしたならば、續刊の計畫が立つだらうと言つて見たが駄目だつた。日曜日には荻生君が熊谷から來るのを待受けて、一緒に羽生へ歸つて來た。荻生さんは心配のなさうな顔をして面白い話をしながら歩いた。途中で、テバナをかんで見せた。それがいかにも巧みなので、清三は體を崩して笑つた。清三には荻生さんの無邪氣で暢氣なのが羨しかつた。

朝霧の深い朝もあつた。野は秋漸く逝かんとしてまた暑きこと一二日、柿赤く、蜜柑青しと、日記に書いた日もあつた。秋雨は次第に冷かに、漆のあかく色附いたのが裏の林に見えて、前の銀杏の實は葉と共に頻りに落ちた。掃いても掃いても黄い銀杏の葉は散つて積る。清三は幼い頃故郷の寺で、遊び仲

間の子供と一緒に、風の吹いた朝を待ちつけて、銀杏の實を拾つたことを思ひ出した。それがまだ昨日のやうに思はれる。其處に現に子供の群の中に自分も一緒になつて銀杏を拾つてゐるやうな気がする。月日が何時の間にか経つて、かうして昔のことを考へる身となつたことが不思議にさへ思はれた。此頃は學校でオルガンに新曲を合せて見ることに興味を持つて、琴の六段や長唄の賤機などを遣つて見ることもある。鐵幹の『殘照』は變ロ調の4-4でよく調子に合つた。遅くまでかゝつて熱心に唱歌の樂譜を淨寫した。

月の初めに、俸給の一部を割いて、枕時計を買つたので、此頃は朝はきまつて七時には眼が覺める。それに、時を刻む秒コンダの音が絶えず聞えて、何だかそれが伴侶のやうに思はれる。一人で歸つて來ても、時計が待つて居る。夜更に目が覺めてもチクタク遣つて居る。物を思ふ心のリズムにも調子を合はせて呉れるやうな気がする。かれは小畑にやる端書に枕時計の繪をかいて、『この時計をわが友ともわが妻とも思ひなしつゝ、此秋を寺籠りするさびしの友を思へ』と言つて遣つた。學校からの歸途には、路傍に尾花に夕日が力弱く射して、蓼の花の白い小川に色ある雲が映つた。かれは獨歩の『むさし野』の印象も更に新しく胸に感ぜざるを得なかつた。寺の前の不動堂の高い縁側には子守の老婆がいつも三四人集つて、手拍子を取つて子守歌を歌つて居る。其頃裏の林は夕日にかゝやいて、其最後の餘照は山門の裏の白壁の扉に明らかに照つた。

萩生さんはいつも遣つて來た。一緒に町に出て、しるこを食ふことなどもあつた。『それは僕だつて、暢氣にばかりして居る譯ではありません。けれどいくら考へたつて仕方がないですもの、成るやうにしきやならないんですもの。』萩生さんは清三の常に沈み勝ちなのを見て、こんなことを言つた。萩生さんは清三の常に悲しさうな顔をしてゐるのを心配した。

後の月は明るかつた、裏の林に野分の渡るのを聞きながら、庫裡の八疊の縁側に、和尚さんと酒を飲んだ。夜はもう寒かつた。轡蟲の聲も枯々に、寒さうにコホロギが鳴いて居た。

秋は日に／＼寒くなつた。行田からは袷と足袋とを届けて來る。

二十二

小畑から來た手紙の一。

今日、ある人（強ひて名を除く）から聞けば、君と加藤の妹との間には多少の意義があるとのこと候ふが、それは本當か如何、お知らせ被下度候。

先日、加藤に逢ひし時、それとなく聞きしに、そんなことは知らぬと申候。けれどこれは兄が知らぬからとて、事實無根とは斷言出來難しなど笑ひ申候。君にも似合はぬ仕事かな。ある事はありてよし。無きことは無くてよし、一臂の力を貸さぬでもないのに、何とか返事あり度候。

加藤の浮れ加減はお話にもならず。手紙が浦和から来たとして、その一節を寫して見て呉れろといふ始末、存外熱くなりて居れることゝ存候。秋寒し、近況如何。

手紙の二。

御返事難有う。そんなことをして居られるか何うか考へて見よとの御反問の手厳しさ。君の心はよく解つた。けれど『あんなおしやらくは嫌ひだ』は少し酷すぎたりと思ふ。あの脊の高い後姿の好い處が氣に入る人もあるよ。またあの脊の高いお嫌ひな人が君でなくつてはならなかつたら何うする。

『嫌ひだ』と言つたからとて、さうか本當に嫌ひだつたのかと新事實を發見したほどに思ふやうな僕にては無之候。かう申せば又誤解呼はりするかも知らねど、簡単に誤解呼はりをする以上の事實があるのを僕は確かな人から聞いたの故駄目に候。

此次の日曜には、行田から今一息俵を飛ばして遣つて來給へ。此間、白瀧の君に逢つたら、『林さん、お變りなくつて！』と聞いて居た。又例の蕎麥屋でビールでも飲んで語らうぢやないか。小島から此間便りがあつた。此頃に杉山がまた東京の早稻田に出て行くさうだ。

歌を難有う。思はんやさはいへそゝろむさし野に七里を北へ下野の山、七里を北と言へば足利ではないか。いか。君の故郷ぢやないか。いつか聞いた君のファストラヴの追憶ではないか。

手紙の三。

君の胸には何かゝあるやうだ。少くとも此間の返事で僕はさう解釋した。解釋したのが悪いと言はれどもこれも仕方がなしと存候。

加藤此頃別號をつくつたりと申居候。未央生の號を書きて未だ君の邊を驚かさず候ふや。未央と申せば、既に御存じならん。未央は美穂に通ずるは言ふまでもなきことに候。

『予にして加藤の二妹のいづれを取らんやといへば、寧ろしけ子を。温順にして情に富めるしけ子を。』をさなき教へ子を戀人にする小學教師のことなど思ひ出して微笑み申候。又、君の相變らぬ小さき矜持をも思ひ出し候。

手紙の四。

久し振りで快談一日、今年の冬頃のことを思出し候。

あの日は遅くなりしことゝ存候。君の心の半をばわれ解したりと言ひてもよかるべしと存候。戀——そののみがライフにあらず。眞に然り、眞に然り、君の苦衷察するに餘りあり。君の如き志を抱い

て、世に出でし最初の秋をかくさびしく暮すを思へば、われ等は不平など言ひ居られぬ筈に候。

手紙の五。(はがき)

運命一たび君を屈せしむ。何ぞ君の永久に屈することあらん。君の必ず奮つて立つの時あるを信じて疑はず。

意氣の子の一人さびしの夜の秋木犀の香りしめり勝なる。

これ等の手紙を揃へて机の上に置いた。そして清三は考へた。自分の書いて遣つた返事と、其返事の友の心に惹起したことゝを細かに引きくらべて考へて見た。更に自己のまことの心と其手紙の上に顯れた状態とのいかに離れて居るかを思つた。美穂子のことから延いて雪子しけ子のことを頭腦に浮べた。表面に顯はれたことだけで世の中は簡単に解釋されて行く。打明けて心の底を語らなければ——いや心の底を詳しく語つても、他人は其真相を容易に解さない。親しい友達でもさうである。かれは痛切に孤獨を感じた。誰も知つて呉れるものゝない心の寂しさをひしと覺えた。風が裏の林をドツと鳴らした。

二十三

天長節には學校で式があつた。學務委員やら村長やら土地の有志者やら生徒の父兄やらがぞろぞろ來

た。勅語の箱を卓の上に飾つて、菊の花の白いのと黄いのとを瓶にさして其傍に置いた。女生徒の中にはメリンスの新しい晴衣を着て、海老茶色の袴を穿いたのもちらほら見えた。紋附を着た男の生徒もあつた。オルガンの音につれて、『君が代』と『今日のよき日』を唄ふ聲が講堂の破れた硝子を洩れて聞えた。それが濟むと、先生達が出口に立つて紙に包んだ菓子を生徒に一人々々わけてやる。生徒は莞爾して、お辭儀をしてそれを受取つた。丁寧に懐に藏ふものもあれば、紙をあけて見るものもある。中には門の處でもうむしやく食つて居る行儀のわるい子もあつた。後で教員達は村長や學務委員と一緒に廣い講堂にテーブルを集めて、役場から持つて來た白の晒布を其の上に敷いて、人數だけの椅子を其周圍に寄せた。餅菓子と煎餅とが菊の花瓶の間に並べられる。小使は大きな藥罐に茶を入れて持つて來て、銘々に配つた茶碗について廻つた。

大君の目出度い誕生日は、茶話會では收まらなかつた。小川屋に行つて、ビールでも飲まうといふ話には誰からともなく出た。やがて教員達はぞろぞろと田圃の中の料理屋に出かける。一番後から校長が行つた。小川屋の娘は綺麗に髪を結つて、見違へるやうに美しい顔をして、有合はせの玉子焼か何かでお膳を運んだ。一人前五十錢の會費に、有志からの寄附が五六圓あつた。それでビールは景氣好く抜かれる。村長と校長とは愉快さうに今年の豊作などを話してゐると、若い連中は若い連中で檢定試験や講習會の話などをした。大島さんがコップにビールをつがうとすると、女教員は手で蓋をしてコップを傍に

遣つた。『一杯位、女だつて飲めなくては不自由ですな、』と大島さんは元氣に笑つた。西日が暖かに縁側にさして、狭い庭には大輪の菊が白く黄く咲いて居た。畑も田ももう大抵收穫がすんで、向うの疎らな森の蔭からは枯草を燃やす烟がところ／＼に颯つた。傍の街道を喇叭の音がして、例の大越がよひの乗合馬車が通つた。

其夜は學校にとまつた。翌日は午後から雨になつた。黄く色附き初めた野の楢林から雨滴がほた／＼落ちる。寺に歸つて見ると、障子がすつかり貼りかへられて、室が明るくなつて居る。荻生さんが天長節の午後から来て、半日かゝつてせつせと貼つて行つたといふ。その友情に感激して、其後逢つた時に禮を言ふと、『餘り黒くなつて居たから……』と荻生さんは別に何とも思つてゐない。『君は僕の留守に掃除はして呉れる。御馳走は買つて置いて呉れる。障子は貼りかへて呉れる。丸で僕の細君見たやうだね、』と清三は笑つた。和尚さんも、『荻生君は本當にこまめで深切でやさしい。女だと、それはいい、細君になるんだつたが惜しいことをしました。』かう言つて矢張笑つた。

晴れた日には、農家の廣場に唐箕が忙はしく廻つた。野からは刈稻を満載した車が幾臺となく遣つて来る。寒くならない中に晩稻の收穫を濟まして了ひ度い。蕎麥も取つて了ひたい。麥も蒔いて了ひたい。百姓はかう思つて皆な一生懸命に働いた。十月の末から十一月の初めに懸けては、もう關東平野に特色の木枯がそろ／＼立ち始めた。朝毎の霜は藁葺の屋根を白くした。

寺の庫裡の入口の廣場にも小作米が段々持ち込まれる。豊年でも何とか理窟をつけてはかりを負けて貰ふ算段に腐心するのが小作人の習ひであつた。それにいつも夕暮の忙しい時分を選んで馬に積んだり車に載せたりして運んで来た。和尚さんは入口に出て挨拶して、先づさしで、俵から米を抜いて、それを明るい戸外に出して調べて見る。何うもこんな米では仕方がないとか、彼處はこんな悪い米が出来る筈がないがとかいろ／＼な苦情を持出すと、小作人は小作人で、それ相應な申譯をして、何うやら彼うやら押附けて歸つて行く。豆を作つたものは豆を持つて来る。蕎麥をつくつたものは蕎麥粉を納めに來る。『來年は一つ立派につくつて見ますから、何うか今年はこれで勘辨して頂き度い。』誰も皆なそんなことを言つた。

『何うも小作人などと言ふものは仕方がないものですな、』と和尚さんは清三に言つた。

收穫がすむと、町も村も何となく賑かに豊かになつた。料理屋に三味線の音が夜更まで聞え、市日には呉服屋唐物屋の店に赤い蹴出の娘を連れた百姓なども見えた。學校の宿直室に先生の泊つて居るのを知つて、あんころ餅を重箱に一杯持つて來て呉れるのもあれば、鶏を一羽料理して持つて來て呉れるものもある。寺では夷講に新蕎麥を上さんが手づから打つて、酒を一本つけて呉れた。

木枯の吹き荒れた夜の朝は、楡や栗の葉が本堂の前の其處此處に吹溜められて居る。銀杏の葉はすっかり落ち盡して鐘樓の影が何となくさびしく見える。十一月の末には手水鉢に薄氷が張つた。

行田の友達も少なからず變つたのを清三は此頃發見した。石川は雑誌をやめてから、文學に段々遠ざかつて、訪問しても病氣で會はれないこともある。噂では近頃は料理屋に行つて、女を相手に酒を飲むといふ。此前の土曜日に、清三は郁治と石川と澤田とに誘はれて、此頃興行してゐる東京の役者の出る芝居に行つたが、友の調子も著しくさばけて、春あたりは敢て言はなかつた戯談なども人の前で平氣で言ふやうになつた。郁治の調子も何となく碎けて見えた。清三ははしやぐ友達の群の中で、さびしい心で黙つて舞臺を見守つた。

二幕目が終ると、

『僕は歸るよ。』かう言つてかれは立上つた。

『歸る?』

皆は驚いて清三の顔を見た。戯談かと思つたが、其顔には笑の影は認められなかつた。

『何うかしたのか。』

郁治はかう訊ねた。

『うむ、少し氣分が悪いから。』

友達はそのくくりに歸つて行く清三の後姿を怪訝さうに見送つた。後で石川の笑ふ聲がした。清三は不愉快な氣がした。戸外に出るとほつとした。

それでも郁治とは往來したが、もう以前のやうではなかつた。

一夜、清三は石川に手紙を書いた。初めは眞面目に書いて見たが、餘り餘裕が無いのを自分で感じて、わざと律語に書き直して見た。

意氣を血を、叫ぶ聲先づ消えて、

さてはまた、野に霜結んで枯るゝごと、

卿等の聲はまた立たず。

何んぞや一婦の痴に酔ひて、

俗の香巷に狂ふ、

あゝ止みなんか、また前日の意氣なきや。

終に止みなんか、卿等の痴態!

さて最後に咄! といふ字を一字書いて、封筒に入れて見たが、これでは友に警告するのに何だか甚だ不眞面目になるやうな氣がする。いろく考へた末、「こんなことはつまらぬ、言つて遣つたつて仕方がない、』と思つて破つて捨てた。

初冬の暖い日は次第に少くなつて、野には寒いくく西風が吹立つた。日向の學校の硝子に此間まで蠅がぶんく飛んで居たが、それももう見えなくなつた。田の刈つた跡の氷が午後まで残つて居ることも

ある。黄く紅く色附いた檜や榛や栗の林も連日の西風に其葉ががら／＼と散つて、里の子供が野の中で、それを集めて焚火などをしてゐるのをよく見かける。大越街道を羽生の町へ入らうとするあたりからは、日光の山々を盟主にした野州の連山が殊に分明と手に取るやうに見えるが、かれはいつも其處に來ると足を止めて立盡した。かれの故郷なる足利町は、其波濤のやうに起伏した皺の多い山の麓にあつた。一日、かれは其故郷の山に既に雪の白く來たのを見た。

和尚さんも長い夜を退屈がつて、よく本堂に遣つて來て話した。夜など茶を煎れましたからと小僧を迎へによこすこともある。庫裡の奥の六疊、其間には、長火鉢に鐵瓶が煮え立つて、明るい竹筒臺の五分心の洋燈の下に、上さんが裁縫をひろけて居ると、和尚さんは小さい机を其傍に持つて來て、新刊の雑誌などを見て居る。さびしい寺とは思へぬほどその一間は明るかつた。茶請は鹽煎餅か法事で貰つたアンビ餅で、文壇のことや其頃の作者氣質や雑誌記者の話などがいつもきまつて出たが、ある夜、ふと話が旅行のことに移つて行つた。和尚さんは會て行つて居た伊勢の話を得意になつて話し出した。主僧は早稲田を出てから半歳ばかりして、伊勢の一身田の専修寺の中學林に英語國語の教師として雇はれて二年ほど居た。伊勢の大廟から二見の浦、宇治橋の下で橋の上から參詣人の投げる錢を網で受ける話や、あひの山で昔女がへらで錢を受留めた話などをして聞かせた。朝熊山の眺望、ことに全溪皆梅で白いといふ月の瀬の話などが清三のあくがれ易い心を惹いた。それから京都奈良の話も其心を惹寄せるに充

分であつた。和尚さんの行つた時は、丁度四月の休暇の頃で、祇園嵐山の櫻は盛りであつた。

『行違ふ舞子の顔やおほろ月』といふ紅葉山人の句を引いて、新京極から三條の橋の上の夜の賑ひを面白く語つた。其時は和尚さんもうかれ心になつて雪駄を買つて、チャラ／＼音をさせて明るい賑かな春の町を歩いたといふ。奈良では大佛、若草山、世界にめづらしいブロンズの佛像、二千年昔の寺院などいふのを隈なく見た。清三の孤獨なさびしい心はこれを聞いて、まだ見ぬ處、まだ見ぬ山水、まだ見ぬ風俗に憧れざるを得なかつた。『一生の中一度は行つて見たい。』かう思つてかれは自己の覺束ない前途を見た。

年の暮は次第に近寄つて來た。行田の母からは、今年の暮は彼方此方の借錢が多いから、何うか今から心懸けて、金を無闇に使つて呉れぬやうにと言つて寄越した。蒲團が薄いので、蝦のやうに屈めて寝る足は終夜暖まらない。宅に言つて遣つた處で駄目なのは知れてゐるし、出來合を買ふ餘裕もないので、何うかして今年の冬はこれで間に合はせる積で、足の方に着物や羽織や袴を被けたが、日毎に募る夜寒を凌ぐことが出來なかつた。止むなかくかれは米すしから四布蒲團を一枚借りることにした。其日の日記にかかれは『今夜より漸く暖かに寝ることを得』と書いた。

行田から羽生に通ふ路は、吹さらしの平野のならひ、顔も向けられないほど西風が烈しく吹荒んだ。

日曜日の日の暮れ／＼に行田から歸つて來ると、秩父の連山の上に富士が淡墨色に分明と出て居て、夕

日が寒く平野に照つて居た。途中で日が全く暮れて、さびしい田圃道を一人てくく歩いて來ると、ふと擦違つた人が、

『赤城山なア、山火事だんべい。』
と言つて通つた。

振返ると、暗い闇を通して、其處あたりと覺しき處に果して火光が鮮かに照つて見えた。山火事！
赤城の山火事！ 關東平野に寒い／＼冬が來たといふ徴であつた。
今年の冬籠のさびしさを思ひながら清三は歩いた。

二十四

『林さん、……貴郎は家の兄と美穂子さんのこと知つて？』

雪子は笑ひながらかう訊いた。

『少しは知つて居ます。』

清三は稍と顔を赧くして、雪子の顔を見た。

『此頃のこと御存じ？』

『此頃つて……この冬休みになつてからですか。』

『ええ。』

雪子は笑つて見せた。

『知りません。』

『さう……』

と又笑つて口をつぐんで了つた。

昨日冬期休暇になつたので、清三は新しい年を迎へるべく羽生から行田の家に来た。美穂子が三四日前に、浦和から歸つて來て居るといふことを聞いた。今朝加藤の家を訪問したが、郁治は出て居なかつた。すぐ歸りかけたのを母親と雪子が、『もう歸るでせうから、』と達つて留めた。

清三は、詳しく聞き度かつたが、しかし其勇氣はなかつた。胸が唯躍つた。

雪子が笑つて居るので、

『一體何うしたんです？』

『何うしたつて言ふこともないんですけど……』

矢張笑つて居た。やがて、

『變なことおうかひするやうですけど……貴郎は兄と北川さんのことで、何か思つてゐらしやることはなくつて？』

『いゝえ。』

『ぢや、貴郎、二人の中に入つて何うかしたつて言ふやうなことはなくつて。』
『知りません。』

『さう。』

雪子は又黙つて了つた。

少時してから、

『私、小畑さんから變なことを言はれたから、……』

『變なことつて？ 何んなことです。』

『何でもありませんけれどもね。』

話が謎のやうで一向要領を得なかつた。

午後、兎に角北川に行つて見ようと思つて沼の縁を通つて居ると、向うから郁治が遣つて來た。

『やあ！』

『何處に行つた？』

『北川へ鳥渡。』

『僕も今行かうと思つて居た。』と清三はわざと快活に、『アハ先生歸つてゐるつて言ふぢやないか。』

『うむ。』

二人は暫し黙つて歩いた。

『一體何うしたんだ？』

暫くして清三が訊いた。

『何が？』

『しらばつくれるねえ、君は？ 僕はちやんと聞いて知つてるよ。』

『何を？』

『大に發展したつて言ふぢやないか。』

『誰が話した？』

『ちやんと知つてるさ！』

『誰も知つてるものは無い筈だがな、』と言つて考へて、『本當に誰が話した？』

『ちやんと材料が上つてるさ。』

『誰だらうな？』

『中て、見給へ。』

少し考へて、

『解らん。』

『小畑が君、君のシスタアに何か言つたことがあるかえ？ 僕のこと。』

『あゝ、妹が饒舌つたんだな、彼奴、馬鹿な奴だな！』

『まア、そんなことは好いから、僕のいふことを返事し給へ。』

『何を。』

『小畑が君のシスタアに何か言つたつて言ふことだよ。』

『知らんよ。』

『知らんことはないよ、僕が君とトモの関係に就いて、中に入つてるとか何うしたとか言つたことがあるさうだね。』

『うむ、さういへばある、』と郁治は思ひ出したといふ風で、『君が北川によく行くのは何うかしたんぢやないかなんて言つたことがある。』

『君のシスタアに就いても何か先生言ひやしなかつたか。』

『戯談は言つたかも知らんが、詳しくはよく知らん。』

二人は黙つて歩いた。

二十五

郁治と美穂子との『新しき發展』に就いて、清三はいろ／＼と詳しく聞いた。雪子から美穂子に遣る手紙の中に郁治が長い手紙を入れて遣つたのは一月ほど前であつた。やがて郁治に宛てて長い返事が来た。その返事をかれは其夜とある料理屋で酒を飲みながら清三に示した。其手紙には甘い戀の言葉が處々にあつた。郁治の手紙を寄宿室の暗い洋燈の光の下で繰返し繰返し讀んだことなどが書いてある。お互にまだ修業中であるから、仰しやる通り、社會に成功するまで、堅い交際を続けたいと言ふことも書いてある。これで見ると、郁治もそんなことを言つて遣つたものと見える。清三は其長い手紙を細かく讀むほどの餘裕はなかつた。かれは飛び／＼にそれを見たが、處々の甘い蜜のやうな言葉はかれの淋しい孤獨の眼の前にさながらさま／＼の色彩で出来た花環のやうにちらついて見えた。酒に酔つて得意になつて、友のさびしい心をも知らずに、平氣におのろけを言ふ郁治の態度が、憎くもあり腹立しくもあり氣の毒にもなつた。清三は唯フンフンと言つて聞いた。

『その代り僕は僕の出来る限りに於て、君の爲めに盡力するさ！』

こんなことを郁治は幾度も言つた。

『小畑もそんなことを言つて居たよ。僕だつて、君の心地位は知つてゐるさ。』

こんなことをも言つた。

郁治はまた石川の此頃溺れて居る加須の藝者の話をした。

『先生此頃は非常に熱心だよ。君も知つてるだらうが、自轉車を買つてね、遠乗をするんだとか何とか言つて、毎日のやうに出懸けて行くよ。東京から来た小蝶とかいふ女で、寫眞を大事にして持つて居たよ。金持の息子なんて言ふものゝ心は丸でわれ〜とは違ふねえ君、勉強なんぞしないで立派に一人前になつて行かれるんだからねえ。』

出来るだけの力を盡すと言つた言葉、其の言葉の蔭に雪子が居ることを清三は明かに知つて居た。けれどそれが清三には餘り嬉しくは思はれなかつた。つんと澄した雪子の姿が眼の前を通つてそして消えた。かれは今更に美穂子の姿の一層強い影を其心に印してゐるのを豫想外に思つた。かういふ道行になるのはかれも兼ねてよく知つて居たことである。ある時はさうなるのを友の爲めに祈つたことすらある。けれど想像して居た時と事實となつた時との感は甚しく違つた。

清三の心はさびしかつた。自己の境遇が實際生活の上からも、戀愛の上からも、學問修業といふ上からも、益々消極的に傾いて來て、例へば柱と柱との間に小さく押附けられて了つたやうな氣がした。初めは何うしても酔はなかつた酒が、後になると其の反動で烈しく發して來て、歸る頃には、歌を唄つたり詩を吟じたりして郁治を驚かした。

しかし一段落を告げたといふやうな氣がないでもなかつた。戀を失つたのはつらいが、戀に自由を奪はれなかつたのは嬉しいやうな氣がする。今までの友達に對しての心持も少しく離れて、却つて自己を明かに眼の前に見るやうに思つた。

かれは懐に金を七圓持つて居た。其中の幾分を父母の補助に出すつもりであつたが、旅行をする氣が無いでもないの、わざとそれを藏つて置いた。年の暮ももう近寄つた來た。西風が毎日のやうに關東平野の小さな町に吹き暴れた。乾物屋の店には數の子が山のやうに積まれ、肴屋には鮭が板臺の上にくつとなく並べられた。舊曆で正月をするのが此の近在の慣習なので、町はいつもに變らずしんとして、赤い腰巻をした田舎娘も見えなかつた。郡役所と警察署と小學校とそれに重立つた富豪などの注連飾が唯目に立つた。

六疊には炬燵がしてあつた。清三は多く其處に日を暮した。雜誌を讀んだり、小説を讀んだり、時には心理學を繙いて見ることもあつた。傍では母親が賃仕事のあひ間を見て清三の綿衣を縫つて居た。午後には何うかすると町へ行つて餅菓子を買つて來て茶を煎れて呉れることなどもある。一夜、風が吹荒れて、雨に交つて雲が降つた。父と母と清三とは炬燵を取巻いて戸外に荒るゝ凄じい冬の音を聞いて居たが、かうした時に起りかけた一家の財政の話が愚痴っぽい母親の口から出て、借金の多いことが幾度となく繰返された。

『何うも困るなア。』

清三は長大息を吐いた。

『今少し商賣が旨く行くと好いのだが、何うも不景氣でなア。何をやつたつて旨いことはありやしない。』

父親はかう言つた。

『本當にお前には氣の毒だけれど毎月今少し手傳つて貰はなくつては——』母親は息子の顔を見た。

『それは私は儉約をしてゐるんですよ、これで……』と清三は言つて、『煙草も碌々吸はない位にしてゐるんですけど……』

『お前には本當に氣の毒だけれど……』

『父さんにも今少しかせいで貰はなくつちや——』

清三は父に向つて言つた。

父は黙つて居た。

財政の内容を持出して、母親がくどくどと猶語つた。清三は母親に同情せざるを得なかつた。かれは熱心に借金の不得策なのを説いて、貧しければ貧しいやうに生活しなければならぬことを言つた。最後にかれは藏つて置いた金を三圓出して渡した。

友達を訪問しても、もう以前のやうに面白くなかつた。郁治は絶えず遣つて來るが、此方からは滅多に出かけて行かない。逢ふと必ず美穂子の話が出る。それを聞くのが清三には此上なく辛かつた。北川にも行つて見ようと時々思ふが、何だか女々しいやうな氣がして止した。散歩も此頃は野が寒く、それに四邊に見るものがなかつた。かれは退屈すると一軒置いて隣の家に出懸けて行つて、日當りの好い縁側に七つ八つ位の娘の兒を相手に、キシヤゴ弾きなどをして遊んだ。

髪の高い美しい子が其中にあつた。警察へ轉任して來た警部とかの娘で、まだ小學校へも上らぬのに、いろはも數學もよく覺えて居た。百人一首も飛びくくに誦誦して、戀歌などを無意味な可愛い聲で歌つて聞かせた。清三は一から十六までの數を加減して試みて見たが、大抵は間違なくすらくと答へた。かれはセンチメンタルな心の調子で此の娘の子のやがて生ひ立たん行末を想像して見ぬ譯には行かなかつた。『幸あれよ。やさしき戀を得よ。』かう思つたかれの胸には限りなき哀愁が漲り渡つた。

熊谷に出懸けた日は三十日で、西風が強く吹いた。小島も櫻井も東京から歸つて居た。小畑は殊に熱心にかれを迎へた。けれどかれの心は昔のやうに快活にはなれなかつた。舊友は皆な清三の蒼い顔と沈んだ調子と消極的な言葉とをあやしみ見た。清三はまた一層快活になつた友達に對して何だか肩身が狭いやうな氣がした。

熊谷の町は賑かであつた。此處では注連飾が町家の軒毎に立てられて、通りの角には年の暮の市が立

つた。橙、注連、昆布、鰻などが行き通ふ人々の眼に鮮かに見える。どの店でも弓張提灯をつけて、肴屋には鮭、ごまめ、数の子、唐物屋には毛糸、シャツ、ズボン下などが山のやうに並べられてある。夜は人がぞろ／＼と通りをひやかして通つた。

大晦日の朝、清三はさびしい心を抱いて、西風に吹かれながら、例の長い街道をてく／＼と行田に歸つた。今更に感ぜられるのは、境遇につれて變り行く人々の感情であつた。昨年の今頃、かうしたことがあらうとは夢にも思つて居らなかつた。親しい友達の間柄がかういふ風に離れ離れにならうとは知らなかつた。人は境遇の動物であるといふ言葉をかれはこの頃ある本で讀んだことがある。其時は、そんなことがあるものかと餘所に思つてすてた。けれどそれは事實であつた。

家に歸つて見ると、借金取は彼方此方から來て居た。母親が一夕頭を下けて、それに應對して居るさまは見るに忍びない。父親は勘定が取れぬので、日の暮れる頃、しよほ／＼としほれた姿で歸つて來る。『あ、／＼、仕方がねえ？』と長大息をついて、豫算の半分ほども無い財布を母に渡した。清三は見兼ねて、金をまた二圓出した。

夜になつてから、母親は巾着の残りの錢をぢやら／＼音をさせながら、形ばかりの年越をする爲めに町へ買物に行つた。のし餅を三枚、ゴマを一袋、鮭を五切、それに明日の煮染にする里辛を五合ほど風呂敷に包んで、重い重いと言つてやがて歸つて來た。其間に父親は燈明を神棚と臺所と便所とにつ

けて、火鉢には火を活々と起して置いた。やがて年越の膳は出來る。

父親は禿けた頭を下けて、頻りに神棚を拜んで居たが、やがて膳に向つて、『でも、まあ、かうして親子三人年越のお膳に向ふのは目出度い、』と言つて、箸を取つた。豆腐汁に鮭、ゴマメは生で二匹づつお膳につけた。一室は明るかつた。

母親は今夜中に仕立て、了はねばならぬ裁縫物があるので、遅くまでせつせと針を動かして居た。清三は其傍で年賀狀を十五枚ほど書いたが、最後に毎日つける日記帳を出して、ペンで書き出した。

三十一日。

今年もまた暮れ行く。

思ひに思ひ亂れてこの三十四年も暮れ行かんとす。

思ふまじとすれど思はるゝは、此の年の暮なり。

かくて最後の決心はなりぬ。

無言、沈黙、實行。

われは運命に順ふの人ならざるべからず。とても、とても、かくてかゝる世なれば、われはた多くは言はじ。

明星、新聲來る。

あゝ終に〜三十四年は過ぎ去りぬ。わが一生に於て多く忘るべからざる年なりしかな。言はじ、言はじ、唯思ひ至りし一つはこれよ、曰く、かゝる世なり、一人言はで、一人思はむ。あゝ。かれは日記帳を閉ぢて脇へ遣つて、新着の明星を讀み出した。

二十六

一月一日。(三十五年)

これは三年の前、小畑と優なる歌記さんと企て、綴りたるが、其の白きまゝにて今日まで捨てられたるを取り出でて、今年の日記書きて行く。

□去年、それもまだ昨日、終に世のかくてかゝるよと思ひ定めては、またも胸の亂れて口やかましく情とくすべも知らず。草深き里に一人住み、一人自から高うせんに如かず。かくては意氣なしと友の笑はんも知らねど、とてもかゝらねばならぬわが世の運命、それに逆はん勇なきにはさら〜あらねど、二十餘年めぐみ深き母の歎に、まゝよ二年三年はかくてありともくやしからじと思へばこそよ。さてかく行かんとする今年の日記よ、言はじ、唯世にかしこかれよ、只平和なれよ、終に唯無言なれよ。□戀は遂に苦しきもの、我今又これを捨つるもくやしからじ、加藤のそれ、かれの心事、懐に劍をかくすを知らぬにあらねど、争はんは流石にうしろめたく、さらばとてかれも亦かゝる人とは思ひ捨てんこ

そ世にかしこかるべし。

□今日始めて熊谷の小畑に手紙出す。

二日。

昨夜鈴木にて一夜幼き昔を語りあかす。

□あゝわれをして少年少女を愛せしめよ。又もかくての世に神は幸を幼きものにのみ下し給へり。あわれをして幼きものを愛せしめよ。

□Art! それや何なるぞ、とても淺間しき戀に争はんとにあらじと思へば、時に謂ふが如き冷靜も亂れんも知れじを、あゝなどて好ましからぬ思ひの添ふぞ、はかなきことなるかな。あゝ終に終にかくてかゝるなり。

□夕方西に紅の細き雲靡き、上るほど、うす紫より終に淡墨に、下に秩父の山黒々とうつくしけれど、そは光あり力あるそれにはあらで、冬の雲は寒く寂しき、例へんに戀にやぶれ、世に捨てられて終に冷えたるある者の心の如きか。

三日。

晝より風出でて梢鳴ること頻也。冬の野は寒きかな。荒む嵐のすさまじきかな。人の世を寒しと見て野に立てば、さてはいづれに行かん。夕の迷ひに又も神に『救へ』と呼ばんの願なきにあらず。

四日。

夕方、澤田來る。加藤われ等を勧めて北川にかかるた取に行く。かれや何等の友情も知らぬもの、友を賣りてわが利を得んとするものか。又例の『君の望むことにてわが力にて出來得べき限りに於て言へ』を言ふ。われ曰く『なし』と。此言果して、かれの心よりの言葉か。

五日。

偶々學友會の大會に招かれて行く。即ち立ちて、『集會に於て時間の約を守るべきこと』につきて述べ。かくの如き會合に於て演壇に立ちしは初めてなれば心少しくためらひなきにあらざりしが、思ひしより冷靜を以て了りたり。餘興として小燕林の講談あり。

六日。

加藤と雪子と鈴木君の妹の君とかるた取る。

□夜、戸の外は西風寒く吹く。あゝわれは此力弱き腕を自己を、高きに進ますすら容易ならざるに、猶も一人の母と一人の父との爲に走らざるべからざるか。さもあらばあれ、冷酷なる運命の道に荒む嵐をして其まゝに荒れしめよ。われに思ふ所あり、何ぞ妄りに汝の渦中に落ち入らんや。

松は男の立姿

意地にやまけまい、ふけふけ嵐

枝は折れよと根は折れぬ (正置正太夫)

□此頃の風に、さては南の森蔭に、弟の弱きむくろはいかにあるらん。心のみにて今日も訪はず。かくて明日は東に行く身なり。

七日。

羽生の寺に歸る。

心にはかくと思ひ定めたれど、さすがに冬枯の野は淋しきかな。

□○子よ、御身は今はいかにおはすや。笑止やわれは猶御身を戀へり。さはれ、あゝさはれとてもかゝる世ならば我は唯一人戀うて一人泣くべきに、何とて御身を煩はすべきぞ。

主の僧ととろゝ食うて親しく語る。夜、寒し。

九日。

今朝、此冬、此年の初雪を見る。

夜、菽生君來り、わが爲めに炭と菓子とを齎らす。冷かなる人の世に友の心の温かさよ。願はくばわれをして友に誠ならしめよ。(夜十時半記)

■十日より二十日まで。

此間十日餘り一日、思ひは亂れて寺へも歸らず。かくて老いんの願ひにはあらねど、さすが人並賢く悟

りたるものを、さらでも尙とやせんかくやすらんのもどひ、はては神に縋らん力もなくて人とも多くは言はじな、語らじなと思へば、いと懶くて、日頃親しき友に文書かんも厭や、行田へ行かんも厭ふにはあらねど又ものうく、かくて繪もかけず詩も出でず、この十日は一人過ぎぬ。

□土曜日に菰生君来り一夜を語る。情深く心小さき友！

□加藤は戀に酔ひ、小畑は自から好んで俗に入る。此間かれの手紙に曰く、『好んで詩人となる勿れ、好んで俗物となる勿れ』と。あゝさても好んでしかも詩人となり得ず、さらばとて俗物となり得ず。はては惑ひのとやとかくと、熱き情のふと消え行くらんやう覺えて、失意より沈黙へ、沈黙より冷靜に、かくて苦笑に止まん願ひ、とはにと言はじ、かくてしばしよと思へば悲しくもあらじ。さはれ木枯吹荒む夜半、幸多き友の多くを思ひては、又もこの里のさすがにさびしきかな、まゝよ萬事かゝらんのみ、奮勵一番飛び出でんかの思ひなきにあらねど、又靜かにわが身の運命を思へば……、あゝしばしはかくてありなん。

亂るゝ心を靜むるは幼き者と繪と詩と音楽と。

近き數日、黙々として多く語らず、一人思ひ思ふ。……

……
かういふ風にかれの日記は續いた。昨年春頃比べて、心の調子、筆の調子が著しく消極的になつ

たのをかれも氣が附かすには居られなかつた。時には昨年日記帳を繕いて讀んで見ることなどもあるが、其處には諧謔もあれば洒落もある。笑の影が到る處に認められる。今と比べて世の中の實際を知らぬだけだけ暢氣であつた。

消極的に總てから——戀から、世から、友情から、家庭から全く離れて了はうと思ふほど其心は傷いてゐた。寺の本堂の間は渠には餘りに寂しかつた。それに二里足らずの路を朝に夕に通ふのも面倒臭い。渠は放浪する人々のやうに、宿直室に寝たり、村の酒屋に行つて泊つたり、時には寺に歸つて寝たりした。自炊が懶いので、辨當を其處此處で取つて食つた。駄菓子などで午餐を濟して置くことなどもある。本堂の一間に菰生さんが行つて見ると、主は大抵留守で、机の上には塵が積つたまゝ、古い新聲と明星とが四邊に散らばつたまゝになつてゐる。和尚さんは、『林君、何うしたんですか、餘り久しく歸つて來ませんが……學校に何か忙しいことでもあるんですかねえ、』と言つた。菰生さんが心配して、忙しい郵便事務の閑を見て、わざ／＼彌勒まで出懸けて行くと、清三は別に變つたやうなところもなく、いつも無性にしてゐる髪も綺麗に刈込んで、にこ／＼して出て來た。『何うもこの寒いのに、朝早く起きて通ふのが辛いものだからねえ、君、此處で小使と一緒に寝て居れば、子供がぞろ／＼遣つて來る時分までゆつくりと寝て居られるものだから、』などと言つた。八疊の一間で、長押の釘には古袴だの三尺帯だのが懸けてある。机には生徒の作文の朱で直し懸けたのと、かれが此頃始めた水彩畫の寫生し懸けたのとが

置いてあつた。教授が終つて校長や同僚が歸つてから、清三は自分で出懸けて菓子を買つて来て二人で食つた、かれは茶を飲みながら二三枚寫生した拙い水彩畫を出して友に示した。學校の門と、垣に夕日の射し残つたところと、暮靄の中に富士の薄く出て居るところと、それに生徒の顔の寫生が一枚あつた。萩生さんは手に取つて、ヂツと見入つて、『君なか／＼器用ですねえ、』と感心した。清三は此頃集めた譜のついた新しい歌曲をオルガンに合せて弾いて見せた。

冬は愈々寒くなつた。晝の雨は夜の霰となつて、あくれば校庭は一面の雪、早く来た生徒は雪達磨を拵へたり雪合戦をしたりして騒いで居る。美しく晴れた軒には雀が喧しく百轉をして居る。雪の來た後の道路は泥濘が連日乾かず、高い足駄も何うかすると埋つて取られて了ふことなどもある。乗合馬車は屋根の覆まではねを上げて通つた。

机の前の障子にさし残る冬の日影は少くとも清三の心を沈靜させた。なるやうにしかならんといふ状態から、やがて、『自己の盡すだけを盡して潔く運命に従はう』といふ心の状態になつた。嘆息と涙との後に、靜かなさびしいしかし甘い安靜が來た。霽の降る夜半に、『夜を寒みあられたばしる音しきりさゆる寢覺を（母いかならん）』と歌つて家の母の情を思つたり、『さむきさびしき夜半の床も、さはれ心靜かなれば、さすがに苦しからじ。』と日記に書いて自から獨り慰めたりした。又ある時は、『思ふことなく暮さばや、我が世の昨日は幸なきにもあらず、幸ありしにもあらず。』と書いた。またある日の日記には、『昨

夜、一箇の老鼠、係締にかゝる。哀れなる者よ。汝も運命のしもとを免がれ得ぬ不運兒か。ひそかに助け得させべくば救けも得さすべきを、我も汝をかくすべき縁持つ人間なればぞ、哀れなるものよ、寧ろ汝は夜毎の餌に迷ふよりは、かくて此儘この係締に終れ。哀れなるものよ。』と書いてあつた。日曜日を羽生の寺にも行田の家にも行かず、『今日は日曜日、又しても一日をかくて此處に過さんと一人朝は遅くまでいねたり。』と書いて宿直室に過した。

郁治も櫻井も小畑も高等師範の入學試験を受ける爲めに浦和へ行つたといふ報があつた。孝明天皇祭の日を久し振で行田に歸つて見ると、話相手になるやうな友達はもう一人も居なかつた。雪子は例のしらく／＼しい態度でかれを迎へた。かれはむしろ快活な無邪氣なしけ子をなつかしく思ふやうになつた。歸る時、母親は昨日から丹精して煮てあつた鮎のかんろ煮を折に入れて持たせてよこした。

此頃は全く世を離れて一人暮した。新聞も減多には手にしたことはない。第五師團の分捕問題、青森第三聯隊の雪中行軍凍死問題、鑛毒事件、二號活字は一面と二面とに毎日見える。平生ならば、新聞を忠實に注意して見るかれのことゝて、いろ／＼と話の種にしたり日記につけて置いたりするのであるが、此頃はそんなことは何うでもよかつた。人が話して聞かせても、『さうですか』と言つて相手にもならなかつた。愛讀して居た涙香の『巖窟王』も途中で止して了つた。學校の庭の後には竹藪が五十坪ほどあつて、夕日がいつも其葉を透して宿直室に射し込んで來るが、ある夜、其の向うの百姓家から『福は内

鬼は外』と叫ぶ爺の聲が洩れて聞えた。『あ、今日は節分かしらん』と思つて、清三は新聞の正月の繪附録日記を出して見た。それほどかれは世事に疎く暮した。

毎日四時過になると、前の錢湯の板木の音が、靜かに寒い茅葺屋根の多い田舎の街道に響いた。

羽生の和尚さんと酒を飲んで、

『何うです、一つ社會を風靡するやうなことを遣らうぢやありませんか。何でも好いですから。』

こんなことを言ふかと思ふと、『自分はどんな事業をするにしても、社會の改良でも思想界の救済でも、それは何をするにしても、人間として生きて居る上は生きられるだけの物質は得なければならぬ。そしてそれは成るべく自分が社會に盡した仕事の報酬として受け度いと自分は思ふ。それには自分は小學校の教員から段々進んで中學程度の教員にならうか。それとも自分はこの高き美しき小學校の生涯を以て満足しようか。』などと考へることもある。一方には多くの友達のやうに花々しく世の中に出て行き度いと思ふが、又一方では小學校教員を尊い神聖なものにして少年少女の無邪氣な伴侶として一生を送る方が理想的な生活だとも思つた。友に離れ、戀に離れ、社會に離れて、わざとこの孤獨な生活に生きようといふやうな反抗的な考も起つた。

あの日校長が云つた。『何うです。さうして毎日宿直室に泊つて居る位なら、寺から荷物を持つて來て、此處で自炊なり何なりして居るやうにしたら……さうすれば、私の方でもわざ／＼宿直を置かないで

好いし、君にも間代が出なくつて經濟になる。第一、二里の道を通ふといふ勞力が省ける。』羽生の和尚さんも此間行つた時、『一體何うなさるんです、かう明けて居らしては間代を頂戴するのもお氣の毒だし、……それに、冬は通ふのに随分大變ですからなア、』と言つた。清三は寺に寄宿する頃の心地と今の心地と著しく違つて來たことを考へずには居られなかつた。其頃から比べると、希望も目的も感情も全く違つて來た。『行田文學』も廢刊した。文學に集つた友の群も離散した。かれ自身にしても、文學書類を讀むよりも、繪畫の寫生をしたり、音樂の譜の本を集めてオルガンを鳴して見たりすることが多くなつた。それに、行田にもさう度々は行きたくなくなつた。かれは月の中頃に蒲團と本箱とを羽生の寺から運んで來た。

二七七

『喜平さんな、とんでもねえこんだつたつてなア。』

『ほんにさア、今朝行く時、己ア邂逅しただアよ。網イ持つて行くから、この寒いのに日振りに行くけえ、御苦勞なこつちやなアつて挨拶したアよ。わからねえもんだよなア。』

『どうしてまアそんなことになつたんだんべい？』

『ほんにさ、彼處は堀切で、何でもねえ處だがなア。』

『一體何處だな。』

『そら、あの西の勘三さんの田中の堀切でござねて居たんだつてよ。泥深い中に體が半分突つさつたまゝ、首いかう低れてつめたくなつたんだつてよ。』

『あつけねえこんだなア。』

『今日はア、御賽日だつてに。これもア、さういふ縁を持つて生れて來たんだんべい。』

『わしらもア、此春ア、日振りなんぞはすべいよ。』

湯氣の籠つた狭い錢湯の中で、村の人々はかうした噂をした。喜平といふのは、村はづれの小屋に住んで居る五十ばかりの爺で、雑魚や鰯を捕へては、それを賣つて、其日々々の口をぬらして居た。毎日のやうに汚い風をして、古い繕つた網を擔いで、川やら堀切やらに出かけて行つた。途中で學校の先生や村役場の人などに邂逅すと、いつも丁寧な辭儀をした。それが今日堀切の中で凍えて死んで居たといふ。清三は湯につかりながら、村の人々のさまぐに噂し合ふのを聞いて居た。かうして生れて生きて死んで行く人をかうして噂し合つて居る村の人々のことを考へずには居られなかつた。古網を張つたまゝ、泥の中に凍えた體を立て、死んで居た爺のさまをも想像した。茫とした湯氣の中に水槽に落ちる水の音が聞えた。

二十八

授業も済み、同僚も大方歸つて、校長と二人で宿直室で話して居ると、其處に雑魚賣が遣つて來た。

『旦那、鮒を安く買はんけい。』

障子を明けると、莞爾した爺が、びくを其處に置いて立つて居た。

『鮒は要らんア。』

『安く負けて置くで、買つてくんない。』

校長さんは清三を顧みて、『君は要りませんか、廉けれや、少し買つて、甘露煮にして置くと好いがね、』と言つた。で、二人は縁側に出て見た。

二つのびくには、五寸位から三寸位の鮒が金色の腹を光らせてゴチャ／＼して居る。

『少し小さいな。』

と校長さんは言つた。

『小せい處か、甘露煮にするにはこの位がごくだアな。それに、板倉で取れたんだで、骨は柔けい。』種類としては質の好い鮒なのを校長はすぐ見て取つた。利根川を渡つて一里、其處に板倉沼といふのがある。沼の畔に雷電を祭つた神社がある。其處等あたりは利根川の河床よりも低い卑濕地で、小さい

沼が一面にあつた。上州から来る鮒や雑魚の旨いのは、此處等でも評判だ。

『幾がけだね？』

『七なら高くはあんめえと思ふんだが。』

『七は高い！』

『目方をよくして置くだで七で買つて呉んなせい。』

『五位なら好いが。』

『五なんてそんな値はねえだ。ぢや今半分引くべし。』

清三は校長さんの物を買ふのに上手なのを笑つて見て居た。六がけで話が決つて、小使が其處に桶と挿鉢とを運んで来た。ピンとするほどはかりをかけた鮒はヒク／＼と臆を動かして居る。爺はやがて錢を受取つて軽くなつたびくを擔いで歸つて行く。

『廉い、廉い。これを煮て置けや、君、十日もありますよ。』

かう言つて校長さんは、鮒の中でも大きいのを一尾つかんで、『どうも、上州の鮒は好い。コケが丸でこつちで取れたのとは違ふんですからな、』と言つて清三に示した。半分に分けて、小桶に入れて、小使が校長さんの家を持つて行つた。

其日は鮒の料理に暮れた。組板の上でコケを取つて、金串にそれをさして、圍爐裏に火を起して焼いた。小使は其傍でせつせと草鞋を造つて居る。一疋で金串が全く占められるやうな大きなのもこつ三つはあつた。薄くこける位に焼いて、それを薬にさした。

『随分あるものだね、』と數へて見て、『十九串ある。』

『廉かつた、校長さん負けさせる名人だ。これ位の鮒で六つて云ふ値があるものかな。』

小使は傍から言つた。

試みに煮て見ようと言ふので、五串ばかり小鍋に入れて、昆爐にかけた。寝る時味つて見たが骨はまだ固かつた。

自炊生活は清三に取つて、結局氣樂でもあり經濟でもあつた、多くは豆腐と油揚と乾鮭とで日を送つた。鮒の甘露煮は二度目に煮た時から成功した。砂糖を餘り使ひ過ぎたので、分けて遣つた小使は、『林さんの甘露煮は菓子を食ふやうだ、』と言つた。生徒は時々萩の餅などを持つて来て呉れる。もろこしと糯米の粉で製したといふ餠餅なども持つて来て呉れる。何うかして勉強したい。田舎に居て勉強するのも東京に出て勉強するのも心持一つで同じことだ。學費を親から出して貰ふ友達にも負けぬやうに學問したいと思つて、心理學や倫理學などを精々と讀んだが、餘儀なき依頼で、高等の生徒に英語を教へて遣つたのが始りで、段々ナショナルの一や二を持つて教はりに来るものが多くなつて、後には、かう閑を潰されてはならないと思ひながら、夜は大抵宿直室に生徒が集るやうになつた。

二月の末には梅が咲き初めた。障子を明けると、竹藪の中に花が見えた。風につれて好い匂がする。一日、かれは机に向つて、

鄙はさびしき此里に

さきて出でにし白梅や

一枝いだきて唯一人

低くしらぶる春の歌

と歌つて、それを手帳に書いた。淋しい思が脈々として胸に上つた。ふと傍に古い中學世界に梅の繪に鄙少女を描いた繪葉書のあるのを發見した。かれはそれを手に取つてその歌を書いて、『都を知らぬ鄙少女』と署して、さてそれを浦和の美穂子の許に送らうと思つた。けれど監督の嚴重な寄宿舎のことを思つて止した。ふと美穂子の姉にいく子と言ふのがあつて、音楽が好きで、其身も二三度手紙を遣取りしたことがあるのを思ひ出して、譜をつけてそこに遣ることにした。

かれは夕暮など校庭を歩きながら、この自作の歌を低い聲で歌つた。『低くしらぶる春の歌』と歌ふと、つくづく自分のさびしいはかない境遇が眼の前に浮び出すやうな氣がして涙が流れた。

此頃、友達から手紙の來るのも少くなつた。熊谷の小畑にも、此間行つた時、處世上の意見が合はないので、議論をしたが、それから大分疎々しく暮らした。郁治から來る手紙には美穂子のことや吃度書いてあるので、返事を書く氣にもならなかつた。それに引きかへて、彌勒の人々には大分懇意になつた。此頃では、何處の家へ行つても、先生々と立てられぬところはない。それに同僚の中でも、師範校出の氣障な意地の悪い教員が加須へ行つて了つたので、氣の置ける人がなくなつて、學校の空氣がしつくり自分に合つて來た。

物日の休みにも、日曜日にも、大抵宿直室でくらしした。利根川を越えて一里ばかり、高取といふ處に天満宮があつて、三月初旬の大祭には、近在から境内に立錐の地も無いほど人々が參詣した。清三も昔一度行つて見たことがある。見世物、露店——鰐口の音が絶えず聞えた。ことに手習が上手になるやうにと親がよく子供を連れて行くので、其の日は毎年學校が休みになる。午後清三が宿直室で手紙を書いて居ると、參詣に行つた生徒が二組三組寄つて行つた。

二十九

發戸には機屋が澤山あつた。市毎に百反以上町に持つて出る家が尠くとも七八軒はある。勿論機屋と謂つても軒をつらねて部落を爲して居る譯ではない。鳥渡見ると、普通の農家とあまり違つて居ない。蠶豆、筴豌豆の畑が周圍を取巻いて居て、夏は茄子や胡瓜が其處等一面に出来る。玉蜀黍もガサ／＼と風に靡く。

けれど家の中に入ると、様子が大分違ふ。藍瓶が幾つとなく入口の向うにあつて、其處に染工職人がせつせと糸を染めて居る。白い糸が山のやうに積んであると、其傍で雇人が頻りにそれを選分けてゐる。反物を入れる大きな戸棚も見える。

前の廣庭には高い物干竿が幾列びにも順序よく並んで居て、朝から紺糸がずらりと其處に干しつらねられる。糸を繰る座繰の音が驟雨のやうに彼方此方からにぎやかに聞える。

機屋の周圍には、賃機を織る音が盛にした。

あたりの村落のしんとして居るのに引きかへて、此處には活氣が充ちて居た。金持も多かつた。他郷から入つて来た若い男女も随分あつた。

發戸は風儀の悪い村と近所から言はれてゐる。埼玉新報の三面種にも屹度此村のことが毎月一つや二つは出る。機屋の亭主が女工を片端から姦して牢屋に入れられた話もあれば、利根川に臨んだ崖から、越後の女と上州の男とが情死をしたこともある、街道に接して、だるま屋も二三軒はあつた。

八月が来ると、盛んな盆踊が每晚其處で開かれた。學校に宿直して居ると、其の踊る音が手に取るやうに講堂の硝子にひびいて分明と聞える。十一時を過ぎても容易に止みさうな氣勢もない。昨年九月、清三が宿直に當つた時は、丁度月の冴えた夜で、垣には虫の聲が雨のやうに聞えて居た。『發戸の盆踊はそれは盛んですが、林さん、まだ行つて見たことがないんですか。それぢや是非一度は出かけて見なく

つてはいけませんな……けれど、林さんのやうな色男は餘程注意しないといけませんぜ、袖位ちぎられて了ひますからな、』と訓導の杉田が笑ひながら言つた。しかし清三は行つて見ようとも思はなかつた。唯その面白さうな音が夜ふけまで聞えるのを耳にしたばかりであつた。

其他にも、發戸のことに就いて、清三の聞いたことはいくらもあつた。一二年前までは、此處に男振の好い教員などが宿直をしてゐると、發戸の女は群を成して、づか／＼と庭から入つて来て、圖々しく話をして行くことなどもあつたといふ。それから生徒を見ても、發戸の風儀の悪いのは解つた。同じ行儀の悪いのでも其處から来る生徒は他とは違つて居た。野卑な歌を口ぐせに教場で歌つて水を満した茶碗を持つて立たせられる子などもあつた。

春になつて、野に菫が咲く頃になると、清三は散歩を始めた。古ぼけた茶色の帽子を被つた春のすらりとして瘦削な姿は其處にも見えた。百姓は學校の若い先生が野川の橋の上に立つて、ほんやりと夕焼の雲を見て居るのを見たこともあるし、朝早く役場の向うの道を歩いて居るのに出逢ふこともあつた。役場の小使と立話をして居ることもあれば、畠に居る人々と挨拶して居ることもある。時には、學校の女生徒を二三人連れて、林の中で花を摘ませて花束を作らせたり何かしてゐることなどもある。彌勒野の林の角で、夕暮の空を寫生してゐると、

『やア、先生だ、先生だ！』

『先生が何か書いてるア。』

『やア畫を描いてるんだ。』

『あの雲を描いてるんだぜ。』

などと近所の生徒がぞろ／＼と其周圍に集つて来る。

『旨いなア、先生は。』

『それは當り前よ、先生ぢやねえか。』

『あゝあれがあの雲だ。』

『その下のがあの家だ。』

黙つて筆を運ばせて居ると、勝手なことを言つて饒舌つて居る。何うしてあんなに旨く書けるのかと疑ふかのやうにちつと先生の顔を覗き込む子などもあつた。翌日學校に行くと、其生徒達はめづらしいことを見て知つてゐるといふ風にそれを他の生徒に吹聴した。『先生、昨日書いてた繪を見せて下さい！』などと言つた。

清三は段々近所のことについて詳しくなつた。林の奥に思ひもかけぬ一軒家があることも知つた。豪農の家の櫛の垣の向うに楊の生えた小川があつて、其處に高等二年生で一番出来る女生徒の家があることをも知つた。其家には草の繁つた井戸があつて桔槔がかゝつて居た。丁度其時其娘は其處に出て居た。『お前

の家は此處だね、』と言つて通り抜けようとする。『おつかさん、先生が通るよ！』と言つた。母親は小川で後向になつてせつせと何か物を洗つて居た。加須に通ふ街道には畠があつたり森があつたり榛の並木があつたりした。ある時櫛の林の中に色の濃い藁が咲いて居たのを發見して、それを根ごしにして取つて来て鉢に植ゑて机の上に置いた。村を外れると、街道は平垣な田圃の中に通じて、白い塵埃が微かな風に颯るのが見えた。機廻りの車やつかれた旅客などがをり／＼通つた。

ある夜、學校の前の半鐘が烈しく鳴つた。竹藪の向うに出て見ると、空がほんやりと赤くなつて居る。やがてその火事は手古林であつたことが解つた。翌々日の散歩に、ふと氣が附くと、清三は其の焼けた家屋の前に立つて居るのを發見した。此間焼けたのは此家だなとかれは思つた。それは村道に接した一軒家で、藁で圍つた小屋掛がもう其隅に出来て居た。焼跡には灰や焼残りの柱などが散らばつて居て、井戸側の半分焼けた流元では、襷をした女が頻りに膳碗を洗つて居る。小屋掛の中からは村の人が出たり入つたりして居る。かれは平和な田舎に忽然とした起つた事件を考へながら歩いた。一夜の不意の出来事の爲めに、一家の運命に大きな頓挫を來すべきことなどをも思ひ遣らぬ譯には行かなかつた。金錢の貴い田舎では、新に一軒の家屋を建てる爲めにもある個人の一生を烈しい勞働に費さねばならぬのである。かれは唯々功名に熱し學問に熱して居た熊谷や行田の友人達をかうしたハアドライフを送る人々に比べて考へて見た。續いて日毎に新聞紙上に顯はれる豪い人々のライフをも描いて見た。豪い人にはそれ

はなりたい。立派な生活を送りたい。しかし平凡に生活して居る人もいくらもある。一家の幸福——弱い母の幸福を犠牲にしましても、功名に赴かなくてはならぬこともない。寧ろ自分は平凡なる生活に甘んずる。かう考へながらかれは歩いた。

寒い日に體を泥の中に突刺して凍え死んだ爺の堀切にも行つて見たことがある。其處には葦と萱とが新芽を出して、蛙が音を立て、水に飛び込んだ。森の中には荒れ果てた社があつたり、林の角からは富士がよく見えたり、田に蓮華草が敷いたやうに見事に咲いて居たりした。それにかうして住んで見ると、聞くともなしに村のいろ／＼な話が耳に入る。家事を苦にして用水に身を投げた女の話、旅人にだまされて林の中に引張込まれて強姦された村の子守の話、三人組の強盗が抜刀で上村の豪農の家に入つて、主人と細君とを縛り上げて金を奪つて行つた話、繭の仲買の男が酌婦と情死した話など、聞けば聞くほど平和だと思つた村にも辛い悲しいライフがあるのを發見した。地主と小作との關係、富者と貧者の甚しい懸隔、清い理想的の生活をして自然の穏かな懐に抱かれて居ると思つた田舎も矢張争鬭の蒼利慾の世であるといふことが段々解つて來た。

それに、田舎は存外猥褻で淫靡で不潔であるといふことも解つて來た。人々の噂話にもそんなことが多い。やれ、何處の娘は何うしたとか、何處の上さんは何處の誰と不義をして居るとか、誰は何處にこつそり妾を圍つて置くとか、女のことと夫婦喧嘩が絶えないとか、さういふことが絶えず耳を打つ。それに、さうした噂が滿更虚偽でないといふ證據も時には眼にも映つた。

かれは一日、また利根川の畔に生徒をつれて行つたが、其夜、次のやうな新體詩を作つて日記に書いた。

松原遠く日は暮れて

利根のながれのゆるやかに

ながめ淋しき村里の

此處に一年かりの庵。

はかなき戀も世も捨て、

願ひもなくて唯一人

さびしく歌ふわがうたを

あはれと聞かんすべもがな。

かれは時々かうしたセンチメンタルな心になつたが、しかしこれはその心の状態の總てではなかつた。村の若い者が夜遅くなつてから、栗橋の川向うの四里もある中田まで、女郎買ひに行く話なども面白がつて聞いた。大越から通ふ老訓導は、酒でもものむと、洒脱な口振りで、其處から近い其遊廓の話をして聞かせることがある。群馬埼玉の二縣は曾て廢娼論の盛んであつた土地なので、其管内にはだるまば

かり發達して、遊廓がない。足利の福居は遠いし、佐野のあら町は不便だし、此處等から若者が出かけるには、茨城縣の古河か中田に行くより外仕方がない。中田には大越まで乗合馬車の便がある。大越から土手の上を二里ほど行つて、利根の渡をわたれば中田はすぐである。『店があれば五六軒はありますかなア。昔、奥州街道が榮えた時分には、あれでも中々賑かなものでしたが、今では駄目ですよ。私等、若い時にはそれはよく出かけたものですア。利根川の渡をいつも夕方に渡つて行くんだが、夕焼の雲が水に映つて、それは面白かつたですよ、』と老訓導は笑つて語つた。

時には、

『今の若い者は何うも堅過ぎる。學問をするから、何うしてもそんなことは馬鹿々々しくつてする氣になれんのかしれんが、海老茶とか鹿髪とかに關係をつけると、後ではのつびきならんことが起つて、身の破滅になることもある。それに、一人で本ばかり讀んで居るのは、若い者には善し悪しですよ。神經衰弱になつたり、華嚴に飛込んだりするのには其爲めだと言ふぢやありませんか。青瓢箪のやうな顔をして居る青年ばかり拵へちや、學問が出来て思想が高尙になつたつて、何の役にも立たん。ちと若い者は浩然の氣を養ふ位の元氣がなくちやいけませんア。』

などといふ。

清三が書籍ばかり見て、蒼い顔をして、一人さびしさうにして宿直室に居ると、『あんまり勉強すると

肺病が出ますぜ。少し遊ぶ方が好い。學校の先生だつて、同じ人間だ。さう道德倫理で束縛されては生命がつゝかん。』かう言つて笑つた。校長が師範學校から出た當座、まだ今の細君が出来ない時分、川越でひどい酌婦にかゝつて、それがばれさうになつて轉校した話や、つい此間まで居た師範出の教員が小川屋の娘に氣があつて、毎晩張りに行つた話などをして聞かせたのも矢張この老訓導であつた。宿直室に来てから、清三はいろ／＼な實際を見せられたり聞かせられたりした。中學校の學窓や親の家や友達のアクルや世離れた寺の本堂などで知ることの出来ないことを段々知つた。

發戸の方に散歩をしたのは田植唄が野に聞える頃からであつた。花が散つてやがて若葉が新しい色彩を村に漲らした。路の角で機を織つて居る女の前に立つて村の若者が何か饒舌つて居ると、女は知らん顔でせつせと梭を連んで居る。機屋の前には機廻りの車が一二臺置いてあつて、物干に並べて懸けた紺糸が初夏の美しい日に照されて居る。藍の匂ひが何處からともなくブンとして来る。竹藪の蔭からやさしい唄が微かに聞える。

加須街道方面とは全く違つた感じをかれに與へた。彼方はしんとして居る。人氣に乏しい。娘なども餘り通らない。概して活氣に乏しいが、此方は何の家にも此の家にも糸を繰る音と機を織る音が間斷なしに聞える。村から離れて、田圃の中に、飲食店が一軒あつて夕方など通ると、若い者が二三人屹度酒を飲んで居る。亭主はだらしない風で、それを相手に無駄話をして居る。鼻は汚ない鼻たらしの子供を

叱つて居る。

發戸の右に下村君、堤、名村などといふ小字があつた。藁葺屋根が晨の星のやうに散ばつてゐるが、此處では利根川が少し北に偏つて流れて居るので、土手に行くまではかなりある。土手には矢張發戸河岸のやうにところ／＼に赤松が生えて居た。しの竹も茂つて居た。朝露のしとゞに置いた草原の中に薊やら撫子やらが咲いた。

土手の上を暢氣さうに散歩して居るかれの姿をあたりの人々は常に見た。松原の中に入つて、草を藉いて、喪心した人のやうに、前に白帆の徐かに動いて行くのを見てゐることもある。『學校の先生さん、いやに蒼い顔して居るだア。女さア欲しくなつたんだんべい、』と土手下の元氣な婆が言つた。機織女の中にも、清三の男振の好いのに大騒ぎをして、その通るのを待受けて出て見るものもある。下村君の村落に入らうとする處に、大和障子を半分明けてせつせと終日機を織つてゐる女がある。丸顔の、眼のぱつちりした、眉の切れの好い十八九の娘であつた。清三はわざ／＼廻り道していつも其處を通つた。見かへる清三の顔を娘も見かへした。

ある時かういふことがあつた。土手の松原から發戸の方に下りようとする、向うから機織女が三人ほど遣つて來た。清三は何の氣もなしに近寄つて行くと、女共はけた／＼笑つて居る。一人の女が他の一人を突つくと、一人はまた他の一人を突つた。清三は不思議なことをして居ると思つたばかりで、同

じ調子で、ステッキを振りながら歩いて行つた。坂には兩側から繁つた楢の若葉が美しく夕日に光つてチラ／＼した。通りすぎる時、女共は路を除けて、笑ひたいのを強ひて押へたといふやうな顔をして、男を見て居る。調戲ふ氣だなどといふことが始めて解つたが、しかし別段悪い氣もしなかつた。侮辱されたとも氣まりが悪いとも思はなかつた。寧ろ此方からも相手になつて調戲つてやらうかと思ふ位に心の調子が輕かつた。通り過ぎて一二間行つたと思ふと、女共はけらく／＼笑つた。清三が振返ると、一番年かきの女がお出で／＼をして笑つて居る。此方でも笑つて見せると、づ／＼しく二歩三歩近寄つて來て、

『學校の先生さん！』

一人が言ふと、

『林さん！』

『い、男の林さん！』

と續いて言つた。名まで知つて居るのを清三は驚いた。

『い、男の林さん』も、かれには著るしく意外であつた。曲り角で振返つて見ると、女共は坂の上の路にかたまつて、此方を見て居た。

川向うの上州の赤岩附近では、女の風儀の悪いのは非常で、學校の教員は獨身ではつとまらないとい

ふ話を思ひ出した。何でも其處では、先生が獨身で下宿などをしていると、夏の夜など五人も六人も押かけて行つて、無理やりに伴れ出してふといふ。仕方がないから、夜は鍵をかけて置く、かう其處につとめて居た人が話した。かれは心に微笑みながら歩いた。

だるまやも其處に二軒はあつた。晝間はいやに蒼い顔をした女がだらしの無い風をして店に出て居るが、夜になると、それが皆なおつくりをして、見違へたやうな綺麗な女になつて、客を相手にキャッキヤツと騒いでゐる。段々夏が來て、其店の前の棚の下には縁臺が置かれて、夕顔の花が薄暮の中にはつきりと際立つて見える。

『貴郎、何うしたんですよ、此頃は。』

『だつて仕方がない、忙しいからなア。』

『ちやんと種は上つてるよ、そんなこと言つたつて。』

『種があるなら上げるさ。』

『憎らしい、本當に浮氣者！』

ピシヤリと女が男の肩を打つた。

『痛い！ 馬鹿奴。』

と男が打ちかへさうとする。女は打たれまいとする。男の手と女の腕とが互に絡み合ふ。女は體を斜

にして、足を縁臺の外に伸ばすと、赤い蹴出しと白い腿のあたりとが見えた。

清三はさうした傍を見ぬやうにして通つた。

夜はことに驚かされた。路の畔に若い男女が幾組となく立話をして居る。闇には、白地の浴衣が其處にも此處にも見える。笑ふ聲が彼方此方にした。

今年の夏休みがやがて來た。小畑と郁治とは高等師範の入學試験に合格して、この九月からは東京に行くことにきまつた。櫻井は淺草の工業學校に入學した。其合格の報が來たのは五月頃であつたが、かれは心の煩悶を成たけ表面に出さぬやうにして、落附いた平凡な普通な祝狀を三人に出して置いた。六月に、行田に行つた時に、鳥渡郁治に逢つたが、もう以前のやうな親しみはなかつた。逢へば、流石に君僕で隠すところなく話すが、別れて居れば思ひ出すことが尠く、従つて、訪問も減多にしなかつた。

美穂子にも一度逢つた。頬のあたりが肥えて、眼にはやさしい表情があつた。けれど清三の心はもうそれが爲めに動かされるほど其影が濃く寫つて居らなかつた。唯、見知越の女のやうに挨拶して通つた。やがて八月の中頃になつて郁治は東京に行つた。石川も此頃は病氣で鎌倉に行つてゐる。熊谷の友達で残つて居るものは、學校に居る頃もさう懇意にしてゐなかつた人々ばかりだ。清三もつまらぬから、何處か旅でもして見ようかと思つた。けれど母親の苦しい家計を見兼ねて五圓渡して了つたので、財布にはもういくらかも残つて居ない。近所の山にも行かれさうにもない。で、月の二十日には、どうせ狭い暑い家

に寝てるより學校の風通しの好い宿直室の方が好いと思つて、彌勒へと歸つて來た。途中で、久し振で成願寺に寄つて見ると、和尚さんは晝寢をして居た。

風通しい好い十疊で話した。和尚さんはビールなどを出してチャホヤした。不圖、其處に庇髮に結つて、紫色の銘仙の矢絰を着て、白足袋を穿いた十六位の美しい色の白い娘が出て來た。

歸りに荻生さんに逢つて聞くと、

『あれは、君、和尚さんの姪だよ。夏休みに東京から來てるんだよ。何うも、田舎の土臭い中に育つた娘とは違ふねえ。何處かハイカラの處があるねえ。』

かう言つて笑つた。荻生さんは依然として元の荻生さんで、町の菓子屋から餅菓子を買つて來て御馳走した。郵便事務の暑い忙しい中で、暑中休暇もなしに、不平も言はずに、生活して居る。友達之ズン／＼出て行くのを羨まうともしない。清三の心持では、荻生さんのやうなあきらめの好い運命に従順な人には及び難いと思ふが、しかし何となく嫌らないやうな氣がする。樂みもなく道樂もなくよくあ、して生きて居られると思ふ。其日、『何うです。あまりつまらない、一つ料理屋へでも行つて、女でも相手にして酒でも飲まうぢやありませんか、』と言ふと、『酒を飲んだつて詰らない、』と言つて賛成しなかつた。清三は暑い木蔭のないほこり道を不満足な心持を抱いて學校に歸つて來た。

三十

盆踊は賑かであつた。空は晴れて水のやうな月夜が幾夜か續いた。樽拍子が唄につれて手に取るやうに聞える。其賑かな氣勢をさびしい宿直室で一人ぢつとして聞いては居られなかつた。清三は誘はれてすぐ出懸けた。

盆踊のある處は村の真中の廣場であつた。人が遠近からぞろ／＼と集つて來る。樽拍子の音が揃ふと白い手拭を被つた男と女とが手をつないで輪をつくつて調子よく踊り始める。上手な音頭取につれて、誰れも彼れも熱心に踊つた。

九時過ぎからは、人が益々多く集つた。踊り勞れると、後からも後からも新しい踊手が加はつて來る。輪は段々大きくなる。樽拍子は益々冴えて來る。もう餘程高くなつた月は向うのひろ／＼した田から一面に廣場を照して、樹の影の黒く地に印した間に、踊手の踊つて行くさまがちら／＼と動いて行く。

村にはぞろ／＼と人が通つた。萬葉集のかゝひの庭のことがそれとなく清三の胸を通つた。男は皆な一人づつ相手を伴れて歩いて居る。猥褻なことを平氣で話して居る。世の羈絆を忘れて、この一夜を自由によぶといふ心持が四邊に充ち渡つた。垣の中からは燈光がさして笑聲がした。

向うから女づれが三四人來たと思ふと、突然清三は袖を捉へられた。

『学校の先生!』

『林さん!』

『いゝ男!』

『林先生!』

嵐のやうに聲を浴せかけられたと思つたのも瞬間であつた。両手を取られたり後から押されたり組んだ白い手の中へ抱へ込まれたりして、争はうとする間に二三間たじくと伴れて行かれた。

『何をするんだ。馬鹿!』

と言つたが駄目だつた。

月は互に争ふこの一群を明かに照した。女のキャツ／＼と騒ぐ聲が四邊にひびいて聞えた。

『ヤア、学校の先生があまつちよに酷められて居る!』と言つて笑つて通つて行くものもあつた。樽拍子の音が唄につれて、益々景氣附いて來た。

三十一

秋季皇靈祭の翌日は日曜で、休暇が二日續いた。大祭の日は朝から天氣が好かつた。清三は其日大越の老訓導の家に遊びに行つて、ビールの御馳走になつた。歸途に就いたのはもう四時を過ぎて居た。

古い汚い庇の低い彌勒ともいくらかも違はぬやうな町並の前には、羽生通ひの乗合馬車が夕日を帯びて今着いたばかりの客を下ろして居た。ラムネを並べた汚い休茶屋の隣には馬具や鋤などを賣る古い大きな家があつた。野に出ると赤蜻蛉が群をなして飛んで居た。

利根川の土手の方は其處からもうすぐである。二三町位しか離れて居ない。清三は不圖あることを思ひ附いて、細い道を右に折れて、土手の方へ向つた。明日は日曜である。行田にも行く用事が無いでもないが、行かなくつてならないほどのこともない。老訓導にも校長にも今日と明日は留守になるといふことを言つて置いた。懐には昨日下りたばかりの半月の月給が入つて居る。好い機會だ! と思つた心は、ある新しい希望に向つてそゞろに震へた。

土手へのほると、利根川は美しく夕日にはえて居た。其心がある希望の爲めに動いてゐる爲めであらう。何だか其の波の閃めきも色の調子も空氣の濃い影も總て自分の踊り勝な心としつくり相合つて居るやうに感じられた。半孕んだ帆が夕日を受けて緩かに緩かに下つて行くと、溶々として大河の趣を成した川の上には初秋でなければ見られぬやうな白い大きな雲が浮んで、川向うの人家の白壁の土藏や森や土手が濃い空氣の中に浮くやうに見える。土手の草むらの中にはキリム／＼スが鳴いて居た。

土手にはところ／＼松原があつたり渡船小屋があつたり檜林があつたり藁葺の百姓家が見えたりした。渡し船には此處等によく見る機廻りの車が二臺、自轉車が一箇、蝙蝠傘が二箇、商人らしい四十位

の男は眩しさに夕日に手を翳して居た。船の通る少し下流に一とこ浅瀬があつてキラ／＼と美しく閃き渡つた。

路は長かつた。川の上に簇る雲の姿の變る度に、水脈の緩かに曲る度に、川を感じが常に變つた。夕日は次第に低く、水の色は段々納戸色になり、空氣は身に沁み渡るやうに濃い深い影を帯びて來た。清三は自己の影の長く草の上に曳くのを見ながら時々自から顧みたり、自から罵つたりした。立止つて墮落した心の状態を吐しても見た。行田の家のこと、東京の友のことをも考へた。さうかと思ふと、懐から汗によごれた財布を出して、半月分の月給が入つて居るのを確かめてにつこりした。二圓あれば澤山だといふことは兼ねてから小耳に挟んで聞いて居る。青陽樓と言ふのが中田では一番大きな家だ、其處には綺麗な女が居るといふことも知つて居た。足を止めさせる力も大きかつたが、それよりも足を進めさせる方が一層強かつた。心と心が戦ひ、情と意とが争ひ、理想と欲望とが絡み合ふ間にも、體はある大きな力に引摺られるやうに先へ／＼と進んだ。

渡良瀬川の利根川に合するあたりは、ひろ／＼としてまことに阪東太郎の名に背かぬほど大河の趣を爲して居た。夕日はもう全く沈んで、對岸の土手に微かに其の餘光が残つてゐるばかり、先程の雲の名残と見えるちぎれ雲は縁を赤く染めて其上に覺束なく浮いて居た。白帆が懶さうに深い碧の上を滑つて行く。

透緩の羽織に白地の紺を着て、安い麥稈の帽子を冠つた清三の姿は、キリ／＼スが鳴いたり鈴蟲が好い聲を立てたり阜斯が飛び立つたりする土手の草路を急いで歩いて行つた。人通りのない夕暮近い空氣に、廣い溶々とした大河を前景にして、その瘦削な姿は浮き出すやうに見える。土手と川との間のいつも水をかぶる平地には小豆や豆やもろこしが豊かに繁つた。ふとある一種の響が川にとゞろきわたつて聞えたと思ふと、前の長い／＼栗橋の鐵橋を汽車が白い烟を立て、通つて行くのが見えた。

土手を下りて旗井といふ村落に入つた頃には、もうとつぷりと日が暮れて、灯が點いて居た。ある百姓家では、垣の處に行水盥を持出して、『今日は久し振でまた夏になつたやうな氣がした、』などと言ひながら若い上さんが肥えた白い乳を夕闇の中に見せてポチャ／＼やつてゐた。鐵道の踏切を通る時、番人が白い旗を出してゐるが、それを通つてふと、上り汽車がゴ／＼と音を立て、過ぎて行つた。かれは二度路で中田への渡場の所在を訊ねた。夜が來てからかれは大膽になつた。もう後悔の念などはなくなつて了つた。ふと路傍に汚い飲食店があるのを發見して、ビールを一本傾けて、饅頭の盛を三杯食つた。此處では上さんがわざ／＼通りに出て渡船場へ行く路を教へて呉れた。

十日ばかりの月が向う岸の森の上に出て、渡船場の船縁にキラ／＼と美しく碎けて居た。肌に冷かな風がをり／＼吹いて通つて、柔かな櫓の音がギー／＼聞える。岸に並べた二階家の屋根がくつきりと黒く月の光の中に出て居る。

水を越して響いて来る絃歌の音が清三の胸をそよりに波立たせた。

乗合の人の顔は皆月に白く見えた。船頭はくはへ煙管の火をほつり紅く見せながら、小腰に櫓を押した。

十分後には、清三の姿は張見世にごてくと白粉をつけて、赤いものづくめの着物で飾り立てた女の格子の前に立つて居た。此方の軒から彼方の軒に歩いて行つた。細い格子の中に入つて、危く羽織の袖を破られようとした。かうして夜毎に客を迎へる不仕合せな女に引比べて、かうして心の餓、肉の渴きを醫しに來た自分の淺ましさを思つて肩を聳かした。廊の通をぞろくとひやかしの人々が通る。馴染客を見懸けて『ちよいと貴郎!』などといふ聲がする。格子に寄り合つて何か囁々と話してゐるものもある。威勢よく入つてトン／＼階段を上つて行くものもある。二階から三絃や鼓の音が賑かに聞えた。

五六軒しかない貸座敷はやがて盡きた。一番最後の少し奥に引込んだ、石菖の鉢の格子の傍に置いてある家には、いかにも土百姓の娘らしい丸く肥つた女が白粉をごてくと不器用にぬりつけて二三人並んで居た。其家から五六軒藁葺の庇の低い人家が續いて、やがて暗い島になる。清三は其處まで行つて引返した。見て通つたいろ／＼な女が眼に浮んで、上るならあの女だと思ふ。けれど一方では何うしても上られるやうな氣がしない。初心なかれには幾度決心しても、幾度自分の臆病なのを罵つて見ても何うも思切つて上れない。で、今度は通の中央を自分はひやかしに來た客ではないといふやうにわざと大跨

に歩いて通つた。その癖、氣に入つた女のゐる張見世の前は注意した。

河岸の渡し場の處に來て、かれは暫く立つて居た。月が美しく埠頭に碎けて、今着いた船からぞろ／＼と人が上つた。いつそ渡を渡つて歸らうかとも思つて見た。けれど此のまゝ歸るのは——目的を果さずに歸るのは腑甲斐ないやうに思はれる。折角あの長い暑い二里の土手を歩いて來て、無意味に歸つて行くのも馬鹿々々しい。それに唯歸るのも惜しいやうな氣がする。渡し船の行つて歸つて來る間、かれは其處に立つたり蹲んだりして居た。

思ひ切つて立上つた。其家には店に妓夫が二人出て居た。大きな洋燈が眩しくかれの姿を照した。張見世の女郎の眼が皆な此方に注がれた。内から迎へる聲も何も彼もかれには夢中であつた。やがてがらんとした室に通されて、『お名ざし』を聞かれる。右から二番目と辛うじてかれは云つた。

右から二番目の女は靜枝と呼ばれた。何方かと言へば小づくりで、色の白い、髪の方々した、此家でも賣れる女であつた。眉と眉との遠いのが、何處となく美穂子を偲ばせるやうな處がある。

清三にはかうした社會の總べてが皆な新しくめづらしく見えた。引付けといふこともおもしろいし、女がずつと入つて來て客のすぐ隣に坐るといふことも不思議だし、臺の物とか言つて大きな皿に少しばかり鮎を入れて持つて來るのも異様に感じられた。かれは自分の初心なことを女に見破られまいとして、心にもない洒落を言つたり、かうした處には通人だといふ風を見せたりしたが、二階廻しの中年の女には、

初心な人といふことがすぐ知られた。かれは唯酒を飲んだ。

厠は階段を下りた處にあつた。矢張石菖の鉢が置いてあつたり、釣葱がかけてあつたりした。硝子の箱の中に五分心の洋燈が明るく點いて、鼻緒の赤い草履が濡れて居るのではないが、何となく濕つて居た。便所には大きな立派な青い模様の出た瀬戸焼の便器が据ゑてある。アルボウスの臭に交つて臭い臭氣が鼻と目とを撲つた。

女の室は六疊で、裏二階の奥にある。古い箆筒が置いてあつた。長火鉢の落しはブリキで、近在で出来た廉い鐵瓶が懸つて居る。傍に一冊女學世界が置いてあるのを清三が手に取つて見ると、去年の六月發行したものであつた。『こんなものを讀むのかえ、感心だねえ、』と言ふと、女はにつと笑つて見せた。その笑顔を美しいと清三は思つた。室の裏は物干になつてゐて、其處には月が稍々傾き加減となつて射して居た。隣では太鼓と三絃の音が賑かに聞えた。

三十二

翌日は午過ぎまで居た。出る時、女が送つて出て、『是非近い中にね、屹度ですよ、』と私語くやうに言つた。昨夜、床の中で聞いた不幸な女の話が流るゝやうに胸に漲つた。

渡をわたつて栗橋へ出て歸るのは何だか不安なやうな氣がした。土手で知つてゐる人に逢はんものでもない。行田へ行つたといふものが方角違ひの方面を歩いてゐては人に怪まれる。で、かれは昨夜聞いて置いた鳥喰の方の路を選んで歩き出した。初會にも似合はず、女はしんみりとした調子で、その父母の古河の少し手前の在に居ることを打明けて語つた。その在郷に行くのも矢張鳥喰を通つて行くのださうだ。鳥喰の河岸には上州の本郷に渡る渡良瀬川のわたし場があつて、それから大高島まで二里、栗橋に出て行くよりも却つて近いかも知れなかつた。清三の麥稈帽子は毎年出水に浸かる木蔭の無い低地の間の葉の半ば赤くなつた桑畑に見え隠れして動いて行つた。行く先には田があつたり畠があつたりした。河原の草藪の中には矢張キリムゝスが鳴いた。

河岸の渡場では赤い雲が靜かに川に映つて居た。向う岸の土手では糸經を着て紺の脚絆を白い埃にまみらせた旅商人らしい男が大きな荷物を脊負つて、さもく疲れたやうな風をして歩いて行つた。其處からは利根渡良瀬の二つの大きな河が合流するさまが手に取るやうに見える。栗橋の鐵橋の向うに中田の遊廓の屋根もそれと見える。かれは暫し立止つて、別れて來た女のことを思つた。

本郷の村落を通つて、路は又土手の上へのほつた。昨日向う岸から見下つた川を今日は此の岸から遡つて行くのである。昨日の心地と今日の心地とを清三は比べて考へずには居られなかつた。躍り勝ちな研えた心と落附いた勞れた心！ 纔かに一日、川は同じ色に同じ姿に流れて居るが、其間には今まで経験しない深い溝が築かれたやうに思はれる。もう自分は墮落したといふやうな悔もあつた。

麥倉河岸には涼しさうな茶店があつた。大きな栢の樹が蔭をつくつて、冷めたさうな水にラムネがつけてあつた。かれはラムネに梨子を二箇ほど手づから皮をむいて食つて、さて花萼の敷いてある樹の蔭の縁臺を借りて仰向けに寝た。昨夜殆ど眠らなかつた疲労が出て、頭腦がぐらくした。涼しい心地の好い風が川から来て、青い空が葉の間からチラ／＼見える。それを見ながらいかれはいつか寝入つた。

かれが寝て居る間、渡場にはいろ／＼なことがあつた。鶏のひよつこを猫が狙つて飛びつかうとする處を茶店の婆さんは狼狽して、逐ふと、猫は桑畑の中に入つてニャア／＼啼いた。渡舟は着く度にいろいろな人を下しては又いろ／＼な人を載せて行つた。自轉車を走らせて来た町の旦那衆もあれば、反物を満載して車を曳いて来た人足もある。上流の赤岩に煉瓦を積んで行く船が二艘も三艘も棹を弓のやうに張つて流に遡つて行くと、其傍を帆を張つた舟がギィと楫の音をさせて、いくつも通つた。一時間ほど経つて婆さんが裏に塵埃を捨てに行つた時には、縁臺の上の客は足をだらりと地に下けて、顔を仰向けに口を少し開いて、心地よさうに寝て居たが、釣魚に行つた村の若者がびくを下けて歸る時には、足を二本とも縁臺の上に曲けて、肱を枕にして高い聲を聞いて居た。其横顔を夕日が暑さうに照らした。額には汗がにじみ、はだけた胸からは、財布が見えた。

かれが眼をさました頃は、もう五時を過ぎて居た。水の色もやゝ暮近い影を帯びてゐた。清三は銀側の時計を出して見て、思ひの外長く寝込んだのに吃驚したが、落ちかけてゐた財布をふとあけて見て錢の勘定をした。六圓あつた金が二圓五十錢になつて居る。かれは鳥渡考へるやうな風をしたが、其中から二十錢銀貨を一つ出して、ラムネ二本の代七錢と梨子二箇の代三錢との釣錢を婆さんから貰つて、白銅を一つ茶代に置いた。

大高島の渡を渡る頃には、もう日が餘程低かつた。かれは大越の本道には出ずに、田の中の細い道を彼方に辿り此方に辿りして、成たけ人目にかゝらぬやうにして彌勒の學校に歸つて来た。

かれの顔を見ると、小使が、

『萩生さんア來さしやつたが、逢つたんべいか。』

『いや——』

『行田に行つたんなら、是非羽生に寄る筈だがつて言つて、不思議がつて居さしやつたが、歸りにも逢はなかつたかな。』

『逢はない——』

『待つて居さしやつたが、羽生で待つてるかも知んねえつて三時頃歸つて行かした……』

『さうか——羽生には寄らなかつたもんだから。』
かう言つてかれは羽織をぬいだ。

次の土曜日にも出懸けた。其日も菽生さんは尋ねて来たが矢張不在だつた。行田の母親からも用事があるから来いと度々言つて来るけれど、顔を見せぬので、父親は加須まで来た次手にわざ／＼寄つて見た。別段變つたところもなかつた。此頃は日課點の調べで忙しいと言つた。先月は少し書籍を買つたものだから送るものを送られなかつたといふ申譯をして、机の上にある書籍を出して父親に見せた。父親はさる出入先から賣却を頼まれたといふ文晁筆の山水を長押に懸けて、『何うも少し怪しい處があるぢやが……まアまア此位なら兎に角納まる品物だから、』などと暢氣に眺めてゐた。母親の手紙では、家計が非常に困つて居るやうな様子であつたが、父親にはそんな風も見えなかつた。歸りに、五十錢貸せと言つたが、清三の財布には六十錢しか無かつた。月末まで湯錢位なくては困ると言ふので、二十錢だけ残して、あとをすつかり持たせて遣つた。父親は包みを脊負つて、半ば禿けた頭を夕日に照されながら、學校の門を出て行つた。

金の無い幾日間の生活は辛かつたが、しかし心はさびしくなかつた。朝に晩に夜にかれは其女の赤い襦袢姿と眉の間の遠い色白の顔とを思ひ出した。其度毎にやさしい言葉やら表情やらが流るゝやうに漲り渡つた。其女は初會から清三の人並すぐれた男振とやさしいおとなしい様子とに普通ならぬ情を見せたのであるが、それが一度行き二度行く中に段々と募つて来た。清三は月末の來るのを待ち兼ねた。

菓子を満足に食へぬのが中でも一番辛かつた。机の抽斗の中には、餅菓子とかビスケットとか羊羹とかいつも屹度入れられてあつたが、此頃では唯其名残の赤い青い粉ばかりが残つて居た。止むなくかれは南京豆を一錢二錢と買つて食つたり、近所の同僚の處を訪問して菓子の御馳走になつたりした。後には菓子屋の婆を説きつけて月末拂ひにして借りて来た。

音楽は矢張熱心に遣つて居た。譜を集めたものが大分溜つた。授業中唱歌の課目がかれに取つて一番面白い楽しい時間で、新しい歌に譜を合せたものを生徒に歌はせて、自分はさも一廉の音楽家であるかのやうにオルガンの前に立つて拍子を取つた。一人で室に居る時も口癖に唱歌の譜が出た。此間、女の室で酒に酔つて、『響りりん』を歌つたことが思出された。女は黙つてしみ／＼と聞いて居た。やがて、『琵琶歌ですか、それは、』と言つた。信濃の詩人が若々しい悲哀を歌つた詩は、青年の群の集つた席で歌はれたり、さびしい一人の散歩の野に歌はれたり、無邪氣な子供等の前でオルガンに合せて歌はれたり、さうした女の居る狭い一室で歌はれたりした。清三は其時女にその詩の意味を解いて聞かせて、再び聲を低くして誦した。二人の間にそれがある微かなしかし力ある愛情を起す動機となつたことを清三は思ひ起した。

彌勒野に再び秋が来た。前の竹藪を通して淋しい日影が射した。教員室の硝子窓を小使が終日かゝつ

て掃除すると、一層空気が新しく濃かになつたやうな気がした。刈稻を積んだ車が晴れた野の道に音を立て、通つた。

東京に行つた友達からは、それでも月に五六度音信があつた。學窓から故山の秋を慕つた歌なども來た。夕暮には、赤い夕燒の雲を望んで、彌勒の野に靜に幼な兒を伴侶として居るさびしき友の心を思ふと書いてあつた。彌勒野から都を望む心は一層切であつた。學窓から見た夕燒の雲と町に連なる明かな夜の灯が一層戀しいとかれは返事をして遣つた。

羽生の野や、行田への街道や、熊谷の町の新蕎麥に昨年の秋を送つたかれは、今年は彌勒野から利根川の河岸の路に秋のしづかさを味つた。羽生の寺の本堂の裏から見た秩父連山や、淺間嶽の噴烟や、赤城榛名の翠色には全く遠かつて、利根川の土手の上から見える日光を盟主とした兩毛の連山に夕日の當るさまを見て暮した。

ある日、荻生さんが來た。明日が土曜日であつた。

『君、少し金を持つて居ないだらうか。』

荻生さんは三圓ばかり持つて居た。

『氣の毒だけでも、家の方に少し要ることがあつて、明日行くのには是非持つて行かなければやならないんだが……月給はまだ當分下りないし、困つてるんだが、何うだらう、少し都合して貰ふ譯には行かない

いだらうか。月給が下りると、すぐ返すけれど。』

荻生さんは鳥渡困つたが、

『いくら要るんです？』

『三圓ばかり。』

『僕は丁度此處に三圓しか持つて居ないんですが、少し要ることもあるんだが……』

『それぢや二圓でも好い。』

荻生さんは止むを得ず一圓五十錢だけ貸した。

翌朝、それと同じ調子で、清三は老訓導に一圓五十錢貸して呉れと言つた。老訓導は『僕もこの通り』と、笑つて銅貨ばかりの財布を振つて見せた。關さんも矢張持つて居なかつた。幾度か躊躇したが、思切つて最後に校長に話した。校長は貸して呉れた。昨日の朝、行田から送つて來た新聞の中に交つて、見馴れぬ男の筆跡で、中田の消印の捺してある一通の封書の入つて居たのを誰も知らなかつた。

午後から行田の家に行くとして出かけたかれは、今泉に入る前の路から右に折れて、森から田圃の中を歩いて行つた。暫くして利根川の土手に上る松原の中に其の古い中折の帽子が見えた。大高島に渡る渡船の中にかれは居た。

渡良瀬川の渡しをかれは尠くとも月に二回は渡つた。秋は次第に更けて、楢の木の葉はバラ／＼と散つた。蟲の鳴いた蘆原も枯れて、白い薄の穂が銀のやうに日影に光る。洲の顯はれた河原には白い鷺が下りて、納戸色になつた水には寒い風が吹渡つた。

麥倉の婆の茶店にももう縁臺は出て居らなかつた。枿の黄ばんだ葉は小屋の屋根を埋めるばかりに散積つた。農家の庭に忙しかつた唐箕の音の絶える頃には、土手を渡る風はもう寒かつた。

其長い路を歩く度数は、女に對する愛情の複雑して來る度数であつた。追憶が段々と多くなつて來た。歸りを雨に降られて本郷の村落のつつきの百姓家に其の時間を待つたこともある。夜遅く栗橋に出て大越の土手を終夜歩いて歸つて來たこともある。女の心の解し難いのに懊惱したことも一度や二度ではなかつた。遊廓に上るものゝ初めて感ずる嫉妬、女が廻しを取る時の不愉快にもやがて邂逅した。待つても待つても、女は遣つて來ない。自己の愛する女を他人が自由にして居る。全身を自己に捧げて居ると女は稱しながら、それが果してさうであるか否かの解らない疑惑——男が女に對する總ての疑惑を一段意識して來た。女はまた女で、其の男の疑惑につれて、時々容易に示さない深い情を見せて、男の心を巧に奪つた。『もうこれつきり行かん。あれ等は男の機嫌を取るのを商賣にして居るんだ。あれ等の心

は幾様にも働くことが出来るやうに出來て居る。自分に對すると同じやうな媚と笑ひと情とをすぐ隣の室で他の男に與へて居るのだ。忘れても行かん。今まで使つた金が惜しい。』などと、憤慨して歸つて來ることもあつたが、しかしそれは複雑した心の状態を簡單に一時の理窟で解釋したもので、女の心にはもつと眞面目な面白い處があることが段々解つた。怒つたり泣いたり笑つたりして居る間に、二人の間柄には、いろ／＼な色彩やら追憶が加はつた。

女の許にせつせと通つて來る中に、清三の知つて居る客が尠くとも三人はあつた。一人は栗橋の船宿の息子で、家には相應に財産があるらしく、角帯に眼鏡をかけて烏打帽などを冠つてよく來た。色の白い丈のすらりとした好男子であつた。一人は古河の裁判所の書記で、年はもう三十四五、家には女房も子供もあるのだが、根が道樂で酒好きで三日と隔かずに遣つて來る。女は其の執拗いのに困り抜いて、『お客で來るのだから仕方がないけれど、あゝいふ人に勤めなければならぬと思ふと、つく／＼厭になつて了ふよ。貴郎、早くかういふ處から出して下さいな、』などと言つて甘えた。さういふ時には、『栗橋のにさう言つて出して貰つて遣らうか、』などと柄にも無い口を清三はきいた。と、女はきまつて、男の膝をびしやりと平手で打つて、これほど思つて苦勞して居るのといふ紋切形の表情をして見せた。それから今一人塚崎の金持の百姓の息子が通つて來た。田舎の女郎屋のことゝて、室のつくりも完全して居ないので、落合ふとその様子がよく解る。其息子は丸顔の坊ちやん坊ちやんした可愛い顔をして居た。『可

愛いおとなしい人よ。何だか弟のやうな気がして仕方がない、』と女は惚けた。

其他にもまだあるらしかつたが、よく解らなかつた。鬚の生えた中年の男も来るやうであつた。清三は女の胸に誰が一番深く影を印して居るかを探つて見たが、何うも解らなかつた。自分の影が一番深いやうにも思はれることもあれば、要するに旨く丸められて居るのだと思ふこともある。ある時、女は染と泣いてその憐れむべき境遇を語つた。黒目勝な眼からは、涙がほろ／＼とこぼれた。清三は其時自己の境遇と女に對する自己の關係とを眞面目に考へた。自分は小學校教員である。さういふことが鳥渡でも知れ、ば勤めて居ることの出来ぬ身の上である。それに家は辛うじて生活して行く貧しい生活である。この女と一緒にすることが出来ないのは初めから解り切つたことである。この女がある人に身請されるなり、年季が満ちて故郷に歸ることの出来るなりするのを寧ろ女の爲めに祝して居る。清三はゆくりなき縁で、かうした關係となつて行く二人の状態を不思議にも意味深くも感じた。清三はまた一步を進めて、今の生活のたつきをも捨て、貧しい父母——殊に自分を唯一の力と頼む母をも捨て、この女と一緒にする場合を想像して見た。功名の爲めに、青雲の志を得んが爲めに、母を捨てることの出来なかつたやうに、矢張かれには何うしてもさうした氣にはなれなかつた。歸途は、時々時雨が来たり日影が射したりするといふ日の午後であつた。いつもわたる渡良瀬川の渡しを渡つて土手の上に来ると、丁度眼の前を、白いペンキ塗の汚れた通運丸が、煙筒からは煤烟を漲らし、推進器からは水を切る白い波を立て、川を下つて行くのが手に取るやうに見えた。甲板の上には汚れた白い服を着たボウイが二三人仕事をして居るのが小さく見えた。清三は立止つてぢつとそれを見詰めた。白い煙が細くズツと立つたと思ふと、汽笛の尖つた響が灰色に曇つた水の上に向けた、ましく響き渡つた。利根川は溶々として流れて下る。逝く者斯の如しといふ感が清三の胸を襲つて來た。

三十五

清三の中田通ひは誰れにも知られずに冬が来て其年も暮れた。其間にも危険に思つたことは二三度はある。一度は村の見知越しの若者の横顔を張見世の前でちらと見た。一度は大高島の渡船の中で村の學務委員と一緒にたつた。今一度は大越の土手を歩いてゐるとひよつくり同僚の關さんに邂逅した。其時はこれはつきり看破されたと胸をドキつかせたが、清三のいつもの散歩癖を知つてゐる關さんは、別に疑ふやうな口吻をも洩さなかつた。

けれど菓子屋、酒屋、小川屋、米屋などに借金が段々溜つた。『林さん、どうしたんだらう。此頃は拂がたまつて困るなア、』と小川屋の主婦は娘に言つた。菓子屋の婆は、『今月は少しや入れて貰はねえぢや——よく言つて呉んなれ、』と學校の小使に頼んだ。小使は小使で、『何うしたんだんべい。林さん元は金持つて居た方だが、此頃ぢやねつからお菜も買ひやしねえ。いつも漬物で茶をかけて飯をすまして了ふ

し、肉など何日にも煮て食つたためしがねえ、』などと此頃は餘り菜の残りの御馳走に預らないので、ぶつくと不平さうに獨言を言つた。同僚の關さんや羽生の菰生さんなどが訪ねて來ても、以前のやうにビールも出さなかつた。

様子の變なのを一番先きに氣附いたのは、矢張行田の母親であつた。わざ／＼三里の路を遣つて來ても、そは／＼といつも落附いて居ないばかりではない。友達が東京から歸つて來てゐても訪問しようでもなく、昔のやうに相談をしかけてもフム／＼と聞いて居るだけで相手にもなつてくれない。それに、何の彼のと言つて、毎月のものを置いて行かない。あれほど好きであつた雑誌も碌々買はず、常得意の町の本屋にもカケを拵へない。母親は息子の此頃何うかして居るのをそれとなく感じて、時々心を讀まうとするやうな眼色をして、ヂツと清三の顔を見詰めることがある。

ある時こんなことを言つた。

『此間ね、好い嫁があるから、世話しようつて言ふ人があるんだがね……お前ももう身も定つたことだし、何うだ、貰ふ氣はないかえ？』

清三は母の顔をぢつと見て、

『だつて、自分が食ふことさへ大抵ぢやないんだから。』

「それはさうだらうけれど、お前位の月給で、女房子を養つて居る人はいくらもあるよ。一緒になつ

て、學校の近くに引越して、儉約して暮すやうにすれば、人並には遣つて行けないことはないよ。』

『でもまだ早いから。』

『でも、かうして離れて居ては、お前が何んなことをして居るか解らないし、』と笑つて見せて、『それにお前だつて不自由な思ひをして、いつまで學校に居たつて仕方がないぢやないか。』

『お母さん、そんなこと言ふけれど、僕はまだこれで望みもあるんです。今少し勉強して、中學の教員の免状位は取りたいと思つてゐるんだから……今から女房などを持つたつて仕方がありやしない。』

『そんな大きな望みを出したつて仕方がないぢやないかねえ。』

『だつて、僕一人田舎に埋もれて了ふのは厭ですもの。一二年はまア仕方がないからかうしてゐるけれど、いつか何うかして東京に出て勉強したいと思つてゐるんです。音樂の方を此頃少し遣つてゐるから、來年あたり試験を受けて見ようと思つて居るんです。今から女房など持つちやわざわざ田舎に埋れて了ふやうなものだ。』

『だつて、入れた處で學費は何うするのさねえ？』

『音樂學校は官費があるから。』

『そして家は何うするのさねえ？』

『其時は父さんと母さんと暮して貰ふのさ。三年位何うにでもして貰はなくつちや。』

『それは出来ないことはないだらうけれど、父さんはあゝいふ風だし、私ばかり苦勞しなくつちやならないから。』

清三は黙つて了つた。

またある時は次のやうな會話をした。

『お前、加藤の雪さんを貰ふ氣はない？』

『雪さん？ 何故？』

『呉れても好いやうな母さんの口振だつたからさ。』

『何うして？』

『それとはつきり言つた譯ぢやないけれど、達つて望めば呉れるやうな様子だつたから。』

『いやなこつた。あんな白々しい、おしやらくは！』

『だつて、郁治さんとはお前は兄弟のやうだし、呉れさへすれや望んでも欲しい位な娘ぢやないかね。』

『いやなこつた。』

『此頃は何うかしたのかえ？ 加藤にも滅多に行かんぢやないか。』

『利益交換なぞいやなこつた！』

かう言つて、清三はふいと立つて了つた。母親には其意味が解らなかつた。

一月には郁治も美穂子も歸つて居た。郁治にも二三度逢つて話をした。美穂子に就いての話はもうしなかつた。郁治は寧ろ消極的に戀愛の無意味を語つた。『何故、あんなに熱心になつたか自分でも解らない。丁度さかりがついたものゝやうなものだつたんだね。』と言つて笑つた。其癖郁治と美穂子とはよく相携へて散歩した。男は高師の制帽を冠り、女は新式の庇髪に結つて、派手な幅の廣いリボンをかけた。小畑の手紙に由ると、二人はもう戀愛以上の交際を續けて居るらしかつた。清三は厭な氣がした。

丁度其頃熊谷の小瀧の話が新聞に出て居た。『小瀧の落籍』といふ見出しで、伊勢崎の豪商に根曳される話がひやかし半分に書いてある。小瀧には深谷の金持の息子で、今年大學に入學した情人があつた。其男に小瀧は並々ならぬ情を見せたが、其家には許婚のこれも東京の跡見女學校に入つて居る娘があつて、到底望みを達することが出来ぬので、泣きの涙で、今度いよく落籍されることになつたと書いてある。其豪商は年は四十五六で、女房も子もある。『何うせ一二年辛い年貢を納めると、又舞戻つて二度のお勤め、今晚は——と例のあでやかな聲が聞かれるだらうから、今からお馴染の方々はその時を待つて居るさうだ。』などと冷かしてあつた。本當の事情は知らぬが、清三はさうした社會に生立つた女の身の上を思はぬ譯には行かなかつた。思ひのまゝにならぬ世の中に、更に思ひのまゝにならぬ境遇に身を置いて、うき草のやうに浮き沈みして行く其人々の身の上がしみくと思ひやられる。小瀧のある間は——其の美しい姿と艶なる聲とのある間は、友人が離散し去つても、幼い頃の追憶が薄くなつても、熊谷の町

はまだかれの爲めになつかしい町、戀しい町、忘れ難い町であつたが、今はそれさへ他郷の人となつて了つた。神燈の影艶かしい細い小路をいくら歩いて、にこくといつも元氣の好い顔を見せて、幼い頃の同窓のよしみを忘れない『われ等の小籠』を見ることは出来なくなつたのである。清三は三ヶ日を濟ますと、母親の止めるのをふり放つて、今までに會て無いさびしい心を抱いて、西風の吹荒れる三里の街道を彌勒へと歸つて來た。

それでも懐には中田へ行く爲めの金が三圓残してあつた。

三十六

三月のある寒い日であつた。

渡良瀬川の渡場から中田に來る間の夕暮の風はヒウ／＼と肌を刺すやうに寒く吹いた。灰色の雲は空を蔽つて、をり／＼通る帆の影も暗かつた。

灯の點く頃、中田に來て、いつもの通り階段を上つたが、馴染でない新造が來て、眞面目な顔をして、二階の別の室に通した。いつも——客が居る時でも、行くとすぐ顔を見せた女が遣つて來ない。不思議にしてゐると、やがて馴染の新造が上つて來て、

『おいらもな、お目出度いことで——この十五日に身ぬけが出來ましたでな。』

清三は金槌か何かでガンと頭を打たれたやうな氣がした。『貴方さんにもな、是非ゆく前に一度お目にかゝり度いつて言つて居ましたけれど……貴方は丁度お見えにならんし、急なもので、手紙を上げる間もなし、おいらも殘念がつて居ましたけれど、仕方がなしに、貴方が來たらよく言つて呉れつてな……それにこれを渡して呉れつて置いて行きましたから、』と風呂敷包を渡した。中には一通の手紙と半紙に包んだ四角なものが入つて居た。手紙には金釘のやうな字で、覺束なく別れの紋切形の言葉が書いてあつた。殘念々々々々々といふ字が幾つとなく眼に入つた。しかし身請されて行つた處は書いてなかつた。

半紙に包んだのは寫眞であつた。

をばさんは手に取つて、

『おいらも罪なことをする人だよ。』
と笑つた。

身請されて行つた先は話さなかつた。相方は兼ねて知つて居る靜枝の妹女郎が來た。顔の丸い肥つた女だつた。清三は黙つて酒を飲んだ。黙つて其の妹女郎と寢た。妹女郎は行つた人の話をいろ／＼として聞かした。清三は黙つて聞いた。

翌日は早く歸途に就いた。存外心は平靜であつた。『何うせかうなる運命だつたんだ、』と自から口に出

して言つて見た。『何でもない、當り前のことだ、』と言つても見た。けれど平靜であるだけそれだけかれは深い打撃を受けて居た。

土手に上る時、

『憎い奴だ。復讐をしてやらなければならん、復讐！ 復讐！』

と叫んだ。しかし心はそんなに激しては居らなかつた。

麥倉の茶店では、茶をのみながら、

『もう此處で休むこともこれ限りだ。』

大高島の渡しを渡つて、いつものやうに間道を行かうとしたが、これも思返して、

『何アに、もう解つたつてかまふもんか。』

で、大越に出て、わざと老訓導の家を訪うた。

老訓導は清三の常に似ず際立つてはしやいで居るのを不思議に思つた。清三は出してくれたビールをグン／＼と呷つて飲んだ。

『何か一つ大きなことでも爲たいもんですなア——何でも好いから、世の中をびつくりさせるやうなことを。』

こんなことを言つた。そしてこれと同じことを昨年羽生の寺で和尚さんに言つたことを思ひ出した。

堪らなくさびしい氣がした。

二十七

其年の九月、午後の残暑の日影を受けて、上野公園の音楽學校の校門から、入學試験を受けた人々の群がぞろ／＼と出て來た。羽織袴もあれば洋服もある。庇髪に莖色の袴を穿いた女學生もある。校内からはピアノの音が緩かに聞えた。

其群の中に詰襟の脊廣を着て、古い麥稈帽子を冠つて、一人て／＼に塀際に寄つて歩いて行く男があつた。靴は埃に塗れて白く、毛縹子の蝙蝠傘は褪めて羊羹色になつて居た。それは田舎からわざわざ試験を受けに來た清三であつた。

入つただけでも心が戦へるやうな天井の高い室、鬚の生えた肥つた立派な體格をした試験委員、大きなピアノには、中年の袴を穿いた女が後向になつて頻りに妙な音を立て、居た。清三は田舎の小學校の小さなオルガンで學んだ研究が、何の役にも立たなかつたことをやがて知つた。一生懸命で集めた歌曲の譜も全く徒勞に屬したのである。かれは初步の試験に先づ失敗した。顔を眞赤にした自分の小さなあはれな姿が徒らに試験官の笑を買つたのがまだ眼の前にちらついて見えるやうであつた。『駄目！ 駄目！』と獨りで言つてかれは頭を振つた。

公園のロハ臺は樹の影で涼しかった。風をりくく心地よく吹いて通つた、かれは心を静める爲めに其處に横になつた。向うには縁臺に赤い毛布を敷いたのがいくつとなく並んで、赤い襷で綾取つた若い女のメリンスの帯が見える。中年増の姿もくつきりと見える。赤い地に氷といふ字を白く抜いた旗がチラチラスる。

動物園の前には二輛の馬車が待つて居た。白いハツピを着た御者はブラ／＼してゐた。出札所には田舎者らしい二人連が大きな財布から錢を出して札を買つて居た。

東京に出たのは初めてである。試験をすましたら、動物園も見よう、博物館にも入らう、一通り市中の見物もしよう、お茶の水の寄宿に小畑や郁治をも訪ねよう。かういろくく心の中に計畫して遣つて来た。田舎の空氣によかれた今までの生活を遁れて、新しい都會の生活をこれから開くのだと思ふと、中學を出た頃の若々しい氣分にもなれた。昨日吹上の停車場を發つ時には、久し振で、さまざまの希望の念が胸に漲つたのである。かれはロハ臺に横はりながら、其希望と今の失望との間に挟まつた一場の光景をまた思ひ浮べた。

ロハ臺から起上る氣分になるまでには、少くとも一時間は経つた。馬車はもう居なかつた。なにがし子爵夫人とも言ひさうな立派な貴婦人が、可愛らしい洋服姿の子供を三四人伴れて、其處から出て来て、嬉々として馬車に乗ると、御者は鞭を一當あて、跡に白い埃を立て、ガラ／＼と轆つて行つた。その白い埃を見詰めたのをかれは覺えて居る。「せめて動物園でも見て行かう」と思つてかれは身を起した。丹頂の鶴、絶えず鼻を巻く大きな象、遠い國から来たカンガルウ、駱駝だの驢馬だの鹿だの羊だのが別段珍らしくもなく歩いて行くかれの眼に映つた。ライオンの前ではそれでも久しく立止つて見て居た。養魚室の暗い隧道の中では、水の中に明かな光線がさし透つて、金魚や鯛などが泳いで居るのが鮮かに見えた。水珠が其處からも此處からも擧つた。

鷗や鴛鴦や其他さまざまの水鳥のゐる前のロハ臺にかれはまた腰を下した。あたりをさまざまの人がいろくくなことを言つてぞろ／＼通る。子供は鳥の賑かに飛んだり鳴いたりするのを面白がつて、柵につかまつて見とれて居る。暫くしてかれはまた歩き出した。鷹だの狐だの狸だの、居る處を通つて、猿が齒をむいたり赤い尻を振り立てたりしてゐる處を抜けて、北極熊や北海道の大きな熊の居る處を通つた。孔雀の見事な羽もさして興味を惹かなかつた。かれは入つた時と同じやうにして出て行つた。

東照宮の前では、女學生が派手な蝙蝠傘をさして歩いて居た。バナラマには、古ほけた日清戦争の畫か何か、かゝつてゐて、札番が退屈さうに欠びをして居た。

竹の臺に来て、かれはまた三たびロハ臺に腰をかけた、

眼下に横つて居る都會、墓が墓に續いて、烟突からは黒い凄しい烟が颯つてゐるのが見える。彼方此方から起る物音が一つになつて、何だかそれが都會の凄しい叫びのやうに思はれる。此處に罪惡もあ

れば事業もある。功名もあれば富貴もある。飢餓もあれば絶望もある。新聞紙上に毎日のやうに顯はれて来る三面事故のことなども胸に上つた。

竹の臺から下りると、前に廣小路の雑沓が展けられた。馬車鐵道が後から後から幾臺となく續いて行く。撒水夫がその中を平氣で水を撒いて行く。人力車が懸聲で駛つて行く。

暫くして、清三の姿は、其通りの小さい蕎麥屋に見られた。

『入らつしやい。』

と若い婢の黄い聲がした。

『ざる一つ！』

といふ聲がつゞいてした。

清三は夕日の射し込んで来る座敷の一隅で、詭への来る間を、大きな男が大釜の蓋を取つたり閉てたりするのを見てゐた。釜の蓋を取ると湯氣が白くぱつと颯つた。長い竹の箸でかき廻して、ザブ／＼と水で洗つて、それをざるに手で盛つた。『お待遠さま、』と婢はそれを膳に載せて運んで來た。足の裏が黒かつた。

清三はざるを二杯、天ぶらを一杯食つて、ビールを一本飲んだ。酔が廻つて來ると、少し元氣がついた。『歸らう、小畑や加藤を訪問したつて仕方がない。』

懐から財布を出して勘定をした。やがて雑沓の中を停車場へ急いで行くかれの姿が見られた。

三十八

荻生さんが和尚さんを訪ねて次のやうな話をした。

『何うも困りますんですがな。』

と荻生さんが例の人の好い調子で、さも心配だといふ顔をする。

『それは困りますな。』

と和尚さんも言つた。

『何うも思ふやうに行かんもんですから、ついさういふことになるんでせうけれど……』

『校長からお聞きですか。』

『いゝえ、校長からぢかに聞いたといふ譯でもないですけど……借金も出來たやうですし、それに清三君が宿直室に居ると、女がぞろ／＼遣つて來るんだつて言ひますからねえ。』

『一體、あそこは風儀が悪い處ですからなア。』

『随分面白いんですつて……清三君一人で居ると、學校の裏の垣根の處から、聲をかけたり、わざと土塊を投げ込んだりするんですつて。さうして誰も居ないと、庭から廻つて入つて來るんださうです。』

『そして、其中に誰か相手が出来てるんですか。』

『よく解りませんが、出来てるんださうです。』

『何うせ、機織か何かなんですか？』

『え。』

『困るすな。さういふ女に關係をつけては。』

と和尚さんも嘆じた。

少時してから、

『早く上さんを持たせたら、何うでせう。』

『此間も行田に行きましたから、次手に寄つたんですが、お袋さんもさう言つてゐました。』

『加藤君のシスタアは貰へないのでですか。』

『先生が厭だつて言ふんです……』

『だつて、前にラブしてゐたんぢやないですか。』

『何うですか。清三君、よく話さんですけど、加藤君と何か仲たがひか何かしたらしいすな。』

『そんなことはないでせう。』

『いや、あるらしいんです。』

と萩生さんは鳥渡途切れて、『此間も言つてましたよ。僕はかういふ運命なら仕方がない。一生獨身で子供を相手にして暮しても遺憾がないつて言つてましたよ。』

『獨身も好いが——そんなことをしては仕方がない。』

『本當ですとも。』

と萩生さんは友達思ひの心配さうに、『校長が可愛がつて呉れてるから好いですけど、郡視學の耳にも入ると大變ですからな。それに狭い田舎ですから、すぐばつとして了ひますから……今度來たら、それとなく言つて戴き度いものですが……』

『それは言ひませう。』

と和尚さんは言つた。

『それに、清三君は體が弱いですからな……』

と萩生さんはやがて言葉をついだ。

『矢張胃病ですか。』

『え、相變らず甘いものばかり食つて居るんですから。甘いものと、音楽と、繪の寫生とこの三つが僕のさびしい生活の慰藉などと前から言つて居ましたが、此頃ちや——この夏の試験を失敗してからは、集めた譜は押入の奥に入れて了つて、唱歌の時間きりオルガンも鳴らさなくなりましたから。』

『餘程失望したんですね。』

『え……それは熱心でしたから、試験前の二月ばかりと言ふものは、そのことばかり言つてましたから。』

『つまり今度のことなどもそれから來てるんですね。』と、和尚さんは考へて、『本當に氣の毒ですな。随分さびしい生活ですものな。それに眞面目な性分だけ、一層辛いでせうから。』

『私見たいに暢氣だと好いんですね……』

『本當に、君とは違ひますね。』

と和尚さんは笑つた。

三十九

清三の借金は中々多かつた。この二月ばかり、自炊をする元氣も無く、三度々々小川屋から辨當を運ばせたので、其勘定は七八圓までに上つた。酒屋に三圓、菓子屋に三圓、荒物屋に五圓、前からそのままにしてある米屋に三圓、其他同僚から一圓二圓と借りたのも少なくなかつた。荻生さんにも四圓ほど借りたまゝになつて居た。

中田に通ふ頃に和尚さんに融通して貰つた二圓も返さなかつた。

金の價値の貴い田舎では、何よりも先にこれから信用が崩れて行つた

四十

處が何うした動機か、清三は急に眞面目になつた。勿論、校長から懇々と説かれたこともあつた。和尚さんからもそれとなく忠告された。けれどその爲めばかりではなかつた。

頭が急に新しくなつたやうな氣がした。自己の不眞面目であつたのが今更のやうに感じられて來た。落ちて行く深い谷から一刻も早く浮び上がらなければならぬと思つた。

失望と空虚とさびしい生活とから起つた身體の不攝生、此頃では何をやる元氣もなく、散歩にも出ず、雑誌も讀まず、同僚との話もせず、毎日の授業もお勤めだから仕方がなしに遣るといふ風に、蒼白い不健康な顔ばかりして居た。何處となく體が氣だるく、時々熱があるのではないかと思はれることなどもあつた。持病の胃は益々募つて、口の中は常に乾いた。——不眞面目な生活がこの不健康な肉體を通じて痛切なる悔恨を伴つて來た。弱かつたがしかし清かつた一二年前の生活が眼前に浮んで通つた。

『絶望と悲哀と寂寞とに堪へ得られるやうなまことなる生活を送れ。』

『絶望と悲哀と寂寞とに堪へ得らるゝ如き勇者たれ。』

『運命に従ふものを勇者といふ。』

『弱かりしかな、不真面目なりしかな、幼稚なりしかな、空想兒なりしかな。今日よりぞわれ勇者たらん。今日よりぞわれ、わが以前の生活に歸らん。』

『第一、體を重んぜざるべからず。』

『第二、責任を重んぜざるべからず。』

『第三、われに母あり。』

かれは『われに母あり』と書いて、筆を持つたまゝ、顔を擧げた。胸が迫つて來て、蒼白い頬に涙がほろ／＼と流れた。

かれは中田に通ひ始める頃から、日記をつけることを廢した。滅多なことを書いて置いて、萬一人に見らるゝ虞がないでもないと思つたからである。かれは柳行李を明けて、其頃の日記を出して見た。九月二十四日——秋季皇靈祭。其文字に朱で圈點が打つてあつた。其次の土曜日の條に、大高島から向う岸の土手に渡る記事が書いてあつた。日記は絶々ながらも、其年の十月の末頃までつゞいて居た。利根川の暮秋のさまや落葉や木枯のことも書いてある。十月の二十三日の條に、『此日、雨寒し——』と書いてあつて、あとは白紙になつて居る。其時、『日記なんてつまらんものだ。矢張他人に見せるといふ色氣があるんだ。自分の遣つたことや心持が充分に書けぬ位なら斷然止して了ふ方が好い。』かう思つて筆を斷つたのを覺えて居る。其間の一年と二三ヶ月の月日のことを清三は考へずには居られなかつた。其間

はかれに取つては暗黒な時代でもあり、また複雑した世相にふれた時代でもあつた。事件や心持を充分に書けぬやうな日記なら廢す方が好いと言つたが、それと反對に、日記に書けぬやうなことはせぬといふ處に、日記を書くといふことのまことの意味があるのではないかとかれは考へた。

かれは再び日記を書くべく野紙を五六十枚ほど手づから綴ちて、其第一頁に、前の三ヶ條を麗々しく掲げた。

明治三十六年十一月十五日。

かれはかう書き出した。

四十一

『過去は死したる過去として葬らしめよ。』

『われをして吾が日々のライフの友たる少年と少女とを愛せしめよ。』

『生活の資本は健康と金錢とを要す。』

『われをして清き生活を營ましめよ。』

かういふ短かい句が日記の中に絶えず書かれた。

又ある日はかういふことを書いた。

『野心を捨て、平和に両親の老後を養ひ得ればこれ余の成功にあらずや。母はわれと共に住まんことを豫想しつゝあり。』

又ある時は次のやうなことを書いた。

『親しかりし昔の友、われより捨て去りしは愚かなりき。情薄かりき。われをして再びその暖かき昔の友情を復活せしめよ。所詮、境遇は境遇なり。運命は運命なり。かれ等を羨みて捨て去りしわれの小なりしことよ。喜ぶべきかな友情の復活！一昨日小畑より打解けたる手紙あり。今日また加藤より情に満たされたる便あり。小畑は自分の読み古したる植物の書籍近きに送らんといふ。嬉し。』

校長も同僚も清三の態度の俄かに變つたのを見た。清三は一昨年あたり熱心に集めた動植物の標本の整理に取懸つた。野から採つて来て紙に張つたまゝ、そのまゝにしてあつたのを一つ一つ誰れにも解るやうに分類して見た。今年の夏休みに三日ほど秩父の三峯に關さんと遊びに行つた時採集して来たもの、中にはめづらしいものがあつた。關さんは文部省の中學教員檢定試験を受ける準備として、頻りに動植物を研究してゐた。其旅でも實際に就いて關さんは頻りに清三に其趣味を鼓吹した。

小畑からやがて其教科書類が到着した。此の秋まで音楽に熱心であつた心は段々その方面に移つて行つた。解らぬところは關さんに訊いた。

村の百姓達は再び若い學校の先生の散歩姿を野道に見るやうになつた。寫生してゐる其周圍に子供達

が囀を描いてゐることもある。かれは彌勒野の初冬の林や野を繪はがきにして、小畑や加藤へ送つた。

三たびこのさびしい田舎に寒い西風の吹荒れる年の暮が来た。前の竹藪には薄い夕日がさして、あをじやつぐみの鳴聲が垣に近く聞える。二十二日頃から、日課點の調べが忙しかつた。舊の正月に羽生で舉行せられる成績品展覽會に出品する準備もそれ相應に整頓して置かなければならなかつた。圖畫、臨本模寫、考案畫、寫生畫、模様畫、それに綴り方に作文、昆蟲標本、植物標本などもあつた。それを生徒の多くの作品の中から選ぶのは一通の勞力ではなかつた。何うか來年は好成绩を博したいものだと思つた。校長は言つた。それに何うしてか、此頃はよく風邪を引いた。散歩したとは、咳嗽が出たり、湯に入つたとは熱が出たりした。烟草を飲むと、何うも頭の具合が悪い。今までに覺えたことのない軽い一種の眩惑を感じる。『君、何うかしたんちやありませんか、醫師に見て貰ふ方が好いですぜ、』と關さんは二十四日の授業を終つて別れようとする時に言つた。

菽生さんを羽生に訪問した時には、さう大して苦しくもなかつたけれど、成願寺に行つて久し振て和尚さんに逢つて話さうと思つた希望は、警察署の前まで来て中止すべく餘儀なくされた。熱も少くとも三十八度五分位はある。それに咳嗽が出る。丁度其處に行田に戻り車がうろくして居たので、廉く賃錢をねぎつて乗つた。寒い路を日の暮れくゞに漸く家に着いた。

年の暮を一室に籠つて寢て送つた。母親は心配して、いろく慰めて呉れた。幸ひにして熱は除れた。

大晦日には丁度昨日歸つたといふ加藤の家を訪づるゝことが出来た。郁治は清三の瘦せた顔と蒼白い皮膚とを見た。話し振も何處となく消極的になつたのを感じた。何ぞと言ふとすぐ衝突して議論をしたり、大晦日の夜を感激して曉の三時まで町中や公園を話し歩いたりした三年前に比べると、かうも變るものかと思はれた。二人は此頃東京の新聞で流行る寶搜しや玄米一升の米粒調べの話などをした。萬朝報の寶を小石川の久世山に豫科の學生が掘に行つてさがし當てたことを面白く話した。續いて、日露談判の交渉がむづかしいといふことが話題に上つた。『何うも東京では近來餘程殺氣立つてゐる。新聞の調子を見ても解るが、何處かかういつもと違つて眞面目なところがある。いよく戦端が開けるかも知れない、』と郁治は言つた。清三も此頃では新聞紙上で、この國家の大問題に熱心に見て居た。『そんな大きな戦争を始めて何うするんだらう、』といつも思つて居た。二人は其問題に就いていろ／＼話した。陸軍では勝算があるが、海軍では噸數がロシアの方が勝つて居て、それに戦闘艦が多いなどと郁治は話した。

元日の朝、床の間の花瓶にかれはめづらしく花を生けた。早咲の椿は僅かに赤く花を見せたばかりで、厚い濃い緑の葉は、黄い寒菊の小さいのと趣に富んだ對照をなした。別に蔓うめもどきの赤い實の鈴生になつたのを挿して居ると、母親は、『私、この梅もどきつていふ花大好きさ。この花を見るとお正月が來たやうな氣がする。』かう言つて通つた。父親は今朝猫の額のやうな晶の角で、霜解の土をザク／＼踏みながら、白い手を泥だらけにして、頻に何かしてゐるが、やがて漸く芽を出し始めた福壽草を鉢に植

ゑて床の間に飾つた。朝日の影が薄く障子にさした。親子は三人楽しさうに並んで雑煮を祝つた。

清三の日記は次のごとく書かれた。

明治三十七年。

一月一日——新しき生命と革新とを與ふべく、新しく苦心と成功と喜びと悲しみとを下すべく新年は來れり。若き新年は向上の好機なり。願はくば清く樂しき生活を營ましめよ。△『新年を床の青磁の花瓶に母が好みの蔓梅もどき』△小畑に手紙出す、これより勉強して二年三年の後、檢定試験を受んとす。科目は植物に志す由言ひやる。△風邪心地やうやくすぐれたれば、明日あたりは野外寫生せんとて、畫板など繕ふ。

二日——『たゞずの門』の邊に寫生すべき所ありたれど、風吹きて終日寒ければ止む。△きく子が數へし玄米一合の粒數七二五六。

三日——昨夜入浴せし爲め感冒再び元にもどる△休暇中に野外寫生の望み絶ゆ。

四日——萬朝報の米調べ發表、玄米一升七三二五〇粒△今年は儉約せんと思ふ。財囊の常に虚なるは心を溫めしむる現象にあらず。所詮生活に必要なだけの金は必要なり。

五日——年賀の禮今年は缺く。

六日——牧野雪子（雪子は昨年暮前橋の判事と結婚せり）より美しき繪葉書の年賀狀來る△腫物再

發す。

七日——病後療養と腫物の爲め歸校をのばす。△紅葉秋濤著「寒牡丹」讀みかけてやめる。罪惡が發端なり△中學世界買つて來てよむ。△加藤歸京す。

八日——健康を得たし、健康を得たし。健康を得たし。

九日——「寒牡丹」讀みて夜に入つて讀了す。罪惡に伴ふ悲劇中の苦悶、女主人公ルイザの熱誠なる執着、四百頁の大團圓はラブの成功に終る。△煙草は感冒の影響にて、頓に其量を減じ、あらば吸ひなくば吸はぬといふになりたり。長くこの方法が惰性となればよけれど如何にや。△明日は又利根河畔の人となるべし。△日露の危機、外交より戦期に遷らんとすと新聞紙頻りに言ふ。吾人の最も好まぬ戦争は遂に避くべからざるか。

さびしい寒い宿直室の生活はやがてまた始まつた。昨年十一月から節約に節約を加へて、借金の返却を心懸けたので、財囊は常に／＼冷かであつた。胃が悪く氣分がすぐれぬので、勉めて運動をしようと思つて、生徒を相手に校庭でテニスを遣つた。かれの蒼白い髪が生えたすらりと瘦せた姿はいつも夕暮の空氣の中に鮮かに見えた。かれは土曜日の日記の中に「半日の課業を正直にすませ、満足に事務を取り、温き晚餐の後、其日の新聞よみ終りて、さて一日の反省に何等悶ゆることなく、安息すべき明日の日曜を思へば、テニスの運動の影響として、右手の筋肉の筆執るに震へるの外絶えて平和ならざるなし。」

と書いた。また、『Mの都合あれば歸宅したけれど思ひ止る。節約の結果三錢の刻煙草四日を保つ。』と書いた。しかしかれは夜眠られなくつて困つた。眠つたと思ふとすぐ夢におそはれる。大抵は恐ろしい人に追ひ懸けられるとか刀で斬られるとかする夢で、眼が覺めると、ぐつしより寢汗をかいて居る。心持の悪いことは譬へやうがなかつた。

中學校校友會の會報が年二季に來た。同窓の友の消息がおぼろ氣ながらこれに由つて知られる。アメリカへ行つたものもあれば、北海道へ行つたものもある。今季の會報には寄宿舎生徒松本なにがしが自から棄て、自殺した顛末が書いてあつた。深夜、ピストルの音がして人々が驚いて走せ寄つたことが詳しく記してあつた。かれは今まで思つたことのない「死」に就いて考へた。夜は其夢を見た。寄宿舎の窓に灯が明るく點いて、人がガヤ／＼して居る。ピストルが續けさまに鳴つた。自殺した男が窓から飛んで出た。

朝毎の霜は白かつた。夜半の寒で竹の葉が眞白になつて居ることもあつた。ラツケットを擲いて校庭に立つて居るかれの瘦削な姿を人々は常に見た。解けやらぬ小川の氷の上にはあをじが飛び、空しい枝の桑晶にはつづみが鳴き、榛の根の枯草からは水鶏が羽音高く驚き立つた。櫛や栗の葉は全く落ち盡して、草の枯れた利根川の土手は唯一帯に代赭色に塗られて見えた。田には大根の葉がひたと捨てられてあつた。

月の中頃に、母親から来た小荷物には、毛糸のシャツが入つて居た。手紙には、『寒さ烈しく御座候間
 餘り寒き時は湯をやすみ、風ひかぬやう御用心下されたく候、朝夕よきこと悪しきことにつけお前一人
 便りに御座候間御身大切に御守り被下度候』と書いてあつた。此頃は母を思ふの情が一層切になつて、
 土曜日に歸る途でも、稚兒を脊に負つた親子三人連の零落した姿などを見ては涙をこぼした。母親も此
 頃清三の際立つてやさしくなつたのを喜んだが、しかし又心配にならぬでもなかつた。俄かに氣の弱く
 なつたのは病氣の爲めではないかと思つた。清三が行くと、賃仕事を午後から休んで、白玉のしる粉な
 どをこしらへて欸待した。寢汗が出るといふことを聞いて、『お前、本當にお醫者にかゝつて見て貰はな
 くつて好いのかね、』と顔に心配の色を見せて言つた。

時には荻生さんを羽生から誘つて来て、宿直室に一夜泊らせることなどもあつた。荻生さんは此頃話
 のある養子の口のことを語つて、『其家は君、相應に財産があるんですつて、今に、立派な旦那になつた
 ら、たと御馳走しますよ。君位一人置いて上げてても好い、』などと戯談を言つて快活に笑つた。荻生さ
 んは床に入ると、すぐ躰を立て、安らかに熟睡した。かうして安らかに世を送り得る人を清三は羨しく
 思つた。

關さんはすひかつらやじやのひげや大黃などを枯草の中に見出して教へて呉れた。寒い冬の中にも際
 立つて暖かい春のやうな日があつた。野は平らかに、靜かに、廣く、さびしく、しかも心地よく刈取ら
 れて、榛のひよろ長い空しい幹が青い空に捺すやうに見られた。かれは午前七時には必ず起きて、燃ゆ
 るやうな朝日の影の霜けぶりの上に昇るのを見ながら、いつも深呼吸を四五十度遣るのを例にして居た。
 『何うして、かう氣分がすぐれないんだらう、何うかしくなつては仕方がない、』などと時には自から勵
 ました。しかし矢張腸胃の具合が好くなかつた。寢汗も出た。

四十二

ある暖かい日曜に、關さんと連れ立つて、羽生の原といふ醫師の許へ見て貰ひに出懸けた。町の横町
 に、黒い冠木門があつて、庭の松が濃い緑を見せた。白い敷布をかけた寢臺が診察室にあつた。それに
 隣つた薬局には、午前十時頃の暖かい冬の日影の透つた硝子の向うに、種々の藥劑を盛つた小さい瓶が
 棚の上に並べてあるのが見えた。醫師は三十七八の髪を長くした丁寧な腰の低い人で、聽診器を耳に當
 て、先づ胸から腹のあたりを見た。次に、肌をぬがせて脊中のあたりを見て、コツ／＼と軽く叩いた。

『矢張、腸胃が悪んでせうな。』

かう言つて型のごとき藥を醫師は呉れた。

春のやうな日であつた。連日の好晴に、霜解の路も大方乾いて、街道にはところ／＼白い埃も見え
 た。霞に包まれて、頂きの雪がおぼろげに見える兩毛の山々を後ろにして、二人は話しながら緩かに歩

いた。野の角に脊を後に日向ぼつこをして、ブン／＼絲線車を繰つて居る猫脊の婆さんもあつた。名代の角の饅頭屋には二三人客が腰をかけて、傍の大釜からは湯気が白く立つてゐた。野には、日當のいゝ所には草が既に萌えて、なづ菜など青々としてゐる。關さんはところ／＼で、足を止めて、そろ／＼芽を出し始めた草を採つた。そしてそれを清三に見せた。風呂敷にも包まずに持つて居る清三の水薬の瓶には、野の暖かい日影がさし透つた。

四十三

『先生。』

とやさしい聲がした。

障子を明けると、庇髪に結つて、鳥渡見ぬ間に非常に大人びた女生徒の田原ひでが莞爾と笑つて立つて居た。昨年の卒業生で、出来の好いので評判であつたが、卒業するとすぐ、浦和の師範學校に行つた。高等二年生の時から清三が手がけて教へたので、殊にかれをなつかしがつてゐる。高等四年の頃に、新體詩などを作つたり和文を書いたりして清三に見せた。家は鳥渡した農家で、散歩の折に清三が寄つて見たこともあつた。餘り可愛がるので、『林先生は田原さんばかり最負にしてゐる、』などと生徒から言はれたこともあつた。丸顔の色の白い田舎にはめづらしいハイカラな子で、音楽が好きで、清三の教へた

新體詩をオルガンに合せてよく歌つた。師範學校の寄宿舎からも、常に自然の、運命の、熱情のと手紙を寄越した。教へ子の一人よりなつかしき先生へと書いて來たこともあつた、時には、詩を下さいなどと言つて來ることもあつた。

『田原さん!』

清三は立上つた。

『何うしたんです?』

續いて訊ねた。

『今日用事があつて、家に参りましたから鳥渡お伺ひしましたの。』

言葉やら様子やらからかうも變るものかと思ふほど大人びてハイカラになつたのを清三は見た。

『先生、御病氣だつて聞きましたから。』

『誰に?』

『關先生に——』

『關さんに何處で逢つたんです?』

『村の角で一寸——』

『何アに大したことはないですよ、』と笑つて、『例の胃腸です——餘り甘いものを食ひ過ぎるものだ』

から。』

ひで子は笑つた。

先生と生徒とは日曜日の午後の明るい室に相對して暫し語つた。寄宿舎の話などが出た。今年卒業する筈の行田の美穂子の話も出た。依然として昔の親しみは残つて居るが、女には娘になつた隔てが何處となく出て居るし、男には生徒としてよりも娘といふ感じがいつもの隔てのない會話をさまたげた。机の上には半分ほど飲んだ水薬の瓶が夕日に明るく見えてゐた。清三は今朝友から送つて來た『音楽の友』といふ雑誌をひろげてひで子に見せた。口繪には紀元二百年頃の樂聖セント、セリシアの像が出て居た。オルガンの妙音から出た花と天使の幻影とを樂聖はちつと見て居る。清三はこの人はロオマの貴族に生れて、熱心なるエホバの信者で、オルガンの創造者であるといふことを話して聞かせた。美容花の如くであつたといふことをも語つた。

オルガンの音はやがて聞え出した。小使が行つて見ると、若い先生が指を動かして頻りに音を立て、るる傍に、海老茶の袴を着けたひで子は笑顔を含んで立つた。

校庭は静かであつた。午後の日影に雀がチャク／＼と鳴き頻つた。テニスコートの線が明かに残つてゐて、宿直室の長い縁側の隅にラケットやボールや網が置いてあるのが見える。庭の一隅には教授用の草木が植ゑられてあつた。

ひで子を送つて清三は其處に出て來た。

薔薇の新芽が出て居るのが目についた。清三はそれをひで子に示して、

『もう芽が出ましたね、早いもんだ、もうちき春ですな。』

『本當に早いこと！』

とひで子は其一葉を摘み取つた。

やがて校外の路を急いで歸つて行く海老茶袴の姿が見えた。

四十四

日露開戦、八日の旅順と九日の仁川とは、急電のやうに人々の耳を驚かした。紀元節の日には校門に日章旗が立てられ、講堂からはオルガンが聞えた。

東京の騒ぎは日毎の新聞紙上に見えるやうに思はれた。一月以前から政治界の雲行の速かなのは、田舎で見て居ても氣がもめた。召集令は既に下つた。村役場の兵事係が夜に目を繼いで、其命令を各戸に傳達すると、二十四時間に其の管下に集らなければならぬ壯丁達は、父母妻子に別れを告げる暇もなく、或は夕暮の田舎道に、或は停車場までの乗合馬車に、或は楢林の間の野の路に、一包の荷物をかゝへて急いで國事に赴く姿が續々として見られた。南埼玉の一郡から徴集されたものが三百餘名、其頃はまだ

東武線が出来ぬ頃なので、信越線の吹上驛、鴻巣驛、桶川驛、奥羽線の栗橋驛、蓮田驛、久喜驛などがその集る重なる停車場であつた。

交通の衝に當つた町々では、逸早く國旗を建て、此兵士達を見送つた。停車場の柵内には町長だの兵事係だの學校生徒だの親類友達だのが集つて、汽車の出る度毎に萬歳を歡呼して其行を壯にした。清三は行田から彌勒に歸る途中、さうした壯丁に幾人も邂逅した。

旅順仁川の海戦があつてから、靜かな田舎でも其話が到る處で繰返された。町から町へ、村から村へ配達する新聞屋の鈴の音は忙しげに聞えた。新聞紙上には二號活字が麗々しく掲げられて、いろ／＼な計畫やら風説やらが記されてある。十二日は朝から曇つた寒い日であつたが、豫想のごとく、敵の浦鹽艦隊が津輕海峽に襲來して、商船奈古浦丸を轟沈したといふ報が來た。其の津輕海峽の艦作崎といふのは何處に當るか、それをたしかめる爲め、校長は教授用の大きな大日本地圖を教員室に懸けた。老訓導も關さんも女教師も皆な其處に集つた。

『はゝア、こんな處ですか。』と老訓導は言つた。

清三は浦鹽から一直線に遣つて來た敵の艦隊と轟沈されたわが商船とを想像して、久しく其掛圖の前に立つて居た。

湯屋でも、理髮舖でも、戦争の語の出ぬ處はなかつた。憎いロシアだ、懲らしてやれといふ爺もあれば、

さうした大國を敵として果して勝利を得らるゝか何うかと心配する老人もあつた。子供等は旗を拵へて戦争の眞似をした。けれど概して田舎は平和で、夜はいつもの如く竹藪の外に藁屋の灯の光が漏れた。丁度舊曆の正月なので、街道の家々からは、酒に酔つて笑ふ聲や歌ふ聲もした。

此頃かれは朝は六時半に起床し、夜は九時に寝た。正月の餅と饅頭とに胃腸をこはすのを恐れたが、しかし大したこともなくてすぎた。節約に節約を加へた經濟法は段々成功して、負債も少くなり、校長の斡旋で始めた頼母講にも毎月五十錢をかけることも出来るやうになつた。午後の二時頃にはいつも新聞が來た。戦争が始まつてから、互に異つた新聞を一つづつ取つて交換して見ようといふ約束が出來た。國民に萬朝報に東京日々に時事、それに前の理髮舖から報知を持つて來た。

この多くの新聞を読むこと、日記をつけること、運動をすること、節儉をすること、風を引かぬやうにつとむること、煙草を止めること、土曜日の歸宅を待つこと、それ位が此頃の仕事で、他にこれと言つて變つたこともなかつた。しかし煙草と菓子とを止めるは容易ではなかつた。氣分が好かつたり胃が好かつたりすると、机の周圍に餅菓子のからの竹皮や、日の出の袋などが轉がつた。

寫生には大分熱中した。天氣の好い日には、畫板と繪具とを携へてよく野に出かけた。稻木、榛の林、堀切の枯蘆、それに雪の野を描いたのもあつた。ある日學校の附近の紅梅を描いて見たが、色彩が拙い

ので、花が桃か何ぞのやうに見えた。嫁菜、蓬、なづななどの縁をも寫した。

月の末に、小畑から手紙が届いた。少しく病を獲て、この春休みを故郷に送るべく決心した。久し振りで一度逢ひ度い。此方から出かけて行くから、日取を知らせてよこせとのことであつた。旅順に於ける第一回の閉塞の記事が新聞紙上に載せられてある日であつた。清三は喜んで返事を出した。金曜日は行くといふ返事が折かへして来る。清三は萩生さんにも來遊を促した。其前夜は月が明るかつた。これはそれに對して、久し振で、友のことを思つた。

四十五

小畑は昔に比べて著しく肥えて居た。薄い鬚などを生して頭を綺麗に分けた。高等師範の制服がよく似合つて見える。以前の快活な調子で、『かういふ生活も面白いなア、』などと言つた。

萩生さんは清三と小畑と教員達とが、ボウルを取つて校庭に立つたのを縁側から下りる低い階段の上に腰懸けて見て居た。小畑の球はよく飛んだ。引かへて、清三の球には力がなかつた。一三度勝負があつた。清三の額には汗が流れた。心臓の鼓動も高かつた。

苦しさに呼吸をつくのを見て、

『君は何うかしたのか。』

かう言つて、小畑は清三の血色の悪い顔を見た。

『體が少し悪いもんだから。』

『何うしたんだ？』

『持病の腸胃さ、大したことはないんだけど……』

『大事にしないといかんよ。』

小畑は再び友の顔を見た。

三人は快活に話した。清三が出して見せる寫生を一枚毎に手に取つて批評した。萩生さんの軽い駄洒落もをり／＼は交つた。そこに關さんが遣つて來た。昆蟲採集の話や植物採集の話が出る。三峰で採集したものなどを出して見せる。小畑は學校にあるめづらしい標本や昨年の秋の採集に出かけた時のことなどを話して聞かせる。賑かな聲がいつものしんとした宿直室に満ち渡つた。

夕飯は小川屋に行つて食つた。雨氣を帯びた夕日がぱつと障子を明るく照して、酒を飲まぬ萩生さんの顔も赤い。小畑は美穂子や雪子のごとは成たけ口に上さぬやうにした。かれは談笑の間にも著しく清三の活氣が無くなつたのを見た。

萩生さんは清三の居ない時に、

『あれでも去年は中々盛んだつたんですからな。』

かう言つて、女が學校に遣つて來たことなどを小畑に話して聞かせた。小畑は少なからず驚かされた。夜は小川屋から一組の蒲團を運んで來た。まだ寒いので、荻生さんは小使部屋に行つてはよく火を火鉢に入れて持つて來た。菓子も盡き、湯茶も盡き、話も盡きてやうやく寝ようとしたのは十一時過ぎであつた。便所に出て行つた小畑は歸つて來て、『雨が降つてゐるねえ、』と聲低く言つた。

『雨!』

と明日朝早く歸る筈の荻生さんは困つたやうな聲を立てた。

『明日は土曜、明後日は日曜だ。行田には今週は歸らん積りだから、雨は降つたつて構ひやしない。君も、明日一日遊んで行くサ、滅多に三人かうして一緒になることはありやしない、』と清三はかう荻生さんに言つたが、戸外に漸く音を立て始めた点滴を聞いて、『愉快だなア! かうしてわれ／＼の會合の背景が雨になつたのは實に愉快だ。今夜はしめやかに昔を語つて、天が雨を降らして呉れたやうなものだ!』

興が大に起つて來たといふ風である。小畑の胸にもかれの胸にも中學校時代のことが簇々と思ひ出された。清三は歸りが遅くなるといつもかうして一枚の蒲團の中に入つて、熊谷の小畑の書齋に泊るのが常であつた。顔と顔を合せて、眠くなつて何方か一方、「うん／＼」と受身になるまで話をするのが例であつた。

『あの頃が思ひ出されるねえ。』

と小畑は寝ながら言つた。

荻生さんが一番先に躰を立てた。『もう、寝ちやつた。早いなア、』と小畑が言つた。その小畑もやがて疲れて熟睡して了つた。清三は眼が覺めて何うしても眠られない。戸外にはサツと降つて通る雨の音が聞える。いろ／＼な感があとからあとから胸を衝いて來た。胸が一杯になる。かうしたやさしい友もある世の中に長く生きたいといふ思ひが漲り渡つたが、それと共に、涙が其の蒼白い頬をほろ／＼と傳つて流れた。中田の女のことも續いて思出された。長い土手を夕日を帯びてたどつて行く自分の姿が丸で他の人であるかのやうに鮮かに見えた。涙は寢卷の袖で拭いても拭いても出た。

翌朝、小畑は言つた。

『昨夜、君はあれからまた起きたね。』

『どうも眠られなくて仕方がないから、起きて新聞を読んだ。』

『何かごく／＼音がするから、目を明いて見ると、君はランプの傍で起きて居る。君の顔が白くはつきりと際立つて居たのが今でも見える。』かう言つて、清三の顔を見て、『夜寝られないかえ?』

『何うも寝られなくて困る。』

『矢張神經衰弱だねえ。』

土曜日は半日授業があつた。荻生さんは朝早く雨を衝いて歸つた。小畑は校長や清三の授業ぶりを參觀したり、教員室で關さんの集めた標本を見たり、時間毎に教員につれられてぞろ／＼と教場から出て来る生徒の群を見たりして居た。女教員は黄い聲を立て、生徒を叱つた。竹藪の中には椿が紅く咲いて、其縁にある盛りをすぎた梅の花は雨にぬれて泣くやうに見えた。清三は袴を穿いて、瘦せ果てた體と蒼白い顔とを教室の卓の前に浮き出すやうに見せて、高等二年生に地理を教へてゐた。午後からは、二人は又宿直室で話した。三時には馬車が喇叭を鳴らして羽生から來たが、馭者は今朝荻生さんに頼んでやつた豚肉の新聞包を小使部屋に投り込むやうにして置いて行つた。包の中には葱と手紙とが添へてあつた。手紙には明日午後から羽生に來い。待つてゐる！と書いてあつた。

雨は終日止まなかつた。硬い田舎の豚肉も二人を淡く酔はせるには充分であつた。二人は高等師範のことやら、舊友のことやら、戦争のことやらを飽かず語つた。

『今年は駄目だが、來年は一つ是非検定を受けて見たいんだが。』
と清三は言つた。

日曜日には馬車に乗つて羽生に出かけた。旅順が陥落したといふ評判が盛んであつた。まだそんなに早く取れる筈がないといふ人々もあつた。街道を鈴を鳴らして走つて行く號外賣もあつた。荻生さんは、銀行の一階を借りて二人を迎へた。御馳走にはいり鳥と鶏肉の汁と豚鍋と鹿子餅。『今日は何だか飯の方が

副食物のやうだね、』と清三は笑つた。

清三の居ない處で、小畑は荻生さんに、

『林君、何うかしてますね、體が何うも本當ぢやないやうですね？』

『僕も實は心配してゐるんですがね。』

『何か悪い病氣ぢやないだらうか。』

『さア——』

『今の中勤めて根本から療治させる方が好いですぜ。手後れになつては仕方がないから。』

『本當ですよ。』

『持病の胃が悪いんだなんて言つてるけれど——本當にさうか知らん。』

『町の醫師は腸が悪いんだつて言ふんですけれど。』

『しつかりした醫師に見せた方が好いと思ふね。』

『本當ですよ。』

翌日の朝、銀行の一階で三人はわかれた。小畑は清三に言つた。

『本當に體を大事にし給へ。』

四十六

戦争は段々歩を進めて来た。定州の騎兵の衝突、軍事公債應募者の好況、わが艦隊の浦鹽攻撃、旅順口外の激戦、臨時議會の開院、第二回閉塞運動、廣瀨中佐の壮烈なる戦死、第一軍の出發につれて第二軍の編制、國民は今眞面目に戦争の意味と結果とを自覺し始めた。野は段々暖くなつて、菜の花が咲き、堇が咲き、蒲公英が咲き、桃の花が咲き、櫻の花が咲いた。號外の來る度に田舎町の軒には日章旗が立てられ、停車場には萬歳が唱へられ、畠の中の藁家の附近からも、手製の小さい國旗を振つて子供が立って居るのが見えた。學校では學年末の日課採點に忙はしく、續いて簡易な試験が始まり、それが済むと、卒業證書授與式が行はれた。郡長は卓の前に立つて、卒業生の爲めに祝辭を述べたが、その中には軍國多事のことと縷々として説かれた。

『皆さんは記念とすべきこの明治卅七年に卒業せられたのであります。日本の歴史の中で一番眞面目な時、一番大事な時、かういふ時に卒業せられたといふことは忘れてはなりません。皆さんは第二の國民として充分なる覺悟をしなければなりません。』平凡なる郡長の言葉にも、時世の言はせる一種の強味と憧憬とが顯はれて、聴く人の心を動かした。

寫生帳には瓶の梅花、水仙、學校の門、大越の櫻などがあつた。沈丁花の花はや、巧に出來たが、葉

の陰影にはいつも失敗した、それから緋織蝶、紋白蝶なども採集した。小畑が送つて呉れた丘博士譯の進化論講話が机の上に置かれて、その中頃に堇の花が枝折の代りに挿まれてあつた。菓子は何物のうぐひす餅。菜は獨活にみつばにくわる。漬物は京菜の新漬。生徒は草餅や牡丹餅をよく持つて來て呉れた。

利根川の土手にはさまざまの花があつた。ある日清三は關さんと大越から發戸までの間を歩いた。清三は一々花の名を手帳につけた。——みつまた、たびらこ、ぢごくのかまのふた、ほとけのぎ、すゞめのゑんどう、からすのゑんどう、のみのふすま、すみれ、たちつぽすみれ、さんしきすみれ、げんげ、たんぽぽ、いぬがらし、こけりんだう、はこべ、あかじくはこべ、かきどうし、さぎごけ、ふき、なづな、ながばぐさ、しやくなげ、つばき、こぎめざくら、もも、ひぼけ、ひらぎく、へびいちご、おにだひらこ、はここ、きつねのぼたん、そらまめ。

四十七

新たにつくつた學校の花壇にもいろ／＼の草花が集められた。農家の垣には梨の花と八重櫻、畠には豌豆と蠶豆、麥笛を鳴らす音が時々聞えて、燕が街道を斜に突切るやうに飛びちがつた。蟻、蜂、油蟲、夜は名の知れぬ蟲が頻りにズイ／＼と鳴き、蛙の聲は湧くやうにした。

あけび、ぐみ、さきごけ、きんぼうげ、じふにひとへ、たけにくさ、きしむしろ、なんてんはぎなど

を野から採つて来て花壇に移した、やがて山吹が散ると、芍薬、牡丹、つじなどが咲き始めた。

この春をかれは全く花に熱中して暮した。新緑を透した日の光が洪水のやうに一室に漲り渡つた。かれは其處で田原秀子に遣る手紙を書き、めづらしい種々の花を封じ込めて遣つた。ひで子からも少くとも一週に一度は必ず返事が來た。歌が書いてあつたり新體詩が書いてあつたりした。わが愛するなつかしの教へ子と此方から書いて遣ると、彼方からは、戀しきなつかしき先生まると書いてよこした。

四十八

此頃、移轉問題が親子の間に繰返された。

學校に自炊して居ては不自由でもあり不經濟でもある。家の都合から言つても別に行田に住んで居なければならぬといふ理由もない。父の商賣の得意先も此頃では熊谷妻沼方面よりむしろ加須、大越、古河に多くなつた。離れて居て、土曜日に來るのを待つのも辛い。『それにお前も、もう年頃だから、相應なのがあつたら一人嫁を貰つて、私にも安心させてお呉れよ。』

母はかう言つて笑つた。

清三は以前のやうに反對しようとしなかつた。昨年から比べると、心も餘程折れて來た。絶えず動搖した『東京へ』も大分薄らいだ。ある時小畑へやる手紙に『當年のしら瀧は知らず識らずの間に終に

母を護るの子たらんと致し居候』と書いたこともある。

『羽生が好いよ……餘り田舎でも仕方がないし、羽生なら知つてる人も二三人はあるからねえ。』

母がかう言ふと、

『さうだ、引越すなら、羽生が好い。得意先にも丁度都合が好い。』

父も同意する。

其處には和尚さんも居れば、萩生さんもゐる。學校にも一里半位しかないから、通ふのにもさう難儀ではない。清三もかう思つた。

萩生さんにも頼んだ。ある日曜日を父親と一緒に羽生に出懸けて行つて見たこともあつた。其日は第二軍が遼東半島に上陸した公報の來た日で、一週間ほど前の九連城戦捷と共に人々の心は全くそれに奪はれて了つた。街道にも町にも國旗が軒毎に絶えず續いた。

『萬歳、萬歳！』

突然町の横町から雀躍して飛んで出て來るものがあつた。何處の家でも其話ばかりで持切つて、借家などを教へて呉れるものもなかつた。

ねき、しゆろひるがほ、なまこのしりぬぐひなどが咲き、梨、桃、梅の實は小指の頭位の大ききになる。處々に茶摘をする女の赤い褌と白い手拭とが見え、裸で茶を製してゐる茶師の唄が通りに聞えた。

志多見原にはいちやくさう、たかとうだいなどの花があつた。やがて麥の根元は黄ばみ、菖蒲の蕾は出で、櫻の花は散り、にはやなぎの花は咲いた。蠶は既に三眠を過ぎた。

續いてしらん、ぎしく、たちあふひ、かはほね、のいばら、つきみさう、てつせん、かなめ、せきちくなどが咲き、裏の畑の桐の花は高く薫つた。かや、あし、まこも、すげなどの葉も茂つて、割草は頻りに鳴く。

金州の戦、大連灣の占領——第三軍の編制、旅順の背面攻撃。

『敵も旅順は頑強にやるつもりらしいですな。何うも海軍だけでは駄目のやうですな、』などと校長が言つた。旅順の陥落についての日が同僚の間に豫想される。或は六月の中頃といひ、或は七月の初めといひ、或は八月には何んなにおくれても取れるだらうと言つた。やがて鶏一羽と鶏卵十五の賭をしようと言ふことになる。そして陥落の公報が達した日には、休日であらうが何であらうが、職員一統學校に集つて大々の祝宴を開かうと決議した。

六月に入ると、麥は黄熟して刈取られ、胡瓜の莖短かきに花を有ち、水草のある處には螢が闇を縫つて飛んだ。ほそる、ゆきのした、のびる、どくだみ、かもじぐさ、なはしろいちご、つゆぐさなどが咲いた。雨は降つては晴れ、晴れてはまた降つた。ある日、美穂子の兄からめづらしくはがきが届いた。かれは士官學校を志願したが、不合格で、今では一年志願兵になつて、麻布の留守師團に居た。『十中八

九は戦地に赴く望みあり、幸ひに祝せよ。』と得意さうに書いてあつた。それに限らず、かれは野から畠から町から鋤犁を捨て算盤を捨て筆を捨て、國事に赴く人々を見て、心を動かさざるを得なかつた。海の外には同胞が汗を流し血を流して國の爲めに戦つて居る。其處には新しい意味と新しい努力がある。平生政見を異にした政治家も志を一にして公に奉じ、金を守るに専らなる資本家も喜んで軍事公債に應じ、舉國一致、千載一遇の壯舉は着々として實行されてゐる。新聞紙上には日毎に壯烈なる最後を遂げた士官や、勇敢なる偉勳を奏した兵士の記事を以て滿され、それについで各地方の團體の熱心なる忠君愛國の状態が見るやうに記されてある。『自分も體が丈夫ならば——三年前の検査に戊種などといふ憐むべき資格でなかつたならば、滿洲の野に、わが同胞と共に、銃を取り劍を揮つて、僅かながらも國家の爲めに盡すことが出来たであらうに、』などと思ふことも一度や二度ではなかつた。かれはまた第二軍の寫眞班の一員として従軍した原杏花の従軍記の此頃『日露戦争實記』に出始めたのを喜んで讀んだ。戀愛を書き、少女を描き、空想を生命とした作者が、或は砲烟の漲る野に、或は死屍の横はれる塹壕に、或は機關砲の凄じく鳴る丘の上に、其のさまざまの感情と狀景を叙した筆は、少くともかれの想像を其處につれて行くのに十分であつた。三年前に、イタリヤンストロウの意氣な帽子を被つて、羽生の寺の山門から入つて來た其人——酔つて詩を吟じて、果ては本堂の木魚や鐘を敲いた其人が、第二軍の司令部に從屬して、其の混亂した戦争の巴渦の中に入つて居るかと思ふと、一層其記事が分明と眼に映るやうな

氣がする。急行軍の砲車、軍司令官の戰場に赴く朝の行進、砲聲を前景にした茶褐色の禿げた丘、其の急忙の中を、水筒を肩からかけ、ピストルを腰に巻いて、手帳と鉛筆とを手にして飛んで歩いてゐる一文學者の姿をかれは羨しく思つた。

ある日和尚さんに、

『原さんからお便りがありますか。』

と訊くと、

『え、此間金州から繪葉書が來ました。』

と和尚さんは机の上から軍事郵便と赤い判の押しである一枚の繪ハガキを取つて示した。それには同じく従軍した知名な畫家が死屍の傍に菖蒲が紫に咲いて居る處を描いて居た。

『好い記念ですな。』

『え、かういふ花が澤山戰場に咲いてゐると見えますな。』

『戦記にも書いてありましたよ。』

と清三は言つた。

四十九

梅雨の中に一日カッと晴れた日があつた。薄い灰色の中から鮮かな青い空が見えて、光線が漲るやうに青葉に照つた。行田からの歸途、長野の常行寺の前まで來ると、何か事があると見えて、山門の前には人が多く集つて、がやくと話して居る。小學校の生徒の列も見えた。

青葉の中から白い旗が靡いた。

戦死者の葬式があるのだといふことがやがて解つた。清三は山門の中に入つて見た。白い旗には近衛歩兵第二聯隊一等卒白井倉之助君之靈と書いてあつた。五月十日の戦に、鰻河の右岸で戦死したのだといふ。フロックコートを着た知事代理や、制服を着けた警部長や、羽織袴の村長などが皆會葬した。村の世話役が彼方此方に忙しうに其處等を歩いて居る。

遺骨を藏めた棺は白い布で巻かれて本堂に据ゑられてあつた。丁度主僧のお經が濟んで、知事代理が祭文を読むところであつた。其の太い錆びた聲が一しきり廣い本堂に響き渡つた。やがてそれに續いて小學校の校長の祭文がすむと、今度は戦死者の親友であつたといふ教員が、奉書に書いた祭文を高く捧げて、震へるやうな聲で讀み始めた。其聲は時々絶えて又續いた。嗚咽する聲が彼方此方から起つた。

柩が墓に運ばれる時、廣場に集つた生徒は兩側に列を正して、整然としてこれを見送つた。それを見

ると、清三は堪らなく悲しくなつた。軍司令部と一緒に原杏花が出發する時、小學校の生徒が兩側に整列して、萬歳を唱へた。其時かれは、『爾、幼なき第二の國民よ、國家の將來はかゝつて汝等の双肩にあるのである。健在なれ、汝等幼なき第二の國民よ』と心中に絶叫したと書いてある。其時ほど熱い涙が胸に迫つたことはなかつたと書いてある。清三も今さうした思に胸が一杯になつた。幼ない第二の國民に柩を送られる一戦死者の靈――

砲煙の漲つた野に最後の苦痛を味つて冷たく横つた一兵卒の姿と、かうした梅雨晴の鮮かな故郷の日光の下に悲しく營まれる葬式のさまとが一緒になつて、清三の眼の前を通つた。

『何うせ人は一度は死ぬんだ!』

かう思つたかれの頬には涙がこぼれた。

かれはいつか寺を出て、例の街道を歩いて居た。光線はキラ／＼した。青葉と青空の雲の影とが野の上にあつた。

二三日前から頻りに報ぜられる壹岐沖の常陸丸遭難と得利寺に於ける陸軍の戦捷とが繰返しくりかへし思出される。初瀬吉野宮古の沈没なども考へて『果して、最後の勝利を占めることが出来るだらうか』といふ不安の念も起つた。

野にたうごき草があるのを見て、それを採つた。傍にある名を知らぬ赤い草花は學校の花壇に植ゑようと思つて、根から掘つて紙に包み、汚れた手をみそはぎの茂る小川で洗つた。ふと一昨日浦和のひで子から來た手紙を思ひ出して、考はそれに移る。羽生に移轉してからの新家庭に、その明かな笑顔を得たならば、いかに幸福であらうと思つた。かれは此頃ひで子を自分の家庭にひきつけて考へることが多くなつた。

羽生町の入口では、東武鐵道の線路人夫が頻りに開通工事に忙しがつて居たが、其傍の藁倉家には、色の褪めた國旗がヒラ／＼と日に光つた。

五十

羽生に移轉する前日の日記に、かれはかう書いた。

『廿六年故山を出でて、熊谷の櫻に近く住むこと數年、三十三年に此處忍沼のほとりに移りてより、又數年を出でずして蝸牛のそのの如く、又も重からぬ殻を負ひて、利根河畔羽生に移らんとす。奇しきは運命のそれよ、面白きは人生のそれよ、回顧一番、笑つて昔古びたる城下の縁を出でて去らんのみ。歴史の章は斯の如く、又かくの如くして改められん。』

羽生の大通りを鳥渡裏に入つた處に、その貸家があつた。捜して呉れたのは菰生さんで、持主は二三年前まで、通りで商賣をして居た五十ばかりの氣の好さうな人であつた。下が六疊に四疊半、二階が六疊、

前に小さな庭があつて、其處に丈の低い柿の木が繁つて居た。家賃が二圓五十錢、敷金が三月分あるのだが、荻生さんのお友達ならそれはなくつても好いといふ。父親も得意廻りの次手に寄つて見て、『まア、あれなら好い!』と賛成した。

一週間の農繁休暇を利用して、愈々移轉することになった。平生親しくした友達は多くは離散して、其時町に居るものは、活版屋をしてゐる澤田君位のものであつた。清三は其往來した友の家々を暇乞をして歩いた。北川の家には母親が一人居た。入口ですまさうとするのを『まア、本當にお久し振てしたね』と、無理に奥の座敷へと請された。美穂子に就ては、『あれも今年は卒業するのですけれど、意氣地がなくつて、學校が勤まりますか何うですか』などと言つた。移轉のことを聞いては、『まア、お名残惜しい、……けれどまア、貴君の身體がお定りになつて、お引越なさるんですから、結構ですなえ。お母さんも嘸ぞお喜びでせう。薫が居れば、お手傳位致すんですけれど、あれも此の七月には戦地へ参るさうですから……』それからそれと、戦争の話やら町の話やらが續いた。母親の眼には、蒼白い顔をした眼の濁つた體の瘦せた清三の姿が映つた。忍沼の錆びた水にはみぞかくしの花がところ／＼に白く見えた。加藤の家には母親も繁子も留守で、めづらしく父親が居た。上つて教育上の話などを、一時間ばかりもした。羽生から今すこし近い處に好い口があつたら、轉任させて貰ひたいといふことをも頼んだ。石川の店では、小僧が忙がしさうに客に應對して居た。其處へ番頭が向うから自轉車をきしらし

て歸つて来て、ひらりと飛び下りた。澤田さんは眞黒になつて働きながら、『此方の方に來た時には是非寄つて下さい。』と言つた。清三は最後に弟の墓を訪うた。祖父の墓は足利にある。祖母の墓は熊谷にある。かうして、ところ／＼に墓を残して行く一家族の漂泊的生活をかれは考へて黯然とした。一人他郷に残される弟はさびしからうなどとも思つた。あちさるの花は墓を明るくした。

道具とでもない一家の移轉の準備は簡單であつた。箆筒と戸棚とを薦で絡げ、夜具を大きなさいみの風呂敷で包んだ。陶器は總て壊れぬやうに、箆筒の衣類の中や蒲團の中などに入れた。最後に椿や南天の草花などを掘つて、根を薦包にして庭の一隅に置いた。

降るかと思つた空は午前中に晴れた。荷物を満載した三臺の引越車はガラ／＼と町の大通りを輾つて行く。ところ／＼で母親と清三とが知人に邂逅して挨拶して居るさまが浮き出すやうに見える。車の一番上に積まれた紙屑籠につめたランプのホヤがキラ／＼光る。

長野の手前で、額が落ち懸りさうになつたのを清三は直した。母親はにこ／＼と嬉しさうな顔色で、いろ／＼な話をしながら歩いて行く。熊谷から行田へ移轉した時の話も出る。『かうして、大した迷惑を人にもかけずに、晝間引越して行かれるのは、皆なお前のお蔭だよ。』などと言つた。長野を外れようとする處で、向うから號外賣が景氣よく鈴を鳴らして走つて來た。清三は呼留めて一枚買った。竹敷を出た上村艦隊が暴雨の爲めに敵を逸して歸着したといふことが書いてある。車力は、『残念ですなア、敵をに

がして了つて……常陸丸では此近邊で死んだ人がいくらもあるですぜ。佐間では三人まであるですぜ。』などと話し合つた。

ある豪農の塀の前では、平生引越車などに見馴れないので犬が吠えた。榛の並木に沿つた小川では、子供が泥だらけになつて、網で雑魚をすくつて居る。繭賣の車がぞろ／＼通つた。

新しい家では、今朝早く来た父親と、局を休んで手傳に來て呉れた萩生さんとが、バタ／＼疊を叩いたり、雑巾がけをしたり、破れた障子を繕つたりして居た。大家さんは火鉢と茶道具とを運んで來て、にこ／＼笑ひながら、『何か要るものがありましたなら遠慮なく仰しやい。』と言つて、禿頭に頬冠をして尻をまくつた父親の姿を立つて見て居た。それも十二時頃には大抵片附いて、蕎麥屋からは蕎麥を持つて來る。萩生さんは買つて來た大福餅を竹の皮包から出して頬張る。其處に小路にガタ／＼と車の入る音がして、清三と母親の顔が見えた。

車力は繩を解いて、荷物を庭口から縁側へと運び入れる。父親と萩生さんが先に立つて箆笥や行李や戸棚や夜具を室内に運ぶ。長火鉢、箆笥の置場所を、あれのこれのと考へる。母親は襷がけになつて、勝手道具を片附けて居たが、其處に清三が外から來て、呼吸を切らして水を飲んだ。

母親は手を留めて、ぢつと見て、

『何うしたの？』

『少し手傳つたら、呼吸が切れて仕方がない。』

『お前は無理をしてはいけないよ。父さんがするから、餘り働かずに置きよ。』

此頃、殊に弱くなつた清三が、母親には此上ない心配の種であつた。

やがて何うやら彼うやら四邊が片附く。『かうして見ると、中々住心地が好い。』と父親は長火鉢の前で茶を飲みながら言つた。車力は庭の縁側に並んで、振舞はれた蕎麥をズル／＼啜つた。

清三と萩生さんは二階に上つて話した。南と西北とが明いて居るので風通しが好い。それに裏の大家の庭には、栗だの、柿だの、木犀だの、百日紅だのが繁つて居る。青空に浮いた白い雲が日の光を帯びて縁と共に光る。二人は足を投げ出して、暢氣に話をして居ると、其處へ母親が茶を淹れて持つて來て呉れる。大福餅を二人して食つた。

夜は清三は二階に寝た。久し振で家庭の團欒の楽しさを味つたやうな氣がする。雨戸を一枚明けたところから、縁を透したすゞしい夜風が入つて、蚊帳の青い影が微かに動いた。かれは眞中に廣く蒲團を敷いて、闇の空にチラ／＼する星の影を見ながら寝た。母親が階段を上つて來て、明放した雨戸をそつと行つたのはもう知らなかつた。

翌日は彌勒に出懸けて、人夫を頼んで、書籍寢具などを運んで來た。二階の六疊を書齋にきめて、机は北向に、本箱は壁につけて並べて置いて、三尺の床は古い幅物を懸けた。萩生さんが持つて來て呉れ

た菖蒲の花に千鳥草を交せて相馬焼の花瓶に挿した。『かうして見ると、學校の宿直室よりは、いくら好いか知れんね、』と荻生さんは四邊を見廻して言つた。親しい友達と同じ町に移轉して來たので、何となくうれしさに莞爾して居る。寺の本堂に寄宿して居る頃は、清三は荻生さんを唯情に篤い人、深切な友人と思つただけで、自分の志や學問を語る相手としては常に物足らなく思つてゐた。何うしてあゝ野心が無いだらう、何うしてあゝ普通の平凡な世の中に安心して居られるだらうと思つて居た。時には自分とは人間の種類が違ふのだとさへ思つたことがある。それが今では丸で變つた。かれは日記に、『荻生君はわが情の友なり、利害、道義以て此間を犯し破るべからず、』と書いた。また、『曾て此友を平凡に見しは、わが眼の發達せざりし爲めのみ。荻生君に比すれば、われは甚だ世間を知らず、人情を解せず、小畑加藤を此友に比す、今にして初めて平凡の偉大なるを知る、』と書いた。

前の足袋屋から天ぶら、大家から川魚の鹽焼を引越の祝ひとして重箱に入れて貰つた。いづれも『あいそ』といふ鱗の粗い腹の側の紅い色をした魚で、今が利根川で獲れる節だといふ。米屋、炭屋、薪屋なども通ひを持つて來た。父親は隣近所の組合を一軒々々廻つて歩いた。清三は午後から二階の六疊に腹這ひになつて、東京や、行田や、熊谷の友人達に轉居の端書を書いた。寺にも出かけて行つたが、丁度葬式で、和尚さんは忙しがつて居たので、轉居したことを知らせて置いて歸つて來た。

大家の主人は面白い話好きの人であつた。店は息子に譲つて、自分は家作を五軒ほど持つて、老妻と

二人で暮らして居るといふ暢氣な身分、釣と植木が大好きで、朝早く大きな麥稈帽子を冠つて、びくを下げて、釣竿を持つて、霧の深い間から木槿の赤く白く見える垣の間の道をてく／＼と出かけて行く。そして日の暮れる頃には、びくの中に金色をした鮒や鯉をゴチャ／＼入れて歸つて來る。店子はをり／＼挿鉢に見事な鮒を入れて貰ふことなどもある。釣に行かぬ時は、大抵腰を曲げて盆栽や草花などを丹念にいちくつて居る。さうかと言つて別に大したものがあるのでもない。楓に、樺に、檜に、蘇鐵位なものだが、それを内に入れたり出したりして、楽しみさうに眺めて居る。花壇にはいろ／＼西洋種も蒔いて、天竺牡丹や遊蝶草などが咲いて居る。コスモスも大分大きくなつた。また時には、跣足になつて垣の隅の畠を一生懸命に耕して居ることなどもあつた。

農繁休暇は尙暫し續いた。一週間で授業を始めて見たが、麥刈養蠶田植などがまだすつかり終らぬので、出席生徒の数は三分の一にも満たなかつた。で、今一週間休暇をつゞけることにする。清三は午後は二階の風通しの好い處でよく晝寝をした。餘り長く寝込んで西日に照されて、汗をぐつしよりかいてゐることなどもあつた。町も郊外も暫しの間はめづらしく、雨の降らぬ日には、大抵晝架を擔いで、寫生に出かけた。警察の傍の道に沿つた汚い溝には白い小さな花がポチ／＼咲いて、錆びた水に夢見るやうな赤いねむの花が微かに映つた。寺の門、町外れから見たる日光群山、桑畑の鶏、路傍の吹井、うどんひもかとは書いた大和障子などの寫生が段々出來た。

夜は大家の中庭の縁側に行つて話した。戦争の話がいつも出る。二三日前荻生さんから借りた戦争畫報を二三冊又貸して遣つたが、それに就いてのいろいろの質問が出る。『何うももう旅順が取れさうなものですがなア、』と、さももどかしさうに主人は言つて、『それに、陸軍の方も餘程行つたんでせう。第一軍は九連城を取つてから、ねつから進まんちやありませんか。第二軍は蓋平からもう餘程行つたんですか。』

清三は新聞や雑誌で得た知識で、第一軍第二軍が近い中に連絡して遼陽のクロバトキン將軍の本營に迫る話をして聞かした。旅順の方面については、海陸共に犇々と押寄せて、敵はもう袋の鼠になつて了つたから、此方の方は遼陽よりも早く片附く筈である。『來月の十五日位までには屹度取れるつて、校長なども言ふんです。私は今少し遅くなるかも知れないと思ひますけれど、何しろもう直きですな、』などと清三は言つて聞かせた。

『なんしろ、日本は小さいけれども、舉國一致ですから敵ひませんやな。何んな百姓でも、無智な人間でも、戦争つて言へば一生懸命ですからな……天子様も國民の後援があつて、嚙ぞお心丈夫でいらつしやるでせう、』と感嘆したやうな調子で言つて、『日本は昔からお武士で出來た國ですからなア!』

大家はまた釣の話をして聞かせることもあつた。清三が胃腸に悩んで居るとかいふのを聞いて、『何うです、一つ一緒に出かけませんか。さういふ病氣には、氣が落付いてごく好いですがな。』こんなことを言つて誘つた。其場所は此處から一里位行つた處で、田の處々に堀切がある。其處には蘆荻が人を

かくす位に深く生茂つてゐる。鮒や鯉やたなごなどの澤山居ると居ないのがある。その居る處を大家さんはよく知つて居た。

二人で話して居る縁側の上に、中老の品の好い細君は、岐阜提灯を吊してくれた。

時には母親と荻生さんと三人つれ立つて町を歩くこともあつた。今年は『から梅雨』で雨が少なかつた。六月の中頃に既に寒暖計が八十九度まで上つたことがあつた。七月に入つてから、俄かに暑さが烈しく、田舎町の夜には、縁臺を店先に出して、白地の浴衣をくつきりと闇に見せて、團扇をパタパタさせて居る群が其處にも此處にも見えた。母親は買物をする町の店に熟して居ないので、さうした夜の散歩には、荻生さんが此處が乾物屋、此處が荒物屋、呉服屋では此家が一番堅いなどと教へて呉れた。下駄屋の店には、中年の上さんが下駄の鼻緒の並んだ中に白い顔を見せて坐つて居た。鍛冶屋にはランプが薄暗くついて奥では話聲がきこえて居た。水のやうな月が白い雲に隠れたり顯はれたりして、其度毎に纏れた三つの影が街道に映つたり消えたりする。

用水の橋の上は涼しかった。納涼に出た人がぞろぞろと通る。冬や春は川底に味噌漉のこはれやバケツの捨てたのや、陶器の缺らなどが汚く殺風景に見えて居るのだが、此頃は水が一杯に漲り流れて、それに月の光や、橋の傍に店を出して居る水屋の提灯の灯影がチラチラと映る。流れる水の影が淡く暗く見える。向うの料理屋からは三絃の音が聞えた。

三人は水店に休んで行くこともある。母親は歸りに、八百屋に寄つて、茄子や白瓜などを買ふ。局の前で、清三は母親を先に歸して、荻生さんの室で十時過まで話して行くことなどもあつた。

五十一

七月十五日の日記にはかれはかう書いた。

『杜國亡びてクルウゲル今又歿す。瑞西の山中にて肺に斃れたるかれの遺體は、故郷のかれが妻の側に葬らるべし。英雄の末路、言は陳腐なれど、事實は常に新たなり。英雄クルウゲル！ 元トランスヴァウル共和國大統領ホウル・クルウゲル歿す。歴史は常にかくの如し。』

五十二

醫師は矢張胃腸だと言つた。けれど薬はねつから効がなかつた。咳が絶えず出た。體がだるくつて仕方がなかつた。ことに、熱が時々出るのに一番困つた。朝は病氣が直つたと思ふほどいつも氣持が好いが、午後からは屹度熱が出る。止むなく發汗劑を服むと、汗がびつしよりと出て、其心持の悪いこと一通りでない。顔には血の氣がなくなつて、肌が厭に黄ばんで見える。かれは幾度も蒼白い手を返して見た。『お前本當にどうかしたのぢやないかね。確かりした醫師にかゝつて見る方が好いんぢやないかね。』

母親は心配さうにかれの顔を見た。

學校はやがて始まつた。暑中休暇まではまだ半月ほどある。それに七時の授業始めなので、朝が忙しかつた。母親は四時には遅くも起きて竈の下を焚附けた。清三は藥瓶と辨當とをかゝへて、例の道をしてくと歩いて通つた。一里半の通ひ馴れた路——それにもかかれは著しい疲勞を覺えるほどその體は弱くなつて居た。それに、此頃では滋養品を成たけ多く取る必要があるので、毎日牛乳を二合、鶏卵を五箇、その他肉類をも食つた。移轉の借金をまだ返さぬのに、毎日かうして少なからざる金がかゝるので、かれの財布は常に空であつた。馬車に乗りたくも、そんな餘裕はなかつた。

五十三

八阪神社の祭禮は賑かであつた。當年は不景氣でもあり、國家多事の際でもあるので、山車も屋臺も出来なかつたが、それでも近在から人が出て、紅い半襟や淺黄の袖口やメリヤスの帯などがぞろ／＼と町を通つた。さういふ人達は、水店に寄つたり、瓜店の前で庖丁で皮を剥いて貰つて立食ひをしたり、よせ切の集つた呉服屋の前に長い間立つてあれのこれのといちくり廻したりした。大きな朱塗の獅子は町の若者にかつがれて、家から家へと惡魔をはらつて騒がしくねり歩いた。

清三が火鉢の傍に居ると、傍の小路に、わいしよわいしよといふ騒がしい懸聲がして、突然獅子が入

つて来た。草鞋をはいた若者は、何の會釋もなく、そのまゝづか／＼と疊の上にあがつて、

『やあ！』

と大きな獅子の口をあけて、其儘勝手元へ出て行つた。

母親は紙に包んだおひねりを獅子の口に入れた。一人息子の爲めに、悪魔を拂ひ給へ！ と心に念じながら……。

五十四

母親は二階の床の間に、燃ゆるやうな撫子と薄紫のあざみと眞白なおかとのをと黄いこがねをぐるまを交せて生けた。時には窓の處にちつと立つて、夕暮の雲の色を見て居ることもあつた。其のやせた後姿を清三は悲しいやうなさびしいやうな心地でちつと見守つた。

父親は二階の格子を取外して呉れた。光線は流るゝやうに一室に漲り渡つた。窓の下には足長蜂が巢を醸してブン／＼飛んで居た。大家の庭樹のかけには、一本の若竹が伸びて、それに朝風夕風が裏やかに通つた。

五十五

五月六日には體量十二貫五百目、此頃郵便局でかゝつて見ると、單衣のまゝで十貫六百目。萩生さんは十三貫三百目。

ある日、田原ひで子が學校に来て手紙を小使に頼んで置いて行つた。手紙の中には、手づから折つた黄い野菊の花が封じ込んであつた。『野の菊は妾の愛する花、師の君よ、師の君よ、此花をうつくしと思ひたまはずや。』と書いてあつた。

暑中休暇前一二日の出勤は、かれに取つてことに辛かつた。其の初めの日は歸途に驟雨に逢ひ、後の一日は朝から雨が横さまに降つた。かれは授業時間の間々を宿直室に休息せねばならぬほど困憊してゐた。それに今月の月給だけでは、藥代、牛乳代などが拂へぬので、校長に無理に頼んで三圓だけ都合して貰つた。

旅順陥落の賭に負けたからとて、校長は鶏卵を十五箇呉れたが、それは實は病氣見舞のつもりであつたらしい。教員達は『もう何の彼のと云つても旅順はちきに相違ないから、其時には休暇中でも、是非學校に集つて、萬歳を唱へることにしよう。』などと言つて居た。清三は八月の月給を月の二十一日に貰ひたいといふことを豫め校長に頼んで、馬車に乗つて辛うじて歸つて来た。

暑中休暇中には、何うしても快復させたいといふ考で、清三は醫師を變へて見る氣になつた。此度の醫師は深切で評判な人であつた。診察の結果では、何うもよく解らぬが、十二指腸かも知れないから、一週間ばかり経つて大便の試験をして見ようと言つた。肺病ではないかと訊くと、さういふ兆候は今のところでは見えませんと言つた。今のところといふ言葉を清三は氣にした。

五十六

滋養物を取らなければならぬので、錢も無いのに、いろ／＼なものを買つて食つた。鯉、鮒、鰻、牛肉、鶏肉——ある時はいさぎを賣りに來たのを十五錢に負けさせて買つた。嘴は淺綠色、羽は暗褐色に淡褐色の斑點、長い足は美しい淺綠色をして居た。それを粗く潰して、骨をト／＼と音させて叩いた。それにすらかれは疲勞を覺えた。

泥鰌も百匁位づつ買つて、猫にかゝられぬやうに桶に重石をしてゴチャ／＼入れて置いた。十尾位宛を自分で割いて、鶏卵を引いて煮て食つた。寺の後ろにはこの十月から開通する東武鐵道の停車場が出來て、大工が頻りに鉋や手斧の音を立て、居るが、清三は氣分の好い夕方などには、てく／＼出かけて行つて、ほつねんとして立つてそれを見て居ることがある。時には向うの野まで行つて花をさがして來ることもある。えのころ、おひしば、ひよどりさう、おとぎりさう、こまつなぎ、なでしこなどがあつた。

新聞には其頃大石橋の戰鬪詳報が載つてゐた。遼陽！ 遼陽！ といふ文字が到る處に見えた。

ある日、母親は急性の胃に侵されて、裁縫を休んで寢て居た。物を食ふとすぐもどした。そして吐逆も烈しく出た。土用の明けた日で、秋風の立つたのが何處となく木の葉のそよぎに見える。座敷へ射し入る日光から考へて、太陽も少しは南に廻つたやうだなどと清三は思つた。其處へ郁治がひよつくり高等師範の制帽を冠つた姿を見せた。此間中から歸省して居て、いづれ近い中に新居を訪問したいなどといふ端書を寄越したが、今日は加須まで用事があつて遣つて來たから、ふと來る氣になつて訪ねたといふ。郁治は清三の瘦せ衰へた姿に少なからず驚かされた。それに顔色の悪いのが殊に目立つた。

親しかつた二人は、夕日の光線の射込んだ二階の一間に相對して坐つた。相變らず親しげな調子であるが、言葉は容易に深く觸れようとはしなかつた。時々話の途絶えて黙つて居ることなどもあつた。

『小畑は此間日光へ植物採集に出かけて行つたよ。』

こんなことを言つて、郁治は途絶え勝ちな話をつけた。

清三は、『君、歸つたら、ファザアに一つ頼んで見て呉れ給へな。どうもかう體が弱くつては、一里半の通勤は随分辛いから、この町か、近在かに何處か轉任の口はないだらうかつて……彌勤ももう随分古參だから、居心地は悪くはないけれど、いかにしても遠いからね、君。』

かう言つて轉任運動を頼んだ。

夕飯には昨夜猫に取られた泥鰌の残りを清三が自分で割いて御馳走した。母親が寝て居るので、父親が水を汲んだり米を炊いたり漬物を出したりした。

郁治は見兼ねて餘程歸らうとしたが、彼方此方を歩いて疲れて居るので、一夜泊めて貰つて行くことにした。

『郁さんが折角お出下すつたのに、生憎私がこんな風で、何も御馳走も出来なくつて、本當に申譯が無い。』

しげくと母親は郁治の顔を見て、

『郁さんのやうに、うちのも丈夫だと好いのだけれど……何うも弱くつて仕方がないですよ。……それに郁さんなどは、學校を卒業さへすれば、どんなにも立派になれるんだから、母さんももう安心なものだけれど……』

染々とした調子で言つた。

美穂子の話が出たのは、二人蚊帳の中に入つて寝てからであつた。學校を出るまではお互に結婚はないが、親と親との間の口約束はもうすんだといふことを郁治は話した。

『それはお目出度い。』

と清三が眞面目に言ふと、

『約束をきめて置くなんて、君、つまりぬことだよ。』

『何うして?』

『だつて、お互に弱點が見えたり何かして、中途で厭になることがないとも限らないからね。』

『そんなことはいかんよ、君。』

『だつて仕方がないさ、さういふ氣にならんとも限らんから。』

『そんな不眞面目なことを言つてはいかんよ。君たちのやうに前から氣心も知れば、お互の理想も知つて居るのだから、苦情の起りつこはありやしないよ。僕なども同じ仲間だから、君等の幸福なのを心から祈るよ。美穂子さんにも久しく逢はないけれど、僕がさう言つたつて言つて呉れ給へ。』

いつもの軽い言葉とは聞かれぬほど眞面目なので、

『うむ、さう言ふよ。』

と郁治も言つた。

蚊帳の外のランプに照された清三の顔は蒼白かつた。咳が絶えず出た。熱が少し出て來たと言つて、枕元に持つて來て置いた水で頓服劑を飲んだ。二人の胸には、中學校時代『行田文學』時代のことと思出されたが、しかも二人とも何事をも語らなかつた。郁治の胸には華やかな將來が浮んだ。『不幸な友!』といふ同情の心も起つた。

餘り咳が出るので、脊中を叩いてやりながら、

『何うもいかんね。』

『うむ、治らなくつて困る。』

汗が寝巻を透した。

『石川は何うした？』

と、暫くしてから、清三が訊いた。

『つい此間、東京から歸つて来た、』と郁治は言つて、『餘り道樂をするものだから、うちでも困つて、今度足留めに、愈々嫁さんが来るさうだ。』

『何處から？』

『何でも川越の財産家で跡見女學校に居た女ださうだ。容色望みといふ條件でさがしたんだから、屹度別嬪さんに違ひないよ。』

『先生も變つたね。』

『本當に變つた。雑誌をやつてる時分とは丸で違ふ。』

それから同窓の友達の話がいろ／＼出た。窓からは涼しい風が入る……。

翌朝、郁治が眼を覺した頃には、清三は下階で父親を手傳つて勝手元をして居た。今更ながら友の衰

弱したのを郁治は見た。小畑に聞いたが、これほどとは思はなかつた。朝の膳には味噌汁に鶏卵が落ちてあつた。清三は牛乳一合にパンを少し食つた。二人は二階にまた坐つて見たが、もうこれと言つて話もなかつた。

郁治が歸る時に、

『それちや學校の話、一つ運動して見て呉れ給へ。』

清三は繰返して頼んだ。

母親の病氣は捗々しくなかつた。三度々々食物も満足に咽喉を通らなかつた。父親が商賣に出た後では、清三がお粥を拵へたり好きなものを通りに出て買つて来て遣つたりする。また父親と縁側に東京仕入の瓜を二つ三つ桶に浮かせて、皮を厚く剥いて二人して旨さうに食つて居ることもある。さういふ時には清三は皿に瓜の裂いたのを一片三片入れて、食ふ食はぬに拘らず、先づ母親の寝てる枕元に置いた。母子の情合は病んでから一層厚くなつたやうに思はれた。何うかすると、清三の顔をちつと見て、母親が涙をこぼして居ることもあつた。清三はまた清三で、減多に床に就いたことのない母親の長い病氣を氣にして、醫師に懸ることをうるさく勧めると、『お前の藥代さへ大變なのに、私まで懸つては、それこそ仕方がない。私のはもう治るよ、明日は起るよ、』と母親は言つた。

二階の間は新聞が飛ぶほど風が吹通すこともあれば、裏の樹の上に夕月が美しくかゝつて見えるこ

ともあつた。けれど東が塞がつて居るので、朝日には常に縁遠く清三は暮した。朝の眺めとしては、早起をした時、北窓の雲に朝日が燃えるやうにteri榮えるのを見る位なものであつた。

彌勒野は此頃は草花がいつも盛りであつた。清三は關さんに手紙を書いた。『此頃は座敷の運動のみにて、野に遠ざかり居り候へば、草花の盛りも見ず、遺憾に候。彌勒野、才塚野、君の採集にはさぞめづらしき花を加へ給ひしならん。秋海棠今歳は花少く、朝顔もかはり種なく、さびしく暮し居り候。』毎日二三回づつの下痢、胃は常に烈しき渴きを覺えた。動かすにちつとして居れば、健康の人といくらも變らぬほどに気分が快いが、勞働すれば、すぐ疲れて力がなくなる。醫師は一週間目に大便の試験をしたが、十二指腸蟲は一疋も居ず、ペン蟲の卵が一つあつたばかりであつた。けれど、これは寄生蟲でないから害はない、普通健康體にもよくなる蟲だと醫師はのんきなことを言つた。母親の病氣はまだすつかり治らなかつた。もう彼は十一二日目になる。按摩を頼んでもませて見たり、御祈禱を近所の人か遣つて來て上げて呉れたりした。次手に清三もこの御祈禱を上げて貰つた。

清三は此頃から夜が眠られなくて困つた。いよく不眠症の容易ならざる病狀が迫つて來たことを醫師は漸く氣が付き始めた。旅順の海戦——彼我の勝敗の決した記憶すべき十日の海戦の詳報の頻りに出る頃であつた。アドミラル、トオゴウの勇しい名が世界の新聞雜誌に記載せらるゝ頃であつた。

醫師はある日遣つて來て、あわて、言つた。『どうも永久的衰弱ですからなア。』かう言つてすぐ言葉を續けて、『餘り無理をしてはいけません。第一、少しよくなつても、一里半も學校へ通つてはいけません。一年位は海岸へでも行つて居ると好いですがな。』それから葡萄酒を飲用することを勧めた。

五十七

醫師の言葉を書いて、是非九月の學期までに近い所に轉任したいが、君に一任してよきや、自から運動すべきやと郁治の許へ書いてやると、折かへして返事が來て、視學に直接に手紙をやれ、羽生の校長にも聞いて見ろ、自分も其中出かけて運動をしてやると書いてあつた。

段々秋風が立始めた。大家で飼つて置いたくさひばりが夕暮になるといつも好い聲を立て、鳴いた。床柱の薔薇の一輪挿、それよりも簀戸を透して見える朝顔の花が友禪染のやうに美しかつた。

ある日、午後四時頃の暑い日影を受けて、例の街道を彌勒へ行く俣があつた。それには清三が乗つて居た。月の俸給を受取る爲めにわざ／＼出懸けて來たのであつた。學校はがらんとして、小使も居なかつた。關さんも、昨日浦和へ行つたとて不在であつた。

宿直室には半は夕日が射し透つた。テニスを遣るものも無いと見えて、網もラケットも縁側の隅に徒らに束ねられてある。事務室の硯箱の蓋には塵埃が白く、椅子は卓の上に載せて片附けられたまゝに

なつて居る。影を長く校庭に曳いた清三の瘦せ果てた姿は、徐かに廊下をたどつて行つた。

教室に入つて見た。ポオルドには、授業の最後の時間に數學を教へた數字が其儘になつて居る。「15+15=30」と書いてある。チヨオクも其時置いたまゝになつてゐる。此處で生徒を相手に笑つたり怒つたり不愉快に思つたりしたことを清三は思ひ出した。東京へ行く友達を羨み、人しれぬ失戀の苦みに悶えた自分が、丸で他人でもあるかのやうにはつきりと見える。色の白い、肉づきの好い、赤い長襦袢を着た女も思ひ出された。

オルガンが講堂の一隅に塵埃に白くなつて置かれてあつた。何か久し振で鳴らして見ようと思つたが、只思つただけで、手を下す氣にはなれなかつた。

やがて小使が歸つて來た。かれも鳥渡見ぬ間に、清三のいたく衰弱したのに吃驚した。

じろくくと無氣味さうに見て、

『何うも、病氣が好くねえかね?』

『何うもいかなから、近い處に轉任したいと思つて居るよ……。今度の學期にはもう來られないかも知れない。長い間、お馴染になつたが、何うも仕方がない……』

『それまでには治るだべいかな。』

『どうも難かしい——』

清三は嘆息をした。

小川屋にはもう娘は居なかつた。此春、加須の荒物屋に嫁いで行つた。おばあさんが茶を運んで來た。

すぐ目につけて、

『林さんなア、何うかしたかね。』

『どうも病氣が治らなくつて困る。』

『それア困るだね。』

染々と同情したやうな言葉で言つた。夕飯は粥にして貰つて、久し振でさいの羹附を取つて食つた。庭には鶏頭が夕日に赤かつた。かれは柱に凭りかゝりながら、野を過ぎて行く色ある夕の雲を見た。

五十八

轉任に就いては、郁治も來て運動して呉れた。町の高等も尋常も聞いて見たが、缺員がなかつた。彌勒の校長からは、『不本意ではあるが、病氣なれば仕方がない。好いやうに取計らうから安心し給へ、』と言つて來た。けれど他から見るとは、もう教員が出来るやうな體ではなかつた。

ある日、荻生さんが、母親に、

『どうも今度の病氣は用心しないとイケないつて醫師が言ひましたよ。何うも肺といふ徴候はないや

うだが、唯の胃腸とも違ふやうなところがあると言つてました。何にしても足に腫氣が来たのはよくないですな……。醫師の見立が違つてゐるのかも知れませんが、行田の原田に伴れて行つて見せたら何うです？ 先生は學士ですし、評判が好い方ですから。』

そして、さういふ積りがあるなら、自分が一日局を休んで連れて行つて遣つても好いと言つた。

『何うも、御深切に……お禮の申上げようもない。』

母親の聲は涙に曇つた。

彌勒へ俸給を取りに行つた翌日あたりから、脚部大腿部にかけて夥しく腫氣が出た。足も今までの足とは思へぬほどに甲がふくれた。それに、陰囊も其影響を受けて、起居にも段々不自由を感じて来る。

醫師は罨法劑と罨丸帶とを與へた。

蘇鐵の實を煎じて飲ませたり、御祈禱を枕元であげて貰つたり、不動岡の不動様の御符を戴かせたり、苟も効驗があると人の教へて呉れるものは、何んなことでもして見たが、効がなかつた。秋風が立つにつれて、容體の悪いのが目に立つた。

やがて孟蘭盆が来た。町の大通りには草市が立つて、苧殻や藪蓆やみそ萩や草花が並べられて、在郷から出て来た娘達がぞろ／＼通つた。寺の和尚さんは紫の衣を着て、小僧をつれて忙しさに町を歩いて行つた。茄子や白瓜や胡瓜でこしらへた牛や馬、其の尻尾には畠から取つて来た玉蜀黍の赤い毛を使

つた。何處の家でも苧殻で杉の葉を編んで、佛壇を飾つて、代々の位牌を掃除して、萩の餅やら團子やら新里芋やら玉蜀黍やら梨やらを供へた。

女の兒は新しい衣を着て、嬉々として彼方方に遊んで居た。

十三日の夜には迎へ火が家々で焚かれる。通りは警察が喧しいので、昔のやうに大仕掛な焚火をするものもないが、少し裏町に入ると、薪を高く積んで火を燃して居る家などもあつた。周圍に集つた子供等は面白がつてそれを飛んだり跨いだりする。清三の家では、其日父親が古河へ行つてまだ歸つて来なかつたので、母親は一人でさびしさうに入口にうづくまつて、苧がらを集めて形ばかりの迎へ火をした。大家の入口にも今少し前焚いた火の残りが赤く闇に見える。

軒には昨年盆に清三が手づから書いた菊の繪の燈籠が下げた。清三は便所へ通ふのに不便なので、四五日前から、床を下の六疊に移した。

風にゆらぐ盆燈籠をかれはちつと見て居た。大家の軒の風鈴の鳴る音が微かに聞える。佛壇には灯がついてゐて、蓮の葉の上に供へた團子だの、茄子や白瓜でつくつた牛馬だの、眞鍮の花立に挿したみそ萩などが額縁に入れた繪のやうに見える。明るい佛壇の中は何だか別の世界でもあるかのやうに清三には思はれた。

母親が其處へ入つて来て、

『病気でないと、政一（弟の名）の處にもお参りに行つて貰ふんだけど……今年花も上げて呉れる人もないつてさびしがつて居るだらう。』

『本當にさ……』

『父さんが都合が好ければ行つて貰ひたいと思つて居ただけ……』

『本當に、遠くなつて淋しがつて居るだらう。』

清三は亡くなつた弟を染々思つた。

『明日あたり私がお参りに行かうかとも思つて居るけれど……』

『ナアに、治つてから行くから好いさ。』

暫く黙つた。

母子の胸には今月の拂のことが支へて居る。薬代、牛乳——それだけでもかなり多い。今月は父親のかせぎがねつから駄目だつた上に、母親も病気で毎月ほど裁縫をしなかつた。先程、醫師から勘定書を書生が持つて來たのを母親は申譯なさうにことわつて居た。

『なアに、父さんが歸つて來れば、何うにかなるから、心配せずにお出でよ。』
と母は其時言つた。

父親が歸つて來ても駄目なことを清三は知つて居る。

『病氣さへしなけれやなア！』

と清三は突然言つた。

やがて言葉をついで、『こんな病氣にかゝりさへしなけれや、今年はちつとは母さんにも樂をさせられたのになア！』

母親はオド／＼して、

『そんなことを思はない方が好いよ。それより養生して……』

『ナアに、こんな病氣に負けて居りやせんから、母さん。心配しない方が好いよ。今死んでは、生れて來た甲斐がありやしない。』

『本當ともねえ、お前。』

『世の中と謂ふものは思ひのまゝにならないもんだ！』

言葉は強かつたが、一種の哀愁は佛壇の灯のみ明るい一室に充ち渡つた。

隣近所では病人が日増に悪くなるのを知つた。醫師が毎日鞆を下げて遣つて來る。菰生さんが心配さうな顔をしてちよい／＼裏から入つて來る。一週間前までは、蒼白い瘦せ果てた顔をして頭髪を蓬々させて、其處等をぶら／＼して居る病人の姿を人々はよく見懸けたが、此頃では、もうどつと床に就いて、

枕を高く、瘦せこけて阜斯のやうになつた手を蒲團の外に投出すやうにして寝て居るのが垣の間から見える。井戸端などで母親に容體を聞くと、『何うも少しでも好い方に向つてくれると好いのですけれど……』と言つて、さもく心配に堪へぬやうな顔をした。

肺病だらうといふことは誰も皆前から想像して居た。『何うも咳嗽の出るのが變だと思つてました、』と隣の足袋屋の細君が言つた。『何うも肺病だつてな、あの若いのに氣の毒だなア。話好きな面白い人だのに……』と大家の主人も老妻に言つた。『一人息子をあれまで育て、これからかゝらうといふ矢先にそんな悪い病氣に取つかれては……』と老妻は染々と同情した。彼方此方から見舞を持つて行くものなども段々多くなる。大家の主人がある日一日釣つて來た鮒を挿鉢に入れて持つて行つてやるとめづらしがつて、病人はわざく起きて來て見た。それから梨を持つて來るものもあれば、林檎を持つて來るものもある。中には五十錢銀貨を一つ包んで來るものもあつた。

轉任の難かしいこと、假令轉任が出來ても、この體では毎日の出勤は覺束ないといふことが次第に病人にも解つて來た。かれは郁治に宛て、病氣で休んでるれば何ヶ月間俸給が下るかといふことを父の郡視學に聞いて貰ふやうに手紙を書いた。やがて其返事が來て、埼玉縣令十號の十三條に六十日の病氣缺席は全俸（願書診斷書附）その以後二ヶ月半俸としてある事を報じて來た。

五十九

行田の町の中程に、西洋造りのペンキ塗の際立つて目につく家があつた。陶器の表札には醫學士原田龍太郎と鮮かに見えて、門にかけた原田醫院といふ看板はもう古くなつて居た。

午前十時頃の晴れた日影は硝子を透した診察室の白いカーテンを明るく照した。

診察が終つて、其處から父親と荻生さんとに扶けられて出て來たのは、二三日來益々衰弱した清三であつた。荻生さんが萬一を期して、ヤイ／＼言つて伴れて來た深切は徒勞に歸した。醫師は父親と友とに絶望的宣告を與へたやうなものであつた。

『今少し早く何うかすることが出來さうなものだつた……』

醫師はかう言つた。

『矢張、肺でせうか。』

『肺ですな……もう兩方共悪くなつてゐる！』

荻生さんは何うすることも出來なかつた。眼眩がして其處に立つて居られぬ病人を、殆ど抱へるやうにして俥に乗せた。『俥に乗せて伴れて來るのはちとひどかつたね、』と言つた醫師の言葉を思出して、

『醫師を招んでは俵代が大變だから……五圓では上らないから、私が俵に乗せて伴れて行つて上げる、』と言つたことを悔いた。

其の二里の街道には、矢張旅商人が通つたり、機廻りの車が通つたり、自轉車が走つたりして居た。尻を捲つて赤い腰巻を出して歩いて行く田舎娘もあつた。もう秋風が野に立つて、背景をつくつた森や藁葺屋根や遠い秩父の山々が鮮かにはつきり見える。豊熟した稻は涼しい風に靡き渡つた。幌をかけた俵は徐かに街道を輾つて行つた。

七色の風船玉を賣つて歩く老爺の周圍には、村の子供が集つて居た。

六十

寺の和尚さんが鶏卵の折を持つて見舞に來た。

和尚さんも暫く逢はぬ間に、かうも衰弱したかと吃驚した。

わざと戦争の話などをする。

『旅順が何うも取れないですな。』

『何うしてかう長引くんでせう。』

『ステツセルも一生懸命だと見えますな。また兵力が足りなかつて第八師團も今度旅順に向つて發つ

といふ噂ですな。』

『第九に第十二に、第一に、……それちやこれで四個師團……』

『どうもあそこを早く取つて了はないでは仕方がないんでせう。』

『中々頑強だ！』

と言つて、病人は咳嗽をした。

やがて、

『遼陽の方は？』

『あつちの方が早いかも知れないつて言ふことですよ。第一軍はもう楡樹林子を占領して遼陽から十里の處に行つてますし、第二軍は海城を占領して、それからもつと先に出てるやうですし……』

『本當に丈夫なら、戦争にでも行くんだがなア！』

と清三は慨嘆して、『國家の爲めに勇ましい血を流してゐる人もあるし、千載の一遇、國家存亡の時に邂逅して、廟堂の上に立つて天下と共に憂ひてゐる政治家もあるのに……かうして碌々として、病氣で寝てるのは實に情けない。……和尚さん、人間もさまざまですな。』

『本當ですな……』

和尚さんも笑つて見せた。